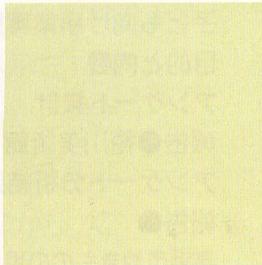
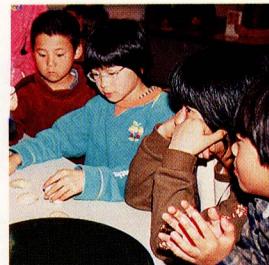
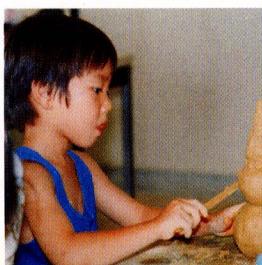
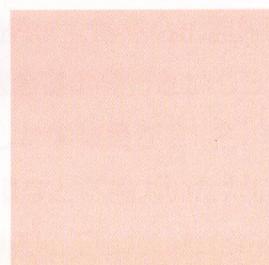
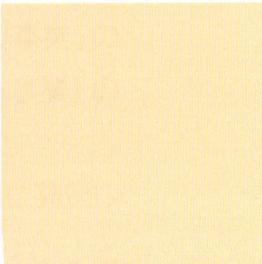


# あいち子ども 体験ミュージアム事業報告書



# あいち子ども 体験ミュージアム事業報告書



# C O N T E N T S

もくじ

2

はじめに

3

**あいち子ども体験ミュージアム事業の概要と経緯**

4

子どもと博物館研究会の活動

7

あいち子ども体験ミュージアム事業

news letter

## あいち子どもミュージアムキャラバン

20

どろんこやきもの体験隊

主体館●愛知県陶磁資料館

報 告●野焼き○愛知県陶磁資料館 佐藤一信  
大 窯○愛知県陶磁資料館 神崎かず子

26

わたしのパリはコレ！

主体館●稻沢市立荻須記念美術館

報 告●稻沢市立荻須記念美術館 山田美佐子

31

漁師は海のおさかな博士

主体館●豊橋市自然史博物館

報 告●豊橋市自然史博物館 長谷川道明

36

焼く・煮る・炊くは食の基本！

主体館●安城市歴史博物館

報 告●自然○豊橋市自然史博物館 藤原直子  
土器○安城市歴史博物館 岡安雅彦

43

編む・織る！縄文・弥生の布！

主体館●一宮市博物館

報 告●岡崎市美術博物館 天野幸枝

48

キャラバン総集編

報 告●一宮市博物館 久保禎子

51

キャラバン参加者一覧

## 子ども向け事業実態調査

目的と内容

57

アンケート集計

報告●徳川美術館 加藤啓子

アンケート分析結果

80

報告●

高浜市やきものの里かわら美術館 橋本久美

これからの子どもと博物館

82

～その課題と展望

報告●名古屋市博物館 浅野弘子

参加記

84

事業参加者・研究会員一覧

94

あとがき

95

謝辞

96

愛知県博物館協会の概要

連絡先一覧・奥付

表紙絵●キャラバン回想

鳳来寺山自然科学博物館学芸員 加藤貞亨

この本は、平成12年度文部省「親しむ博物館づくり事業」の委嘱を受け実施した『あいち子ども体験ミュージアム事業』の事業報告書である。

この事業は、愛知県博物館協会内に平成12年5月に発足した子どもと博物館研究会に委嘱され、6つの「キャラバン」と称するワークショップと、愛知県博物館協会加盟館園に対する子ども向け事業実態調査、本報告書の発行という3つの柱から成り立っている。事業に参加した学芸員が21名、キャラバン実施館が5館、また、職員の派遣などご協力いただいた博物館、美術館が17館、アンケート調査にご協力いただいた加盟館が102館である。

これまで、さまざまな子ども向け事業の方向性が提示されてきた中で、県単位でのまとまりを持った活動はなかったと言える。我々は、県市町村という行政体の枠を越えて、さまざまな分野の学芸員が集まり、それぞれの個性でぶつかりながら、これまでにないワークショップを創出することをこの事業の目的とした。いろいろな館にまたがることによるつまづきや失敗も多々あり、道のりは平坦ではなかったが、なんとか1年を乗り越え、ここに報告書を刊行することができることとなった。

この事業を実施するに際しては、事業を委嘱して下さった文部科学省、文部科学省社会教育課の方々をはじめ、多くの機関と関係者にご指導・ご協力をいただきました。ここに心より厚くお礼を申し上げます。

2001年3月 愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

# あいち子ども体験ミュージアム事業の概要と経緯

一宮市博物館●久保禎子

## ●「子ども、子ども！」に惑わされ

最近「子ども、子ども」と世間が騒がしい。「こんなに騒がしくなる前から、子どもとはつきあっているんだ！今さら何を！」という学芸員は大勢いるはずである。子どもとのかかわり方に意識されたスタンスがなかったにせよ、紙に書いた理論が残っていないとしても、「このことを子どもに伝えたい」「自分のやってきた学問はこんなにおもしろいんだ」「博物館を見て欲しい」「思いを込めて企画した展示を見て欲しい」などなど、単純には思いつかないような理論的、感情的いざれもの多様な目的意識で行われてきたのだと思う。

子どもと博物館とのかかわりは今に始まったことではなく、1948年『新科学教育の課題』で木場一夫が記した「自然研究と路傍博物館」という文章の中に簡潔かつ明確な理念と方法が述べられているし、戦前の「児童博物館」に遡ることができる。しかし、現在の博物館での子どもブームはこれらの流れとは無関係のところで始まり、ブームのきっかけは自然破壊、地域社会の崩壊、核家族化など、自然とのかかわり、人とのかかわり、強いては人間社会とのかかわりを失いつつある子どもの将来への不安だったのではないかと考えている。その火付け役となったのがアメリカのチルドレンズミュージアムへの関心の高まりであり、「ハンズ・オン」という言葉であり、体験学習を唱え続けた学校であり、子どもたちの「生きる力」を育てようとしている文部科学省なのである。キッズプラザ大阪などのチルドレンズミュージアムが日本でもオープンしたことは、これに拍車をかけたと言える。館内で大騒ぎをし、大切な物を触りまくる子どもたちに対し、疎ましいと思うことはあっても、「何かしよう！」とは思えない学芸員も多かったはずである。しかし、ここ数年、「子ども」を意識する学芸員が増加してきたのは確かである。

しかし、一方で、「楽しい」「おもしろい」が優先となり、博物館の本質的な役割や理念が後回しになっている状況に「何か違う」という不満がくすぶっていたのも事実である。それは、学問的理論武装や最新情報を盛り込むなど、忙しさにからけて突き詰めるところまで突き詰めずに企画を立案し、「この程度でも仕方がない」と自己暗示をかけ手抜きをしてきた自分自身の怠慢である。

「このままではいけない」という思いと、1人や2人ではできないことを、さまざまなバックボーンを持つ学芸員の寄せ集まりであれば、いい加減に済ませてしまっていた

部分をもっと専門的にできるのではないか。そう考えるようになつたのである。

## ●子どもと博物館研究会の発足

愛知県博物館協会子どもと博物館研究会は、意識の奥底では現在の流れの中で始まったと言える。ただ、研究会という組織を愛知県博物館協会内に発足した理由は、小規模な1館ではなく、何館もの、さまざまな分野での、さらに得意技を持った学芸員が集まることによって、新しい方向性が見いだせるのではないかと考えたからである。以下がその発足の経緯である。

平成14年度から学校の完全週5日制が始まるのにともない、文部省は「全国子どもプラン（緊急3ヵ年戦略）」を策定、これに基づき生涯学習局社会教育課が平成11年3月1日付で「親しむ博物館づくり事業」の募集をおこなつた。一方、昨今、自然史・科学・美術系博物館では、展示やワークショップなどにおいて子ども向けプログラムが数多く実施され、さまざまな試みや研究がおこなわれている。歴史系博物館の講座などでも、子どもを対象としたプログラムを散見するようになった。そこで、こうした現状と理論の双方を踏まえ、実施可能な子ども向けプログラムを創出することを目的として、研究会を発足する。

当初は予算もなく、研究会や見学会をしながら、ニューズレター、研修録『活きている博物館』の発行、活動最新情報をホームページ（アドレス）で紹介するなど細々と活動を続けてきた（6ページ一覧参照）。平成12年度は文部省「親しむ博物館づくり事業」の委嘱を受け、『あいち子ども体験ミュージアム事業』の展開をすることことができた。

## ●『あいち子ども体験ミュージアム事業』とは

委嘱を受けた『あいち子ども体験ミュージアム事業』は以下の3つの骨子からなる。

### （1）あいち子どもミュージアムキャラバン（右一覧参照）

これは、愛知県博物館協会加盟館園から5館をピックアップして行う、館園種・分野を超えた県内公募の子どもの体験・見学キャラバンである。日数は16日間に及び、その結果を隨時ファクスレターCEMAで、各加盟館園にお知らせした。

## (2) 子ども向け事業実態調査

愛知県博物館協会加盟 123 館園を対象に、子ども向け事業に関する現在までの実績、将来の予定、各館園および各事業の政治・経済・思想的背景等を調査。書面によるアンケート調査を第1段階とし、その調査結果を踏まえて、面談によるヒアリング調査を第2段階に実施したものである。123館中 102館の回答があり、回答率は83パーセントと、非常に高い確率であり、ご協力をいただいた多くの館園に非常に感謝し、我々に与えられた責務の重さを感じた。

## (3) 報告書『あいち子ども体験ミュージアム』の刊行

(1)(2)の事業の結果報告をし、さらにそれらを分析、展開させて、新たな展示企画・ワークショップのあり方を提示するために作成するのがこの報告書である。

これらの事業を展開するにあたっては、研究会員をはじめ、加盟館から参加する学芸員を募集し、実行委員（キャラバン実施館員及びアンケート等主担当）、企画委員として事業の実施に当たった  
(94 ページ研究会員一覧参照)。

## ●過去・現在・未来

子どもたちが楽しく遊びながら、博物館が有するモノや学問的蓄積を通して、子どもの純粋な目で、自然や科学、歴史・伝統文化という一見難解に思える分野の事象を捉え、思考し、自ら咀嚼する能力を引き出すことができるプログラム創出を目指す。

このようななんとも生意気なテーマを掲げて、約半年間走ってきたわけであるが、いくつもの市町村にまたがるが故の難問を解決するために当初からつまづき、決して順調に進んだとは言い難い。派遣依頼によって、

旅費の支払い、日当の支払いなどの問題が生じ、結局休んでキャラバンに参加した学芸員も少なくない。また、何人の学芸員でキャラバンが構成されるというのは非常に画期的であるが、実際は自館の行事で手一杯の中、自転車操業を強いられることとなり、結局中途半端なプログラムにしかならないという悪循環を起こしてしまった。

さらに長期にわたるキャラバンにもかかわらず、委嘱決定から実施までに余裕がなく、共通の参加者で構成することができなかった。後述するが、今回の問題点は山積した状態である。

アンケートの分析結果は本報告書の中で述べているが、高い回答率であることから、愛知県の実態が詳細な形で理解できると考えている。

今後、この報告書でまとめることができた内容をたたき台とし、もっと手を広げた広域で、もっと掘り下げた活動を目指して活動を続けていくのが我々研究会の使命であると考えている。

あいち子どもミュージアムキャラバン一覧(当初配布リーフレットから)

No.	1	2	3	4	5
名称	どろんこやきもの体験隊	わたしのパリはコレ!	漁師は海のおさかな博士	焼く・煮る・炊くは食の基本!	編む・織る! 織文・弥生の布!
会場	愛知県陶磁資料館	稲沢市荻須記念美術館	豊橋市細谷海岸	安城市歴史博物館ほか	一宮市博物館ほか
日程	野焼き 7月9日、8月5・6日 大窯 9月9日、10月14・22日、11月5日 各日ともに 午前10時30分～午後2時	A.11月11日 午前10時～午後12時 B.11月11日 午後2時～午後4時 の2回	8月3日午前9時～午後4時 (荒天の場合、8月10日)	11月11・12・25・26日 各日ともに 午前10時～午後4時	10月22日 午前8時30分～午後5時 1月27・28日 午前10時～午後4時
対象 募集人数	募集済	A,B各回親子10組	小学生・中学生と その親50名	小学生(高学年) ・中学生20名	小学生(高学年) ・中学生とその親15組
募集〆切	募集済	10月10日	7月25日	10月10日	9月20日
参加費	レクリエーション保険 実費 (1人500円程度)	レクリエーション保険 実費 (1人500円程度)	レクリエーション保険 実費 (1人500円程度)	レクリエーション保険 実費 (1人500円程度)	レクリエーション保険 実費 (1人500円程度)
内容	粘土で形を作り焼くことによって、「やきもの」が焼き物である由縁を学ぶとともに、野焼きと窯による焼成を体験し、釉薬を使用するにはどれぐらいの温度が必要かなどを学ぶワークショップ。	常設荻須高徳展を鑑賞した後、作品に描かれたパリの建物を粘土で表現してみる。構図や色彩をよく見ることで、荻須の制作意図へ近づこうとするワークショップ。	漁師とともに地曳網を曳いて、捕れた魚を観察した後、石器を使って調理して食べる。そして、食べた後の骨を肉眼や顕微鏡で観察し、遺跡から出土する魚の骨の意味を考える。分類学・魚類学・民俗学・考古学の枠を超えたワークショップ。	ドングリを分類しながら採集し、アクリ抜きをする。また、煮炊き具であった土器を製作して焼成し、縄文土器と弥生土器、土師器の焼成の違いについて学ぶ。さらに時代による食料資源の違いやそれに伴う調理具の変化などを体験しながら考えるワークショップ。	棉が広く織維の中心になる以前に、麻などとともに主な織維の一つであったカラムシを探集し、オコモをして織維を取り出しにして、弥生時代の方法で織ってみる。また、縄文時代の方法も体験し、弥生時代に平織りの技術が急速に普及した理由について考えてみるワークショップ。
応募はがき 送付先 お問合せ先	愛知県陶磁資料館 担当: 神崎・佐藤 〒489-0965 瀬戸市南山口町 234 TEL0561-84-7474	稲沢市荻須記念美術館 担当: 山田 〒492-8217 稲沢市稻沢町前田365-8 TEL0587-23-3300	豊橋市自然史博物館 担当: 長谷川 〒441-3147 豊橋市大岩町字大穴1-238 TEL0532-41-4747	安城市歴史博物館 担当: 岡安 〒446-0026 安城市安城町城堀30 TEL0566-77-6655	一宮市博物館 担当: 久保 〒491-0922 一宮市大和町妙興寺 2390 TEL0586-46-3215
備考	—	—	—	—	—
	※豊橋駅に集合の後、バスで移動します。 ※荒天時の決行中止は、前日5時以降に参加者に電話で連絡します。申込みの際には、必ず確定した連絡先を明記してください。 ※潮には入れません。	※10月21日はJR岐阜駅南口に集合の後、バスで藤橋村歴史民俗資料館に移動します。			

## これまでの研究会の活動

### ○研究会○

- (1) 第1回研究会 1999.7.2 於：名古屋市博物館  
発表 「民俗展示におけるハンズ・オンとマイinz・オン」一宮市博物館学芸員 久保禎子
- (2) 第2回研究会 1999.8.20 於：あいち健康の森健康科学総合センター健康科学館  
発表 「子どもの目、子どもの心」金城学院大学教授 若林慎一郎
- (3) 第3回研究会 1999.9.9 於：尾西市グリーンプラザ  
発表 「緑陰教室」熱田神宮宝物館 大原和生  
「夏休み歴史教室」徳川美術館学芸員 加藤啓子  
「やきものはっけんでん」愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信
- (4) 第4回研究会 1999.10.8 於：愛知県陶磁資料館  
発表 「自分史の中の<こどもと博物館>」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博  
「この夏の子ども向け企画をご紹介」愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信  
一宮市博物館学芸員 久保禎子
- (5) 第5回研究会 1999.3.24 於：一宮市博物館  
発表 「『'99イタリア・ボローニャ国際絵画原画展』における一時保育<おとなが楽しむボローニャ展>について」  
高浜市やきものの里かわら美術館学芸員 橋本久美  
「親しむ博物館づくり事業の報告」徳川美術館学芸員 加藤啓子  
「見学会の報告 - キッズプラザ大阪」岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝
- (6) 第6回研究会 2000.6.16 於：名古屋市博物館  
発表 木場一夫「自然研究と路傍博物館」を読む 名古屋市博物館学芸員 犬塚康博
- (7) 第7回研究会 2000.12.22 於：名古屋市博物館  
キャラバン1～5報告会

### ○見学会○

- (1) 第1回見学会 1999.11.5 キッズプラザ大阪  
(2) 第2回見学会 1999.12.4 斎宮歴史博物館 いつきのみや歴史体験館

### ○刊行物○

- (1) ニューズレター創刊号 (1999.9.9)  
「C&M研究会はじまる C&Mの目的と方法／研究会報告」  
「はじめての“こども美術館”企画目録」愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信  
「コラム」尾西市歴史民俗資料館学芸員 小林弘昌  
「きょうと国際子どもミュージアム行ってきた記」名古屋大学大学院人間情報学博士課程（後期）宮下十有  
「博物館教育プログラムのひとつ的方法」名古屋市美術館学芸員 伊藤優子  
「子どもと博物館小史1 木場一夫・棚橋源太郎・児童博物館」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博  
ニューズレター第2号 (2000.3.25)  
「<こどもと博物館>の今までとこれから」名古屋市博物館学芸員 淺野弘子  
「ワークショップの実績、現在、これから」徳川美術館学芸部普及課 加藤啓子  
「～ひと夏の経験～」に参加して 高浜市やきものの里かわら美術館学芸員 橋本久美  
「昭和9年の『コドモと博物館』」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博
- (2) ファクスレターCEMA 1 (2000.7.11)  
「どろんこやきものたんけん隊ミニレポート」名古屋市博物館学芸員 淺野弘子  
ファクスレターCEMA 2 (2000.8.31)  
「漁師は海のお魚博士ミニレポート1」岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝  
ファクスレターCEMA 3 (2000.9.7)  
「漁師は海のお魚博士ミニレポート2」岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝  
ファクスレターCEMA 4 (2000.12.22)  
「わたしのパリはコレ！ミニレポート」豊橋市美術博物館学芸員 高橋洋充
- (3) 愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録『活きている博物館～歴史系博物館のこれから～』(2000.2.17)  
平成9年度愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録集  
「基調報告」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博  
「学芸員奮闘記－悪戦苦闘!!私たちの10年－」  
日本モンキーセンター学芸員 水野礼子/内藤記念くすり博物館学芸員 野尻佳与子/鳳来寺山自然科学博物  
館学芸員 加藤貞亨/浜松市博物館学芸員 佐藤拓伸/海の博物館学芸員 野村史隆  
「博物館員調査ノススメ」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博  
「ココロのアンケート」アンケート集計  
「付録 平成10年度東海地区博物館連絡協議会・講演 博物館における市民参加」  
大阪市立自然史博物館館長 那須孝悌

# C&M研究会はじまる

## C&Mの目的と方法

平成11年度から愛知県博物館協会の新規事業として、“こどもと博物館研究会”を発足しました。そして、今回Newsletterを創刊するにあたり、その発足の経緯と目的、方法について概略を述べたいと思います。

### ■発足の経緯と目的■

平成14年度から学校の完全週5日制が始まることもなく、文部省は「全国子どもプラン(緊急3カ年戦略)」を策定し、これに基づき生涯学習局社会教育課が平成11年3月1日付で「親しむ博物館づくり事業」の募集を行いました。平成11年度は、愛知県内では徳川美術館がその事業に選択され、補助対象となっています。

一方、昨今、自然史・科学・美術系博物館では、展示やワークショップなどにおいて子ども向けプログラムが数多く実施され、さまざまな試みや研究が行われています。また、歴史系博物館においても、展覧会・講座とともに従来の枠を抜け出そうとした子ども向

けプログラムを散見するようになってきました。

そこで、こうした現状を踏まえ実施可能な新しい子ども向けプログラムを創出することを目的として、さまざまな博物館および学問分野の学芸員が所属し、広範囲な個性と知恵を結集できる愛知県博物館協会を母胎として研究会を発足することとなりました。そして、6月3日の平成11年度愛知県博物館協会総会で承認を受けることができました。

### ■研究会の方法■

月1~2回の定例会と、任意で行う見学会によって構成されます。研究会会員の対

象は、加盟館所属の学芸員及び職員で、現在43人、2館の会員となっています。すでに7月、8月に定例会を各1回(研究会報告参照)実施しました。アウトプットとしてこのNewsletterのほか、将来的には①報告書の刊行、②シンポジウム、③展覧会の企画・実施、④アウトリーチといった活動も手がけていく予定です。

今年度は発足初年ということもあり、現在の子ども向けプログラムの動向を探るとともに、今後の方向性を模索することを目標としたいと考えています。そのためにも、多様な分野の学芸員・職員参加をお待ちしています。

## 研究会報告

### 1

日時●平成11年7月2日(火) 13:30~16:30

場所●名古屋市博物館

内容●発表「民俗展示におけるハンズオンとマイinzオン」

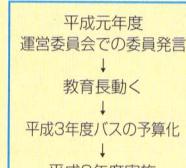
一宮市博物館学芸員 久保禎子

●今後の研究会の進め方について

第1回は、一宮市博物館で小学校3年生を主たる対象として8年間にわたって行ってきた「くらしの道具一今と昔一」展を紹介。当初は展示ケースの中に資料を展示するのみだったものが、「生きている人」を展示し、モノを介して子どもたちと語ることの大切さを大事にしていく展示へと変化した経緯をお話ししました。

#### 民俗展示におけるハンズオンとマイinzオン

- 1.一宮市博物館における「民俗展示」の位置
- 2.『くらしの道具・今と昔』開始の契機と展開
- 3.1998年(平成9年度)からの新展開  
キーワード: エコミュージアム♥チルドレンズミュージアム  
①1998年(平成9年度)の展示コンセプト  
②1999年(平成10年度)の展示コンセプト
- 4.民俗展示におけるハンズオンとマイinzオン
- 5.子どもの意識をはかるアンケート調査



### 2

日時●平成11年8月20日(金) 13:30~16:30

場所●あいち健康プラザ健康科学館

内容●発表「子どもの目、子どもの心」

金城学院大学 若林慎一郎教授

●館内見学(展示室とワークショップ)

第2回は、平成10年6月に開館したあいち健康プラザ健康科学館において、精神発達学が専門の若林慎一郎氏による、「子どもの脳と精神の発達」という医学的なお話を聞きました。私たちが普及の対象とする「子どもたち」の年齢による精神発達は、ワークショップ等の実施におけるグループ分けや展覧会の対象年齢の設定に、非常に参考になりました。



# はじめての「こども美術館」企画日誌

この夏の体験File

愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信

「こども美術館 やきものはっけんでん」は、次のような糸余曲折を経て、なんとか開催初日(7月17日(土))を迎えた。今、手帳を読み返しても、本当に綱渡りの毎日だった、という気がする。

●1999年2月26日(金)

友の会ボランティアとともに三重県立美術館へ視察に行く。友の会ボランティアの協力を得て触れる展示物を制作するにあたり、子ども美術館についての具体的なイメージをもってもらうためである。三重県立美術館の「こども美術館」は、学芸員の田中善明氏の企画に基づいて、ボランティアの方々が、展示室の「しかけ」制作をおこなっている。友の会ボランティアの付き添いを装い、お話を伺う。そう、友の会ボランティアのためと言いつつ、実は、不安一杯の私自身のための見学会であったのだ(写真1)。



写真1 三重県立美術館見学会

●3月30日(火)

3月2日より、毎週火曜日午前10時から正午まで、友の会ボランティアの有志が集まり、触れる展示物を制作する。楽器制作班と、模型制作班の2班に分かれ、活動する。楽器班は、展

示室におく、こま犬形の土鈴などを作る。模型班は、「やきものの森」を構成するやきものの石、木の葉を作る。石は、見た目にわからぬほど、本物そっくりに作りたい、できれば型を使って、と何度も説明するも伝わらず、輪積みで作り、あとで削って仕上げる、色を塗れば本物に見える、と押し切られ、しぶしぶスタートを切る。昨日、訪れて下さった、中部オカリナ協会の鈴木さんにオカリナ演奏会を引き受けくださいたお礼状に詳しい開催要項を添えて発送する。

●4月27日(火)

午前10時から正午は、恒例の友の会ボランティアの方々と触れる展示物の制作。前日のうちに山田窯業店にて粘土を買い足してある。「やきものの森」の石が全然、石にみえない。うーん、困った。どうしよう。午後、学芸課の会議を途中で抜け、瀬戸市の岡工研究会(小中学校教諭の集まり)の例会へ出掛け、「こども美術館 やきものはっけんでん」の説明をする。宣伝、宣伝。

●5月27日(木)

午前、先週、記者発表した野焼き参加者募集のチラシを発送しまくる。野焼き制作日まであと1ヶ月、参加者集まらなかつたら、どうしよう。フト、不安になる。あ、もっと、もみがらも集めないと。

●6月28日(月)

昨日、一昨日の慌ただしい野焼き作品制作も無事終わった。参加者はっけんレターを読んで、ココロなごむ。展覧会のチラシ、ポスター、ワッペンが出来たので、瀬戸市内、小・中学生全員分のチラシ配布の準備をする。チラシの裏面、やっぱり読みにくい、反省。

夜、ワークシート、「はっけんメモ帳」の原稿に、頭悩ます。子ども向けにやさしく書くのって難しい。もう、間に合わないかも。

●7月3日(土)

午前10時、多治見在住の陶芸作家川上智子さん宅を訪れる。友の会ボランティアによる「やきものの森」の石だけでは弱いので、川上さんに型による石制作をお願いし、本日拝借に伺つたのである。その帰り道、たまたま見つけた、瀬戸市内の材木店に立ち寄つた。木の端切れ(軽トラック2台分)を野焼き用にタダで運んでもらえることになった。

●7月6日(火)

午前、恒例の友の会ボランティアとの制作日。今日はオカリナ演奏会でお世話になるACCオカリナクラブの久高さんが、打ち合わせに。ボランティア楽器制作班の作っている土笛も8月1日までに100個出来る予定。演奏会で配つて子どもたちと一緒に演奏してもらうものだ。野焼き焼成時のレクリエーション保険がまだ決まらない。

夜、デザイナーの事務所で「はっけんメモ帳」の最終校正。ギリギリ、セーフ。オープンまであと10日。

●7月15日(木)

作品を並べる。併せて、友の会ボランティアの方々に「やきものの森」の展示をお願いする(写真2)。パズル、こま犬の土鈴も設置する。ふう、なんとか間に合つた。



写真2 「やきものの森」準備 展示台の上に粘土をしいているところ

1号: 夏休みの子ども向き展示といえば、科学館の工作教室がなつかしいなあ。

2号: 最近は美術館なんかがいろいろ面白いことやってるんだよ。

1号: それに比べると歴史や民俗はイメージ暗くてあまり面白そうじゃないな。博物館の見学だと、宿題みたいなワークシートとか。

この夏も、ある美術館で子ども向きの見学会をやってたよね。

2号: そうそう、やさしそうなおじさんがとって

もわかりやすく説明していたよね。

作品も子どもの目に合わせて展示してあるし、しかも本物だから迫力があった。

1号: うん、子だもたちが生き生きとして話を聞いていたよ。ただ、子どもが話に乗ってくればくるほど、つい勢いづいて作品に触れようとして、そのたびにおじさんがあわてて止めに入っていた。

2号: そりやあ、どれも大切な高価な作品だからしょうがないよ。

でも、たしかに子どもは理屈より先につい身体が動いてしまうからまわりは気を使うだろうね。

1号: 子どもたちの輪の中にいるおじさんのやさしそうな顔と、まわりを取り巻く展示監視のおばさんたちの緊張した恐い顔つきの対照がとても面白かったよ。

2号: おいおい、いったい何をみてきたのやら。しかし、本物の美術作品を利用した催しにはこういった限界があるかもね。

1号: 最初にイメージが暗いといったけど、民具にはそこまで制約はないからね。

このへんに歴史民俗系の進む道があるのかな。

(尾西市歴史民俗資料館 小林弘昌)

## information '99イタリア・ボローニヤ国際絵本原画展

会期 ● 1999年10月2日(土)~31日(日)

交通 ● 名鉄三河線「高浜港」下車徒歩8分

情報提供 ● 高浜市やきものの里かわら美術館 橋久美

会場 ● 高浜市やきものの里かわら美術館

お問い合わせ ● 0566-52-3366

# きょうと 国際子ども ミュージアム

## 行ってきた記

### ■「きょうと国際子どもミュージアム」について■

今年は、「生活を楽しもう」「自然・科学を楽しもう」「世界を楽しもう」をテーマに、企画・展示されていた(図1、写真1・2)。主催者側の発表では、期間中4~5000人の入館があり、そのうちリピーターが半数を占めるとのことである。

### ■関連シンポジウムについて■

○講演1「ボストン子ども博物館－その教育環境と地域性」(シング・ハンセン氏:ボストン子ども博物館副館長・展示部門ディレクター)

○講演2「キッズクルーって何?—シラケル子どもたちを魅了する」(ポール・ピアソン氏:ブルックリン子ども博物館・展示部門ディレクター)

パネルディスカッション「子ども博物館－楽しい学びが芽生える場」

パネリスト●シング・ハンセン氏、ポール・ピアソン氏、濱田隆士氏(神奈川県立生命の星・地球博物館館長)、宮田幸宏氏(文部省生涯学習局社会教育課企画調査係長)

司会●芦谷美奈子(滋賀県立琵琶湖博物館学芸員)

ハンセン氏からはボストン子ども博物館でのハンズ・オンと子どもたちへのアプローチについて、ピアソン氏からはブルックリン子ども博物館で行われているキッズ・クルーとボランティア活動についての講演があった。

ハンセン氏はシャボン玉のハンズ・オン展示を例に、シャボン玉作りを経験した女の子が、「シャボン玉を作る楽しみ」「よりうまく大きなシャボン玉を作る方法自分で見いだすプロセスの楽しみ」「隣で彼女を見ている父親とシャボン玉ができた喜びを共有する楽しみ」「シャボン液の作り方が書いてあるハンズ・アウトが配られているので、自宅に帰ってもそれを再現できる楽しみ」「自宅にいる母親に今日経験したことを報告できる樂

しみ」という多くの「楽しみ」の経験が、「遊び」の姿勢へつながることを論じた。

ピアソン氏は、ブルックリンでは子どもが安全に遊び、学べる場として子ども博物館が機能していること、近隣の博物館と協力して行っている7歳から14歳を対象としたキッズ・クルーと、キッズ・クルー経験者がさらにボランティアとして子どもたちに教える(フィードバック)プログラムについて説明した。ボランティア活動は、博物館のプログラムが成功したとき

には忘れられがちな存在であるが、博物館マネージメントをする上で非常に大きな存在であると論じた。

パネルディスカッションは、こうしたアメリカの事例を受けて、日本の現状を考えるものであった。ハンセン氏・ピアソン氏から見て大阪府立近つ飛鳥博物館や滋賀県立琵琶湖博物館のハンズ・オン展示やワークショップは評価できるものであるが、まだ日本国内では少数であるという指摘があった。また、博物館は静的なものであり、ダイナミック(動的)なものではないという思考がいまだに残っているため、受け入れられるのにも時間がかかるであろうという発言もあった。

日本の場合、子ども博物館はいくつか設置されているが現在のところ少数であり、子ども博物館をつくるります、既存の博物館が子どもに対してどのような展示を用意するかがここでは問題となっていた。また、子どもへの教育改編プログラムの一環として、ハンズ・オンなどに取り組む博物館に対し、今年度から政府が助成を行うようになった。子どもに対してどのような展示を行なうかは、学芸員が研究だけではなく普及教育

に力を注がなければならないという濱田氏の指摘は現実的であった。そして、とにかく試行錯誤(Try Out)することが大切であり、そうした試行の蓄積がより優れた企画・展示に繋がるとの提示がなされた。

### ■見学とシンポジウム参加を終えて■

アメリカの博物館事情と、日本の博物館事情は当然異なっている。特に、アメリカでの子ども博物館設置の意味、その地域住民(親サイド)の理解と博物館に期待される機能は日本とは異なる。しかし、100年というアメリカの子ども博物館の歴史から、日本の博物館が学ぶことは数多くあるのではないか。

こどもの城やキッズプラザ大阪など、子ども博物館は日本でもすでに開かれています。そして、それぞれが独自の活動を開拓し、学ぶべきところがたくさんある。

子どもにどのようなアプローチをするのかは、アメリカのプログラムをそのまま受け入れるだけではなく、博物館が「子どもに何を伝えたいのか」というテーマの明確さが問われるのだと思う。また、そこには展示テーマに対する知識の深さが必要であり、「楽しい」だけで子どもを帰してしまったのではなく意味がない。

新たな子ども博物館の構想も必要ではあるが、日本の博物館の次のステップとして、既存館での子どもを中心に据えた新たなプログラム展開は必須であろう。また、それぞれの館が子どもに対して独自のアプローチ、独自の地域性を活かした個性あるプログラムを開拓していくことが大切であることを痛感した。

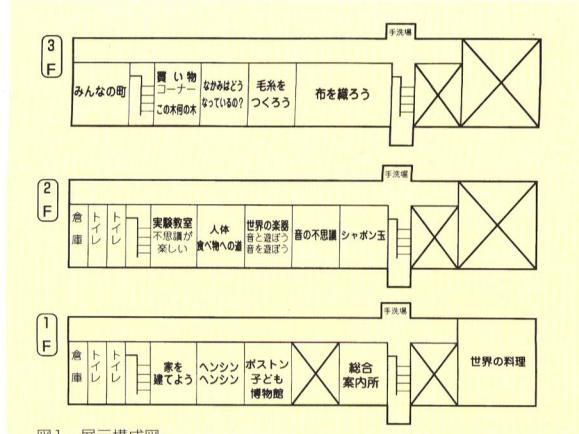


図1 展示構成図



写真1 テーマ「ボストン子ども博物館」



写真2 テーマ「布を織ろう」

# 博物館教育プログラムのひとつのかた

名古屋市美術館学芸員  
伊藤優子

「子どもと博物館研究会」からのご依頼を受け、名古屋市美術館において開催された平成11年度「夏休み子どもの美術館」ワークショップについて、そのコンセプト成立から実践までの詳細をご紹介させていただくことになりました。私自身、美術館におけるワークショップとは？と自問している今日この頃であります。ワークショップという名のもとに全国の美術館において繰り広げられている活動が、その内容や企画者のスタンスに違いがあることは皆さんご周知のとおり。名古屋市美術館においても何年か実践を続けていると、どのようにすれば上手く進むとか、こうしてはいけないというやり方がみえてきて、曖昧模糊とした定義しかされていないワークショップにも私なりの定義と方法論がおぼろ気ながらみえてきました。ただ、そこでみつけたことは当館独自のものにすぎないのか、他館にも共通する普遍的なもののかはっきり掴んでいないんですね。また、それが独自のものであれば他館と比較して当館の活動がどのような美術館教育の潮流に属するものになるのか、そしてその方向性は間違っていないだろうか？などと、さまざまに疑問、検討点が頭をよぎり、当館の活動をふくめてワークショップと名のつく事業を調査・分析し、いつかはそのあたりをはっきりとさせたいと考えているのですが、少しづつしか進展していないのが現状であります。以下、名古屋市美術館の場合というカッコ付でお読みいただければ幸いです。

ワークショップにはそれぞれのねらいや目的があるのですが、毎年、ワークショップという一連の講座全体のテーマを設定するように心がけています。今回のテーマは、“複製／コピー”。常設展に展示される現代美術作品から着想を得ています。ただ作品は着想のきっかけに過ぎず、よってダイレクトに特定の作品を理解するために何らかの作業をする、というような組立てにはなっていません。“複製／コピー”というテーマを展示作品から一度切り離し、テーマ自体を時間の許すかぎり考察します。

コンセプトが固まってきつつあるところで、講師の山口百子さんと話し合いをはじめます。現代美術作家でもある山口さんは幼稚園生から高校生まで幅広い指導経験があります。経験の浅い私が考えた頭でっかちのコンセプト

は現実の、等身大の子どもにあわせて、彼女とともに具体化していきます。そして、展示作品との関連と子どもの年齢を考慮しながら、プログラム数を絞っていきます。美術館における教育プログラムは幅広い年齢の子どもを対象にしています。よってこちらのねらいが実現しそうな年齢層を設定しなくてはならず、これも慎重に行わなければならない作業のひとつです。今回は、低学年向き（小1～小3）のものと、高学年向き（小4～中3）のものとに分け、低学年向きには①版であそぶ「森のポートレイト」②型をとる「にせものアイス」高学年向きには③型をとる「わたしのヌケガラ」④くりかえす「変わらない私／変わっていく私」⑤しきみを複写する「バーガー“ビジュツカン”」という5つのワークショップを行うことにしました。

すべてのワークショップについて、材料の選定、手順や所要時間を検討、予算の割り出しのために事前の実験を行います。実験は準備の中でもっとも楽しい時間です。大人が真剣に樂しいと感じるかどうかが子どもに対する基準にもなると思います。7月下旬からはじまるワークショップを、今年の場合は4月下旬から週1回のペースでミーティングをして6月中旬品のちらし作成に向けて内容を詰めています。

7月下旬のワークショップ直前にはアルバイトの学生のための説明会を行います。学生は愛知教育大学や名古屋芸術大学、愛知県芸術大学、名古屋大学などの学生あるいは卒業生で、参加の動機は「美術館での教育活動に興味がある」、「子どもと接するのが好き」、などが最も多いのですが、なかには教育実習をするまえに子どもと接触をしてみたいからという人もいます。学生は、ワークショップ当日には平均6、7名の子どもたちによる年齢別のグループのリーダーとして指導にあたります。全体の説明は講師が行いますが、細かな活動は学生が見守ることになります。企画意図から材料の扱いにいたるまで理解してもらったうえでグループをもりたてるなど、子どもの満足度は彼らの腕にかかるといつても過言ではありません。リーダーによってグループ毎の雰囲気の差や出来不出来などがあるのは否めません。ここ何年か連続して参加している学生や、普段からお絵書き教室でバイトしている学生は貴重な人材です。しかし彼らもやがては就職してしまうので、毎年大学1年生を入れて育成し、経

験のある人材を継続させることに努めています。

ここでは小学4年生～中学生までを対象としたワークショップ⑤しきみを複写する「バーガー“ビジュツカン”」を詳しく紹介します。8月19日と20日の2日連続の講座で、1日目は午後1時～4時、2日目は午前10時～午後4時（正午～1時のお弁当タイムをはさむ）の長時間にわたるものでした。わけのわからないタイトルだったにもかかわらず参加希望者が定員15名を越えて32名となり、最終的に25名の子どもたちが参加しました。そのうち7名が中学生で、4グループのうちのひとつが中学生のみのグループとなりました。

このワークショップは、小テーマに「しきみを複写する」とあるように、日常のシステムを美術に複写しようというものです。今回のテーマ“複製／コピー”を最もよく反映したものです。美術を取り換えるシステムはなんでも良かったのですが、子どもの身近にあるシステムとして、子どもたちがすぐに分かり、親しみがあるものとしてハンバーガーショップを選択しました。美術作品をバーガーショップの商品になぞらえ、子どもたち独自の美術作品の解釈のもとに、独自のメニューづくりをさせました。理屈で考えるのは簡単なのですが、

①子どもたちに独自の美術品解釈をさせること（一方的に解説をするのではなく、説明を加えながらも子どもたちの自由な発想で作品を鑑賞させること）

②個々の作品だけなく作品同志の関連性を見出させる（これはセットメニューとして活用していく）

③それらをグループで話し合い、意見をまと



まずは、それぞれの子どもがメニューづくり

めてメニューを完成させること

という、①～③の活動を段階的に組み立てねばならず、しかも子どもたちの自主性、自発性を發揮させなくては成立しないものなので、講師と入念に打ち合わせを行い、グループのリーダーとなる学生との打ち合わせも慎重を期すものとなりました。

このワークショップの鍵となったのは、1日目に行なったアートゲームです。上記の活動のうち、①、②をゲームをしながら学ばせることにしたからです。アートゲームとは、「学校や美術館などで行われるゲーム形式を取り入れた美術教育の学習(指導)またはその教材」(「アートゲームについて(1)」、ふじえみつる、愛知教育大学研究報告、1998年より)のこと、おもにアメリカ合衆国で取り入れられているものです。私が個人的に所属している研究会\*においてアートゲームを含んだ学校教師向け教材の開発に取り組んだ経験があり、当館でも平成8年からワークショップの中で利用はじめました。今回は、現在常設展にて展示されている作品の葉書大の紙焼写真をラミネート加工したものを65枚用意し、そのカードを使って3つのゲームを行いました。ひとつめは、「みんな覚えよう」というもので、全員で1枚のカードをじっと見てからそれを伏せて、作品の中で見つけたものを順番にいうというもの。作品をよく観察することを主眼としたゲームです。ふたつめは、「まるごと体験」と名付けられたもので、五感(視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚)を動員して言語化するもの。味覚を例にとって言えば、まず全てのカードをテーブル上に並べ、リーダーが「味のしそうなものを選んで」と言い、子どもたちにカードを取らせる。その後どんな味がするのかをひとりずつ発表させます。ひとつめのゲームが視覚的な記憶力の良い子どもが中心になりがちであったのに対して、それぞれの子どもが自分の感じたことを発表できること、また自分以外の他人の感じ方に触れることもでき、より深い鑑賞を行うことができます。最後は、「展示する人」というもので、ひとり5枚のカードを配付し、残りは真ん中に山札として置く。山札から1枚を表にする。そのカードの作品と共に通点を見出して横に並べていくもの。七並べのように、さまざまな共通点で枝葉を広げていきます。「〇〇つながり」だからここに並べるということをグループのみんな言い、みなが納得すれば良し、手持ちの札が早くなくなった人の勝ち。このゲームでは、作品の分類を体験し、さまざまな分類の観点があることを知ります。これは2日目のメニュー作りに直接関連していくゲームです。

以上3つのゲームは、数あるアートゲームの事例の中から今回のワークショップの内容に併せて選び、ゲームしやすいようにまたさらに面白くなるようにルールを加えるなど工夫を



意見をまとめる、リーダーの手腕が光る



メニューをレイアウトする

施しました。リーダーとなる学生には、打ち合わせの際にゲームを実際に体験してもらい、出題する側にたったときの説明の仕方や、ゲームをリードし盛り立てるにはどうしたらよいか、彼ら自身で考えてもらう機会を設けました。

2日目の始めには、常設展の見学を行いました。前日のゲームで行った「〇〇つながり」は子どもたち自身が見つけたものですが、常設展では、美術館での分類=展示がどのようになっているかを観に行きました。個々の作品をじっくり鑑賞する時間はなかったのですが、子どもたちはカードでは味わうことのできないスケール感や質感などを、実作を観て感じていたようです。40分ほどの鑑賞後、今度はバーガーショップのメニューがどのような構成になっているかについて、スライドをみながら説明を受けます。そして子どもたちは、メニューをつくる対象(例:子ども向けメニュー)の設定、グループで一番のお奨めの作品選び、セットメニューづくりなど、バーガーショップのメニューづくりを具体化していくわけです。

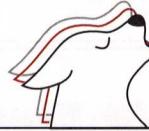
結果はグループによってばらつきがでました。年齢の差やグループの雰囲気によるものであると思われます。小学4年のグループはメニューをまとめるに苦労をしました。それは1日目のうちにはグループでの意見交換がなく、個人個人対リーダーというコミュニケーションの図式であったことに起因しているのだろうと思われました。前日のゲームでた〇〇つながりの項目を白板に書いておいたのですが、そういったものを利用しながら、リーダー主導で話し合いがはじまりました。何とかメニューがまとまり、実際に制作にかかりだしたときから、子どもたちは集中力をみせはじめ、完成したときには、彼らの達成感が伝わってきました。中学生のグループでは、こちらが設定したバーガーショップには納得がいかず、話し合いが沈滞してしまいました。それではということで、子どもに気になる作品を選ばせて、個人個人の選んだ作品のまとめをつなげていて道のようにレイアウトし、ひとつのストーリーをつくりました。中学生のグループではバーガーショップのメニューはできませんでしたが、メニューを作ることが最終目的でなく、作品を解釈して、それらを自分の観点で選択し、分類することが重要であり、それらを自分以外の人に伝えていく作業を彼らなりに達成できたと思います。

その一連の作業は美術館における展示に類似しているといえないでしょうか。

このワークショップ反省点はたくさんあるのですが、ひとつ挙げるとすればグループ内のコミュニケーションがとても重要な内容であるにもかかわらず、当日にあつたばかりの子どもたちで活動していかねばならず、打ち溶けるのに時間がかかったことです。年齢の幅があることも我々を悩ませ、次のステップを見出しづらくしました。これがもし学校の現場だったらどうでしょう。気心の知れた仲間同志であり、学年も同一。もしかしたら、美術館の見学を間にいれて、学校で行なう方がより相応しいワークショップだったのではと頭をよぎります。しかしそれは美術館という教育の場の宿命というもの。普段出会わない人と一緒にひとつの物をつくりあげるよさもあるはず。ただ、今回の場合、もっと多くの時間が必要だった。これがいま一番に感じる反省点です。

さいごに。ワークショップは、参加者がさまざまなことを主体的に考える機会を与えられ、そこに集まった他人とコミュニケーションをとりながら、ひとつのことを達成していくものです。よって造形活動だけでなく、見ること、考えることまでを含んだ総合的な教育手段を指示することばです。それゆえ現在美術館で行われている教育活動—ガイドツアーやワークシートなどの質問型ブックなどとは同列に並べられないほど多くの可能性を秘めているものだと思います。ただし成功させるためには、入念な準備と携わるスタッフの豊富な経験、そしてスタッフ間のチームワークが必要とされ、手間ひまがかかるのはたしか。しかし、解散するのが名残惜しいくらい参加者のコミュニケーションが充分に取れ、すべてが終わったとき達成感は他のどのようなプログラムとも比べようがありません。この体験が次への原動力となって私を突き動かしているといえるでしょう。

\* アミューズ・ヴィジョン研究会…東海地区を中心とした美術館の教育普及担当学芸員と美術館での教育活動に興味を持つ教員によって構成される研究会で、1992年から発足。現在事務局は刈谷市美術館内にある。



# 子どもと博物館小史ー1

## 木場一夫・棚橋源太郎・児童博物館

戦後日本の博物館は、敗戦をはさむ約20年間の、博物館をめぐる自然学者の運動に規定されている。ここで言う自然学者とは、古く明治期は博物学、分かれて動物・植物・鉱物学、総じて自然誌・自然史、つまり natural history の研究者のことである。そして約20年とは、日本動物学会、日本植物学会、日本地質学会、日本鳥類学会、応用動物学会による、1938年の自然博物館設立請願を直接の端緒として、鶴田総一郎(動物生態学)が「博物館学総論」を世に問う1956年までを指す。自然学者の運動は、博物館を教育の展示場から、教育と研究の場へと近代化・合理化していった。

この系譜の中で、鶴田の直前に位置づくのが木場一夫である。東京高等師範学校と東京文理科大学で動物学を学び、満鉄教育研究所、同附属教育参考館を経て満洲国立中央博物館学芸官になるが、1943年に帰日し文部省嘱託として大東亜博物館の建設準備に携わった人である。その彼の、1949年の著書『新しい博物館 その機能と教育活動』は、刊行の約30年後に「戦後

博物館論の方法的基礎をなすもの』(伊藤寿朗)と評されたが、その主旨は大東亜博物館建設準備時の1944年に著した『各国主要博物館の概況』と基本的に変わるものではなかったことが最近の調査で明らかくなっている。ただし、児童博物館、学校博物館、学校システム博物館、路傍博物館が新しく動員されたことを除いて――。

木場は、『新しい博物館 その機能と教育活動』を、「新しい教育の展開における学校博物館や児童博物館創設の問題との連関において』著したことを、自覚的に記した。ここに、児童博物館、すなわち children's museum の日本の意味への問い合わせの契機と、日本の博物館の〈戦後〉を解く鍵がある。

もちろん、棚橋源太郎も戦前から児童博物館を紹介してはいた。しかし、1869年生まれの棚橋と、1904年生まれの木場との35歳の差は、父子以上のものがある。加えて、例えば1945年の時点で、勅任官待遇を得てすでに四半世紀が過ぎようとする棚橋と、文部省の嘱託に過ぎなかつた木場との地位差も歴然としてある。役割と地位に関する

物象化的錯視が、同じ児童博物館を別物にするのは容易だろう。

さらに、「博物館は社会教育ばかりの機関ではない」という棚橋ではあったが、彼の一貫した教育者としてのキャリアは、この発言を自ずと外在的なものとする。その点、甲殻類・両生爬虫類研究の動物学者であり、かつ鹿児島県の隈之城小学校訓導を経た後、師範学校中学校・高等女学校教員免許を取得し、埼玉師範学校教諭兼訓導、同舍監をつとめた木場にとり、博物館における教育と研究とは、彼に内在化された自明な関係だったに違いない。木場の児童博物館論は、教育と研究の両機能に支持されていたのである。

このように、棚橋ではなく、木場が語ったとき、児童博物館は日本でのアクチュアリティを獲得したと言ってよい。それから50年後の、children's museum の流行現象は、何を意味するのだろうか。

名古屋市博物館 犬塚康博



子どもと博物館研究会では、非公式ながら、ホームページを開くことができました。研究会の情報はこちらで検索できますので、是非一度アクセスしてみて下さい。9月5日現在で延べ111人しか開いていないという、未だ知られざる存在です。ご意見・ご要望など、どしどしお寄せ下さい。  
<http://tokyo.cool.ne.jp/museen/C&M/index.html>



### あとがき>>>

今回の創刊号では、県内で最も早くから子ども向けプログラムを実施してきた名古屋市美術館の伊藤さんにまずは書いていただき、来年度の企画立案・予算策定前のみなさんの

参考になつたらといいなどと勝手に思っています。歴史と美術では分野が違うから、歴史学ではこんなワークショップはできないという人もいるかもしれません。いや、そう言つている人もいます。しかし、伊藤さんのワークショッ

プを見学し、考古学・民具学を専攻する私には次なるアイデアがすでに浮かんでいます。机上で考へるより、百聞は一見に如かず。今年の夏に見たさまざまなプログラムは、次の企画となりそうです。(編集担当／久保禎子)

## news letter

創刊号●1999年9月9日

発行●愛知県博物館協会 こどもと博物館研究会

〒489-0965 愛知県瀬戸市南山口町234番地 愛知県陶磁資料館内

TEL0561-84-7474 FAX84-4932 (担当／佐藤) 編集●一宮市博物館 久保・柳田



### 〈こどもと博物館〉の今までとこれから

名古屋市博物館 ■ 浅野弘子



報告によれば、氏の活動の中で、「こども」が直接的に関わってきた最初の事業は、1990年に名古屋市博物館が行った「夏休み親子博物館週間」であった。これは、常設展の利用者数増加をもくろんだ、多分に政策的な事業としてのスタートではあったが、当時「利用者数増加＝親子・子供の誘致」の図式が成り立っていた点では、特筆されてよいのではないかと思う。その後、1991年秋の企画展で、氏は「五感を通じて歴史現象に触れ、観覧者自身で発見の喜びや驚きを体験することを目的とする展示」として「原始・古代をあそぶ」を構想、考古学をテーマに、体験を前面に押し出した企画を行う。氏がこの企画に取り組んだ背景には、博物館の社会教育における役割が重視され、博物館への潜在的要件の高まりもあったとされる。この企画の準備・開催中には、今日私たちが抱く思い・直面する問題がすでに顕在化している。例えば、実物資料展示と体験コーナーを一体として捉えてもらうための工夫。フィードバックのためのアンケートや質問ノートの設置方法。体験用教材の調達、など。

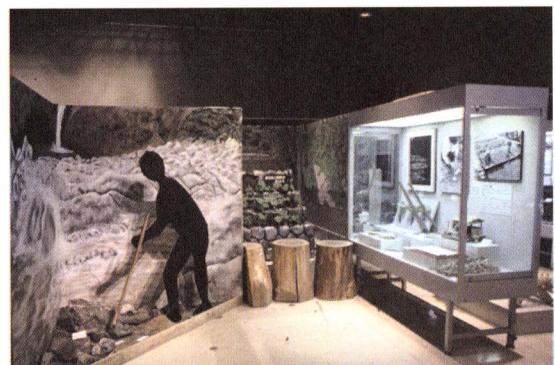
この企画の準備段階で氏が訪ねた、1991年4月～5月の静岡市立登呂博物

10月8日、研究会では「自分史の中の〈こどもと博物館〉」と題して犬塚康博氏にご報告いただいた。「こどもと博物館」というテーマに、犬塚氏は早くから取り組まれており、その課題・問題点も含めて、現在活動を進行中の私たちに示すかたちでのご報告をいただいた。以下その報告の要旨と、そこから得られた展望を述べてみたい。

館特別展「安倍川水紀行」では、手作りの良さを活かした展示で、木の香などの体験を含めた自然な空間づくりが行われていたと言及された。更にその後訪れたスミソニアン アメリカ国立自然史博物館・チルドレンミュージアム ボストン・スタッテンアイランド チルドレンズミュージアムの報告にて、システムの違いは別にしても、参考にすべきいくつかの点—資金集めとスポンサーを裏切らない企画力・スタッフの組織力など—to 提示した。このような点は、従来日本の博物館（特に公立館）の企画では、あくまで背景として捉えられてきたことである。

犬塚氏がすでに8年前に経験した「こどもと博物館」については、以上の様にまとめられようか。氏の現在の構想は、博物館と学校がいかに連携できるか。学校に博物館を設ける、又は学芸員を配置し、学校全体を博物館化しうるなどの可能性に広がっている。確かに博物館とこどもを考える時、学校の存在は無視できない。「学校では体験できないことを」と、その役割を意図的に区別して考えがちな私であるが、こどもたちにとって学校とは、博物館とは一体なんだろうか。こどもが感じる好奇心・探求心のアンテナは、おそらく双方に同じように向けられており、学校・博物

館の役割には、区別を超えた可能性がひそんでいる。総合学習という“新たな”領域に踏み出した学校の体制を横目ににらみつつ、私たちも手探りながら、同じ「こども」を見守る存在として「館」の枠を超えた活動を模索していくのも、一つの方法ではなかろうか。



企画展「原始・古代をあそぶ」土器のこすり絵コーナー（写真左上）  
静岡市立登呂博物館特別展「安倍川水紀行」入口（写真右上）  
同 筏に乗って木の香を体験できる（写真右中）／同 中央奥がワサビ田の再現（写真右下）



作って遊ぼう貝あわせ教室

## &lt;これまでのワークショップ&gt;

徳川美術館でのワークショップ「夏休み子ども特別企画」は平成2年(1990)から始めた。しかし、担当の筆者自身が「ワークショップ」という意識は全くなかった。当館の年間入館者数(平成10年度の場合)は約21万人、そのうち小中学生の来館者は8千人(約3.8%)、ほとんどが大人につき合わせられてやって来る。その8千人のうち22.5%の1,800人の子どもが8月に来館している。そこで、夏休み中だけでも、自発的に小中学生が来館することを目的に始まった。

## &lt;広報と実施&gt;

## -広報-

最初は展覧会に興味を持たせるためギャラリー・クイズを掲載した割引券を作成、名古屋市立の小中学校等に配布した。現在も家族割引券を制作し、名古屋市立小中学校と愛知県下の小中学校に配布している。

## -実施内容-

展覧会に関する5つの問題を3択で答えるギャラリー・クイズに参加すると三角くじの抽選会があり、当館のオリジナルグッズが当たった。割引券の半券には学校名、学年、氏名等を記入し、提出してもらい、来館者の動向を把握する材料とした。B5版、両面簡易印刷のワークシートも作成した。

## -歴史教室-

3年目の平成4年から、ギャラリー・クイズに、解説ボランティアによる「歴史教室」が加わった。企画展を子ども向けに解説するもので、8月中、毎日3回各30分間実施。

担当ボランティアには事前に3回、担

# ワークショップの 実績、現在、これから

徳川美術館●学芸部普及課 加藤啓子

当学芸員から展示内容のレクチャーを行った。

以後、クイズではさまざまな参加記念品(下敷き、メモ帳、鉛筆など100円程度)を作成、歴史教室ではレプリカの作成、ワークシートではページや内容を拡大し、充実度を増してきた。

歴史教室に関しては、今年で8回を数える。毎回、反省会を実施し、教室の内容、開催時間、ワークシート、会場など意見を交換し、現在まで育ってきた。解説ボランティアのほとんどが実施当初からの方で、ベテランばかりである。

とはいって、知識の押し売りになってしまったり、大人中心の説明になってしまったり、参加者が多くて、声が届かなかつたり、展示室で一般の来館者からうるさいと叱られたり、現在も試行錯誤を繰り返している。

ただ、学芸員ではなく、子どもた達のおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんが語り部のように作品の前で話し、決して授業ではなく、展示作品から子どもが何かを感じ取り、記憶するという、基本姿勢は変わらない。

## &lt;文部省「親しむ博物館づくり事業」&gt;

今年の夏は、文部省の「親しむ博物館づくり事業」に当館の夏休み子ども特別企画が選択された。そして、美術館での「ハンズオン」事業が開始されたのである。従来のクイズ、歴史教室、ワークシートに「親と子の甲冑手作り教室」と歴史

体験教室「作って遊ぼう貝あわせ」という「ハンズオン」が追加された。しかし、この事業への参加申請を提出したもののが、6月下旬になっても申請の結果報告がなく、割引券やちらしには歴史体験教室を記載できぬまま、進行した。

## -ハンズオン その1-

「親と子の甲冑手作り教室」だが、8月1日(日)・7日(土)・8日(日)の3日間で、親子15組が段ボールで本格的な兜と鎧を製作した。問い合わせは殺到したが、親子で3日間美術館に通うのが現実的でないのか、実際の申し込みは20組程度であった。講師は、名古屋近郊にすむ刀剣愛好家で、普段は会社員の方。5月下旬から、月1回程度の打ち合わせを行う。本格的な準備は7月に入ってから始まった。兜の鉢は子どもの自転車用ヘルメットを使用。ヘルメットをはじめ、塗装用品、木工工具、ベニヤ板など大型工務店で大量に購入。博物館の実習生やボランティア、アルバイトの手を借りて、ヘルメットや鎧櫃の塗装、ヘルメットの内張りの布の裁縫、草刷りや大袖の威し板(約450枚)のカットを行う。

見本の甲冑を借り、打ち合わせをするのだが、具体的に各パーツをどのように製作するか、口頭では理解できぬまま当日を迎えた。当日、段取りは講師の頭にあるのみで、進行してゆかない。15組の親子とのコミュニケーションも取れぬまま、どうにか兜のみ完成。夕刻、反省会



親と子の甲冑手作り教室



を実施、ボランティアから講師に依頼する館側の主体性が問われた。そこで、当館が進行表および資料を作成し、司会進行を美術館職員主導に切り替えた。

2日目から参加者同士の会話も増え、当館職員およびボランティアも段取りがよくなり、胴の針金通しや威糸のカットなど準備をすすめ、空いた時間は進みの遅い親子を手伝う。意外と胴の草刷りの威しの作業にてまどう。

3日目、完成に向けて、親子、講師、職員、ボランティアとも昼食もそこそこに作業をすすめ、4時30分には全員がりっぱな鎧・兜を完成できた。子ども達はその鎧・兜を着用して、エントランスホールで記念写真を撮り、解散した。3日間という長時間に渡って、親子で一つの目的を達成した喜び、充実感、一体感がすべての参加者から伝わり、担当者の前準備からはじまった長い苦労が報われた瞬間であった。



### -ハンズオン その2-

「作って遊ぼう貝あわせ教室」は8月中旬1日3回実施。1,522名という大勢の参加者を得ることが出来た。新聞広告での告知、および口コミの効果があった。

教室の流れは、指導ボランティアが貝あわせの由来やゲーム内容を説明をし、実際に貝あわせを1テーブル約7~8人で行い、その後、蛤の貝殻に油性のマーカーや折り紙で色彩を施し、あわせ貝を作成し、記念を持って帰った。貝あわせのゲームで子ども達は貝をあわせようと真剣な眼差しがあった。一人だけ合わせられず、悔し涙の子どもさえ現れた。あわせ貝の作成では、予想に反して、下書きや見本もなくても様々、自由に描いていた。次回の実施を希望の声が多かった。子どもの反応が直に聞こえ、ハンズオンの体験型教育の成果を充分に実感できた。

歴史教室ではレプリカの火縄銃や様々な大きさの鉛製弾丸を用意し、教室終了

後も実際に手にするなど、好評であった。

甲冑手作り教室をはじめ、全ての企画をオープン教室にし、一般の来館者が自由に見学できるようにしたため、問い合わせも多く、関心が高かった。

### -ハンズオン活動の問題と反省-

甲冑手作り教室では、参加者が少人数に制限される、多額の支出、前準備の大変さなど問題は多いが、ハンズオンの醍醐味を味わえるこの企画は続けて行きたい。

貝あわせに関しては、この企画の実施決定が上記の「親しむ博物館事業」の内定通知がなされなかつたため、準備の時間がなかった。特に、指導ボランティアの研修が1回と不十分だったため、実際の教室での解説が充分なされなかつたり、誤った内容があつた。貝あわせに限らず、歴史教室、ワークシートなど、情報の発信元である責任を職員およびボランティアがもっと認識し、徹底学習する必要性を痛感した。

### <これから>

今回、C & M研究会をはじめ、愛博協での研修会の参加や、他館ワークショップの見学で、多くのことを学習できた。当館では企画展を子ども向けに変更することは難しいし、その必要性も疑問に感じた。子どもだけでなく、子どもは子どもなりに充分展示作品を理解しようとする。その導入として、ワークショップ、ハンズオンを企画したい。美術・歴史などの分野、国公私立、規模や環境の違いから、ワークショップの設営や内容は異なる。しかし、各館の独自性を生かした、必要に応じたワークショップを確立したい。そのためにも、進行や集客などのテクニックを情報交換し、相互が充実するよう、今後の研究会の発展を期待する。

徳川美術館としては、収蔵品の特色でもある大名の文化や生活を紹介し、近世の歴史、郷土の歴史と裾野を広げ、当館なりのワークショップの内容を充実させたい。私立美術館のため、企画だけでなく、予算確保の努力も不可欠だ。館内で職員同士の同意の獲得など、問題は山積みだが、今年の企画で発見した、ハンズオン企画に対する子ども達の目の輝きを忘れずに、一步一步前進してゆきたい。

### 99年集計結果

#### 特別陳列

「信長・秀吉・家康 戦国の霸者 三英傑」  
7月17日(土)~8月29日(日)

#### <38日間>

総入館者数	36,773名
小・中学生数	3,897名
(うち第2・4土曜、無料入館)	1,097名
ギャラリー・クイズ参加者	5,047名
歴史教室 参加者	1,421名
貝あわせ 参加者	1,522名
甲冑手作り教室 参加者	15組
割引券	1,479枚



# 「～ひと夏の経験～」 に参加して

高浜市やきものの里かわら美術館◆橋本久美

実はうちの美術館でも、子どもを対象とした行事は消極的ながらいくつか行つてきました。しかし、ここでその成果をお話することはできません。なぜなら、「子どもがまったくといつてもいいほど来なかつた」からです。

例えばギャラリーツアーのようなことを開催したとき、集合場所にいってみても人気はなく、時間を少し過ぎてから1～3人ほどのちいさなお客さんがヒョウコリと現れます。しかも「えっ、子ども、これだけ？」というようにチラッチラッと周りをみまわしながら。ちょっとでも眼をはなしたら逃げられそう！ 私達は飛びつかんばかりの勢いで展示室に引っ張り込み、「さあ、今日は瓦の勉強をしょねえー」と始めるわけです。……何かがちがうなあ……。

せっかく美術館があるのだから地域の子どもにも親しんでもらいたいと思いつつ、動員すらできずにいたので、このたび愛知県博物館協会に“こどもと博物館研究会”が発足したということを知り、さっそく参加させていただくことにしました。他館がどのように子どもたちにPRしているのか、そしてどのような内容を提供しているのか、特に夏休みのように子どもがたっぷり時間もつ時期にはどのようなイベントを行っているかに 관심がありました。

研究会の3回目は、9月9日、平成11年度愛知県博物館等職員研究会のなかで行われた「こどもと博物館研究会－ひと夏の経験－」。熱田神宮の大原和生氏、徳川美術館の加藤啓子氏、愛知県陶磁資料館の佐藤一信氏の三名の方が夏休み中の子どもを対象とした事業について発表されました。

一人目の熱田神宮の大原和生氏のお話は、長年続いているらっしゃる「緑蔭教室」

について。これは昭和22年に設立された指人形クラブ「熱田神宮子ども会」を前身として昭和26年にはじまった夏休みの教室で、その名のとおり熱田の社の木陰で勉強するという事業です。現在800人の児童が集まる（なんと申込み開始の一時間後には満席になるそうです！）という規模の大きさです。そして、社会（例・交通指導、消防訓練等）、理科（例・電話、ガス等）から、図工や音楽、体育まで網羅したまるで学校のような内容の豊富さ。時間としては午前中の半日ですが、期間が夏休みに入った翌日からお盆前までの約3週間と長く、しかも夏休みの宿題もその中で済ますことができるというメリットもあります。ただ、ご苦労の部分は大原氏はあまり語られませんでしたが、内容豊富なゆえに講師陣や子どもの面倒を見るボランティアの確保、教室の整備など準備には大変な時間をかけられることでしょう。しかし、学校の先生や学芸員ではない「その道の専門の人」（例・消防署職員、鉄道マニアの方など）の話を聞くのは子どもにとってはなによりの収穫となると思います。

私にとってさらに印象的だったのは、教室の内容とは直接関係ありませんが、終業後、子どもたちそれぞれについて「何時発の○○○行きのバスに乗って帰った」と言えるよう、乗り物に乗り込むところまで見送るという責任のもち方です。どうしても、その行事だけ無事に済めばそれで良しとしてしまいがちですが、子どもにしてみれば（送り出す親の方も）往復の道程も大冒険です。そこまで含めて面倒をみるという細やかさが人気の秘訣のひとつでしょうか。

徳川美術館の夏休み特別企画は、今年で9年目のこと。展示の内容が子ども向けということではなく鑑賞の手引が子

ども対象に整えられ、展示理解の補助事業として続けられています。クイズ形式のワークシートを持って展覧会をみる、また、ボランティアの解説を聞きながら見るという形式をとっていらっしゃいますが、スライドをみせていただいたところかなりの人が集まっているとお見受けしました。

特に今年は、文部省の「親しむ博物館づくり」の委嘱事業のひとつに選ばれたということで、新規に「作って遊ぼう貝あわせ」と「親と子の甲冑手作り教室」という2つのワークショップを実行されました。このうち、特に段ボール紙を使用して甲冑を作るという試みは、材料は身近ですが、内容は想像をはるかに越える本格的な作業で、担当された加藤氏が「本当に大変だった」と繰り返し繰り返しあっしゃっていたのもうなづけるレベルの高さでした。15組の親子が参加という形で3日間をかけるこのワークショップは、材料の手配、皆が理解して、しかも15組が同時に完成できるようにと、担当者の方々は事前の準備にとても手間をかけられたそうです。スライドで紹介された子どもたちは自作の鎧冑姿で充実した満面の笑顔ですが、その背後に段ボールと格闘してヨロヨロになった学芸員とスタッフの姿をみるのは、どちらの館の方にも共通ではないでしょうか。しかし、こういった美術館の特色を活かした事業は子どもたちの心に確実に何かを残すことであります。展示資料に対する「どのように着るのか。どのように作るのか」という疑問に根本から回答するものであったと思います。この「親と子の甲冑手作り教室」は好評につき続けて行っていかれる予定とか。

最後に発表された、愛知県陶磁資料館の「やきものははっけんでん」は、陶磁資料館はじまって以来、初の子ども向け企画ということで、私も以前から鞠に「はっけんでんワッペン」をつけた佐藤氏が気になっていました。館蔵の作品を子どもを対象に構成し、「やきものどうぶつえん」「からだのやきもの」「何だかへんなやきもの」というようにタイトルをつけて鑑賞させ、陶磁資料館の名物のひとつでもあるこま犬をキャラクター化して子どもの視線をひきつけ、やさしい話し言葉で解説するというソフトな印象づけでまとめられていました。

実は、私は学生の時、博物館実習を愛知県陶磁資料館でお願いし、ご指導を仰いだことがあります（その節はおせわになりました）。まだ旧館時代で、大変なやきもの通じないと入れないような雰囲気もあり、このような企画がでてくるとは想像もつきませんでした。しかし、陶芸教室のほうには子どもがたくさん来ているのだから、考えてみれば、この子たちを展示室に引き込むことができれば、さらなるやきもの通を生み出せるわけですね。粘土遊びですっかり土が好きになっているところをねらえば反応は大変良いはずです。

また、担当の佐藤氏が展示室に控室をつくって仕事をしながら、直接子どもたちに展示ガイドをおこなったり、「はっけんレター」として子どもたちからの声を集めたりと、コミュニケーションを密にする試みがなされていました。



今回は進行役の名古屋市博物館の犬塚氏がまとめられていたように「歴史的にも内容的にも3館3様のケース」であったと思います。しかし、この3つの事例発表を聞いて、3の方のお話に共通していく、しかも改めて考えさせられた事柄がいくつかありました。

まずははじめに、こういったワーク

ショップを担当した学芸員をはじめ、スタッフの体力の問題です。「子どもたちを博物館・美術館へ」と言われても、まだ、専門に美術館教育の担当者を持たないところが多いのが現状だと思われます。たとえばこの夏、愛知県陶磁資料館の佐藤氏がおこなったような担当者による展示ガイドは、子どもたちにとっては大変素晴らしい記憶を残すことだと思います。しかし、展覧会の準備だけで何か月も動き続けた後、できるだけ毎日展示室で待機するのは無理をしそうなのでは？ と心配になります。疲れは、子どもにも敏感に察知されてしまうのではないか（なんとなく顔が怖い……とか……）。

担当者が直接子どもと接することは重要です。しかし、常に心にゆとりを持った状態で子どもと対応するためにも、やはりワークショップは展示担当者以外の理解者が、準備段階からある程度分担してくれるのが望ましいのでは、と思いました。

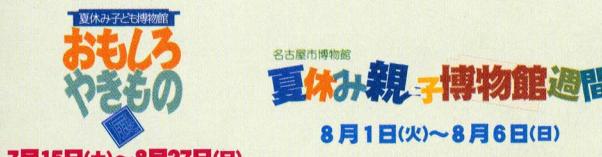
しかし、また、この理解者の一例としてのボランティアさんの難しさ。発表のあった3館では、いずれもボランティアさんを導入していましたが、解説を担当するボランティアさんと、展示あるいはワークショップの担当学芸員とが本当に理解しあうのは、これまた一仕事。し

かし、これがしっかりできないと実際に子どもと接するのはボランティアさんたちだから問題はより一層やっかいになってしまうのですよね。

さらに、昨日まで堅苦しくて大人向けだった場所がある日突然「子どもたち、いらっしゃい！」とアピールしても、すぐにはうちとけてもらえないのではないか？ ということ。実はこれが今もっとも強く感じていることです。その証拠に、徳川美術館さんは9年目、熱田神宮さんはなんと半世紀近くという継続的な事業ですから。長く続けることで広く宣伝が行き届き、子どもたちに興味をもたれるだけでなく、内容も深くなっていくはずです。きっと愛知県陶磁資料館さんにも何度目かの夏休みには、「“こまえもん”を見に来た」という子どもたちが表れるのではないかでしょうか。



これまで3回の「子どもと博物館研究会」に出席して、やはりこの問題には長期戦覚悟で取り組まなければならなかづくづく感じています。今はまだ、はっきりしたビジョンは何も持たない当館の「対子ども作戦」ですが、この研究会への参加を通して徐々に前進していくたいと思っています。



名古屋市博物館では、開館間もない1979年から「夏休みの家族映画会」を実施しています。その後、1990年からは、映画会にクイズラリーを加え「夏休み親子博物館週間」へと発展、さらに、1994年には、土人形に色付けをするワークショップをおこない、以後、「夏休み親子博物館週間」は、映画会+クイズラリーの年と、それらにワークショップの加わる年とがあります。また、1983年からは、市内小中学校と連携して「歴史教室」を開催しています。

展覧会でも1991年「原始・古代をあそぶ」をはじめとしていくつかの家族向け、子ども向けの企画展を開催してきました。また、今春の特別展「木炭バスの走ったころ」では、木炭バスの試乗会と紙芝居の実演会をおこない、多くの家族連れに参加していただきました。

さて、今年は「夏休み子ども博物館」と銘打ち、企画展「おもしろやきもの展」を開催します（7月15日～8月27日）。また、この展覧会の会期中の「夏休み親子博物館週間」（8月1日～6日）では、企画展・常設展を回るクイズラリー、土人形の色付け、そして映画会をおこないます。それぞれの担当が、工夫をこらして準備中です。子どもと博物館研究会員諸氏のご来館、多くのご教示・ご指導を期待しています。（tk）

## 活動の記録



第3回研究会●1999.9.9 於：尾西市グリーンプラザ

「縁陰教室」 熱田神宮宝物館 大原和生  
「夏休み歴史教室」 徳川美術館学芸員 加藤啓子  
「やきものはつかんでん」 愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信

第4回研究会●1999.10.8 於：愛知県陶磁資料館

「自分史の中のくどもと博物館」名古屋市博物館学芸員 犬塚康博  
「この夏の子ども向け企画をご紹介」  
愛知県陶磁資料館学芸員 佐藤一信／一宮市博物館学芸員 久保禎子

第5回研究会●2000.3.24 於：一宮市博物館

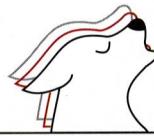
「99イタリア・ボローニャ国際絵画原画展」における一時保育  
「おとなが楽しむボローニャ展」について  
高浜市やきものの里かわら美術館学芸員 橋本久美  
「親しむ博物館づくり事業の報告」徳川美術館学芸員 加藤啓子  
「見学会の報告—キッズプラザ大阪」  
岡崎市美術博物館学芸員 天野幸枝

### 見学会●●

第1回見学会(1999.11.5) キッズプラザ大阪

第2回見学会(1999.12.4)

斎宮歴史博物館・いつきのみや歴史体験館



## 子どもと博物館小史 2

### 昭和9年の『コドモ博物館』

日本博物館協会の機関誌『博物館研究』第7巻第3号(昭和9年)に、「全国の母と子に普ねき恵沢を」「御下賜金を基金とし恩賜財団設立」というタイトルをもつ、無署名の囲み記事がある。前年12月の皇太子(現在の天皇)誕生を記念した下賜金「児童と母性の教化養護費」75万円を基金とする財団の事業に、コドモ博物館を提案したものである。そのコンセプトは、次のようなものであった。

母と子とは元来不可分のものであるにも拘らず、従来の機関施設に大抵母は母、子は子と別々に離したものばかりで、児童博物館はあつても、子のための博物館ばかりで、『母に見せるため』の『コドモ博物館』といふやうなものは全く閑却されてゐる現状から見ても、このたびの聖慮によつて母と子が固く慈愛の抱擁をした姿のままで養護教化の対象とせられたことは畏れ多い極みである。

このコドモ博物館については、大渡忠太郎「我が博物館の再検討」(『博物館研究』第7巻第4号、昭和9年)でも、次のように触れられている。

小学校教育といふ点からは全く離れて別に「母に見せるための博物館」たるべきコドモ博物館が各地に出来習癖の矯正とか、栄養食の見本とか職業指導の指標を与ふるとか、コドモ部屋の構造、玩具の研究等子供の現在将来のために考ふべき事項の研究所となつたならば子供(乳児から児童まで)のためばかりでなく、母のためにもなり、家庭の生活改善にもなり進んでは社会の進歩ともなるであらう、博物館増設の必要はこの辺にある。

ふたつの記事が同時期のものであること、表現が酷似することなどから、コドモ博物館は大渡忠太郎の発案だったとみてよい。大渡は、全国博物館週間の創設と運営、『博物館研究』の誌面刷新、地方都市での全国博物館大会開催など、日本博物館協会が大衆化路線を採用した時期(昭和8年～昭和13年)の常務理事であった。

コドモ博物館は、文部行政下の教育という課題としてではなく、広く民生のそれとして位置づけられている点に特徴がある。教育の範疇に置かれた戦後の博物館と、厚生行政下の児童館とがボーダーレ

スになりつつある現状からみても、コドモ博物館にはさらに拡張したイメージが感じられる。そもそも、民生の一部に教育があることを想起すれば、これも不思議なことではない。しかし、明治以降、初等教育に関して文部省が突出してきた経緯の下では、コドモ博物館の趣旨は受け容れられ難かったようだ。皇太子誕生記念事業としての博物館計画は、東京府、名古屋市、釜山府、金沢市、宮崎県などで見られたものの、大渡の提案に応えたものは知られていない。

さて、このときは不発に終わったわけだが、博物館事業促進会設立(昭和3年)が御大典記念事業であったように、天皇制イベントの活用は博物館もご多分に漏れることはない。であるならば、次の「日嗣の皇子は生まれましめ」(文部省)とき、子どもを主題にした博物館界のブームは、前例のないものとなるような気がするのである。



名古屋市博物館 犬塚康博

#### あとがき>>

隔月で発刊する予定だったニュースレターが、この号で第2号という惨憺たる結果となってしまいました。今年1年必死で走った気がしますが、研究会5回、見学会2回と、目標からはほど遠い結果となってしまいました。

12年度こそは、子どもの城の新しいプログラムを見に行きましょう！

また、『活きている博物館～歴史系博物館のこれから～』がやっと印刷でき、皆様のお手元に届いたと思います。1000円で頒布していますの

で、個人でご入用の方、お友達にあげたい方などなど是非ご連絡下さい。ちなみに郵送料は310円です。

次号は、いよいよ文部省『親しむ博物館づくり事業』についてご紹介する予定です(k)。

## news letter

第2号●2000年3月25日

発行●愛知県博物館協会 こどもと博物館研究会

〒489-0965 愛知県瀬戸市南山口町234番地 愛知県陶磁資料館内

TEL 0561-84-7474 FAX 84-4932 (担当／佐藤) 編集●一宮市博物館 久保・柳田 編集協力●名古屋市博物館 川合



1



どろんこやきもの探検隊！

2



わたしのパリはコレ！

## あいち子どもミュージアム ・キャラバン・

3



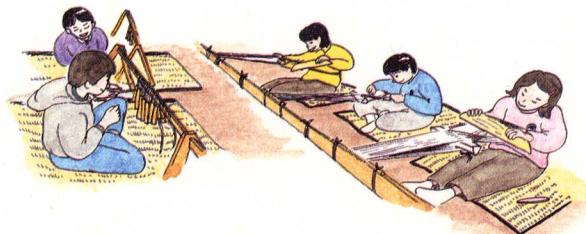
漁師は海のおさかな博士

4



焼く・煮る・炊くは食の基本！

5



編む・織る！縄文・弥生の布！

(左上) 抹茶体験／(右上) 野焼き作品制作  
(左下) 大窯作品制作／(右下) 瀬戸キャニオン(採土場) 見学



# どろんこやきものの探検隊

～野焼き・大窯で焼く～

主体館●愛知県陶磁資料館

報 告●愛知県陶磁資料館 佐藤一信(野焼き)、神崎かず子(大窯)

## 開催日●

野焼き○7月9日(日)、8月5日(土)・6日(日)

大窯○9月9日(土)、10月14日(土)・22日(日)、11月5日(日)

各日ともに午前10時30分～午後2時

会場●愛知県陶磁資料館他

参加者数●野焼き○小中学生30名、保護者28名

大窯○小中学生20名、保護者3名(最終日は保護者15名)

**目的**

野焼きと大窯の両方を体験することで、やきものが成立するなかで大きなウエイトを占める「焼く」というプロセスの意味とそのスケール感を理解することを目的とする。窯を使わず、目の前で焼成がおこなわれる「野焼き」では、参加者自身が採取した土で自由な作品制作をし、焼成をおこない、土が焼き固まってやきものへと変化するすべての過程を体験し、「大窯を焼く」では窯を用いて焼成し、釉薬をかけて、より堅牢で色彩も華やかな黄瀬戸というやきものを焼成し、野焼き作品と比較するだけでなく、あわせて茶室での喫茶体験などをし、やきものを見る、作る、触ることをとおして、やきものの歴史と文化に親しむものとする。

**概要****日程****○野焼き**

7月9日(日)

土採り・作品制作

場所／愛知県陶磁資料館 土採りは敷地内、作品制作は陶芸館でおこなった

講師／鯉江良二氏(陶芸作家・愛知県立芸術大学教授)

スタッフ／愛知県陶磁資料館(佐藤一信、神崎かず子)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館職員4名、陶磁資料館ボランティア8名、学生スタッフ・外部ボランティア若干名役割分担／受付、司会、写真撮影、ビデオ撮影、制作サポート、救急係

8月5日(土)・6日(日)

作品焼成・展覧会ガイドツアー・ペーパーキルン体験

場所／愛知県陶磁資料館 西駐車場

講師／鯉江良二氏(陶芸作家・愛知県立芸術大学教授)

スタッフ／愛知県陶磁資料館(佐藤一信、神崎かず子)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館職員6名、陶磁資料館ボランティア15名、学芸員実習生、学生スタッフ・外部ボランティア若干名

役割分担／受付、司会、写真撮影、ビデオ

撮影、焼成サポート、救急係

**○大窯**

9月9日(土)

お抹茶体験、黄瀬戸に触る、黄瀬戸作品制作、「黄瀬戸の時代をあるく」バスツアー  
場所／愛知県陶磁資料館 茶室「陶翠庵」、陶芸館、(バスツアー)長久手古戦場公園・資料館 他  
講師／加藤清之氏(陶芸作家)  
スタッフ／愛知県陶磁資料館(神崎かず子、佐藤一信)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館ボランティア3名

10月14日(土)

釉薬掛け・大窯窯詰め見学、「瀬戸を探検する」バスツアー  
場所／愛知県陶磁資料館 陶芸館、(バスツアー)瀬戸採土場、作助窯・加藤伸也氏アトリエ、加藤清之氏アトリエ  
講師／加藤清之氏(陶芸作家)  
スタッフ／愛知県陶磁資料館(神崎かず子、佐藤一信)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館ボランティア3名

10月22日(日)

場所／(バスツアー)常滑やきもの小径、常滑市歴史民俗資料館、窯のある広場  
講師／加藤清之氏(陶芸作家)  
スタッフ／愛知県陶磁資料館(神崎かず子、佐藤一信)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館ボランティア3名

11月5日(日)

スライド上映会とまとめ、作品渡し、「瀬戸」バスツアー  
場所／愛知県陶磁資料館 視聴覚室(バスツアー)瀬戸市歴史民俗資料館、瀬戸公園  
講師／加藤清之氏(陶芸作家)  
スタッフ／愛知県陶磁資料館(神崎かず子、佐藤一信)、豊田市郷土資料館(杉浦裕幸)、名古屋市博物館(淺野弘子)、陶磁資料館ボランティア3名

**内容****○野焼き準備**

7月9日当日までの準備  
材料の調達(粘土、制作用道具)  
雨天時に土採りができるときのための予備土採取 約60kg  
陶磁資料館敷地内土採取及び焼成実験見本づくり  
型おこし(保護者向けプログラム使用)こま犬石膏型づくり  
企画開発委員、実行委員そして陶磁資料館職員による打ち合わせ1回  
8月5日・6日当日までの準備  
材料の調達(燃料など)  
約3ヶ月前より準備をおこなったもの  
もみがら 米袋200袋は、陶磁資料館担当が近郊農協より調達  
倒木、廃材 軽トラック3台分 材木店より調達  
枯れ草 軽トラック2台分 敷地内調達  
前日準備  
会場整備 未舗装の駐車場を野焼き会場とし、テント設営、燃料の移動等をおこなった  
企画開発委員、実行委員そして陶磁資料館職員による打ち合わせ

**○大窯準備**

講師依頼、下見見学および依頼。配付資料は毎回作成。

**募集方法**

- ・募集は野焼きに限って広報し、野焼き参加者(30名)から大窯参加者(20名)を募ることとした
- ・芸術文化記者クラブなどへの資料配付
- ・近隣市町村役場・小中学校・文化施設を中心にチラシ配布
- ・地元の瀬戸市教育委員会に依頼し、特に参加を呼びかけてもらった
- ・締め切り日前に募集人数に達した(ミュージアムキャラバンリーフレット配布以前に締め切り)

**キャラバン当日****○野焼き**

「野焼き」は、当館が夏休みに合わせて開催する展覧会「こども美術館 やきものははっけんでん2」の会期中におこなっ



土取りをする（野焼き）



土をこねる（野焼き）



保護者用プログラム（野焼き）

た。対象は小・中学生とその保護者30組である。陶磁資料館は瀬戸市の丘陵地にあり、子どものみでの来館は難しいため、保護者付きでの参加とした。初日の午前中は、陶磁資料館の敷地内で土を採取し、午後に制作をおこなった。講師との事前の打ち合わせによって、作品制作においては子どもたちが土に触った感触から生み出すかたちを尊重すること、輪積みやたら板づくりといったやきものの成形のための技法を教えるのではなく、焼成に失敗しても良い、むしろ、失敗を前提にして自由な造形を最大限に引き出すための手助けをすることを確認し、土の感触

を一層強めるため、土採りと土練りをおこない、作品制作へとつなげた。さらに、子どもの自由な造形を引き出すため、作品制作は保護者とは別のテーブルでおこない保護者には別メニュー（こま犬キャラクターの顔石膏型を用いた型おこし）を用意した。参加者の反応は、というと午前中の土採りはその盛り上がりといつたら、子どもも大人も予定時間の半分も過ぎないうちに使い切れないほど大量の土を「ワーッ」と獲得する熱中ぶりだった。高い高い塔やむくの土塊のままの生き物など、学校や陶芸教室では焼いてもらえそうもないかたちをすごい勢いで作りまくったのである。

初日はこうして過ぎ去り、参加者には制作した作品を段ボール箱に入れ、家へと持って帰ってもらった。これは、土が次第に乾燥する行程を子どもに見せることとこの後の焼成に主体的に参加してもらうことをねらっておこなったものである。

た。こうして順番に作品を置いてもみ殻をかぶせて、全部を覆い尽くしたら乾いた葦をのせて火をつけた。子どもたちも小さな額に汗をじませてせっせと葦を運んでくれていた。あとは、もみ殻の様子を見てときどき補充しながら一晩越すのである。この大量の粉殻と23時間という時間とで出る熱量をもってして土をやきものへと変えるのであるが、このプロセスを伝えるには、言葉で説明するよりも少しでも長く、燻った粉の山の脇にいてもらうのが最良の方法ではないかと考えるのである。午後9時過ぎに激しく降った雨をもみ殻の上にトタン板をかぶせてしおぎ、翌日の午後3時、参加者全員が見守るなか、スタッフが大型扇風機でもみ殻を吹き飛ばし、良く焼けた作品が次々にあらわれてきた。冷め割れもほとんどなく、真っ黒な黒陶に出来上がった。また焼き上がるまでの間に、新聞紙で作ったバスケットの中に作品を入れて焼くペーパーキルンのデモンストレーション、展覧会「やきものはっけんでん2」のガイドツアーもおこなった。

こうしてできた作品は、私たちスタッフが展示室に並べた。

### ○大窯

当館では敷地内に大窯と登窯の復元古窯があり、これを隔年で焼成実験している。この古窯焼成への子どもたちの参加は、昨年がはじめてのことであった。

9月9日／茶室へ集合→黄瀬戸茶碗の拝見→お抹茶体験→（午後）陶芸館で制作

野焼きで焼いたこま犬と黄瀬戸茶碗を比較。野焼きを思い出し、今回の大窯焼成との違いや釉薬について説明。作品制作では子どもたちが自由に土と遊ぶこと、



制作後作品（大窯）



焼成する（野焼き）

## どろんこやきもの探検隊

納得するまで作らせること、求められるまで手伝わないこと、が講師の方針。

10月14日／陶芸館へ集合→施釉の見学、ガス窯・電気窯の見学→復元古窯に移動→大窯の見学

釉薬の原料・種類、窯焼成の燃料・温度などについて説明。窯場では焼成前の準備や窯詰め作業などを見学し、大窯の内部にも入る。

10月17～20日／大窯焼成の見学（15人）

窯焚きが予想以上に快調に進み、22日の見学ができない可能性もでてきたため急遽自由見学を呼びかけたもの。窯焚きの様子、炎の色、温度などを体感。

10月22日／焼成後の大窯見学

窯焚きがすでに終了していたため、窯のそばで余熱を確認し、焼成の様子やその過程をまとめて報告。

11月5日／親子参加で野焼き・大窯のスライド上映会、大窯焼成報告および作品の鑑賞会。

野焼き・大窯を振り返った後、子どもたちの作品を並べて大窯焼成の結果報告。釉薬の溶け方、発色などそれぞれ異なり、均一でない結果に驚きの声が上がった。

## ○見学会

テーマは、瀬戸や常滑といった古くか

らの窯業地を散策し、郷土のやきものにふれること。子どもたち同士の交流の時間にもなった。

9月9日／長久手古戦場跡資料館→色金山公園

テーマは「黄瀬戸の時代を歩く」。

10月14日／瀬戸キャニオン→作助窯→加藤清之先生の工房

広大で厚い粘土層、ダイナミックな景観に圧倒された後、古い窯屋さんの風情を満喫。講師からは絵を描く楽しさ、作る面白さなどをうかがった。

10月22日／常滑やきもの小径→常滑市歴史民俗資料館→窯のある広場

散策しながら常滑焼を予習し、瀬戸焼と比較しながら歴史などの話を聞き、最後に常滑の窯の中に入った。

11月5日／瀬戸市歴史民俗資料館→瀬戸公園

まとめに瀬戸焼の話を聞き、最後のおやつ交換会。

## 反省

## ○大窯

参加者について／低学年の参加者が多くだったので、歴史への関心が薄かった。

スタッフについて／企画実行委員とボランティアの協力なしにはできなかった。日程等について／両方併せての参加期間が長かった。また、野焼きと大窯の間隔が1月あいていたために、子どもたちの印象が連続しなかったのではないかと思われる。見学についてはあわただしく、とくに常滑はきつい日程であった。

その他／内容が多すぎた。また、予定通りに計画が運ばず、変更が多く出た。

## 参加者感想

## ○野焼き

7月9日

- ・気づいたことは、ねん土は、水でくっつくことです（小学3年生女子）
- ・おもしろかったこと、つちがねばねばしてた（小学1年生男子）
- ・土とりのときみた色は、赤茶色っぽい色や白っぽい色がありました（中略）（小学2年生女子）
- ・土をとるときすぐにとれておもしろかった。土をねん土にするときおもしろかった（小学3年生男子）



(左下) ペーパーキルン体験  
(左上) 焼き上がり  
(右) 作品展示風景  
(いずれも野焼き)



8月5・6日

- ・思ったよりは、上手にできてた。そういうじょうに大へんだった（小学5年生女子）
- ・できあがりになったら黒かったなんてしらなかつた（小学3年生女子）
- ・今日、もみがらからやきものをほりおこした。ほりおこした作品は黒っぽくてあつかつた。水をたらしたらジューと音がした（小学5年生男子）
- ・もみがらはすぐにはもえない（小学3年生男子）

### ○大窯

- ・焼いたあとに作品が小さくなつたので驚いた
- ・粘土と焼いた後の土がちがつていて驚いた
- ・窯焚きの時の炎の色がきれいだつた
- ・焼き上がりがみんな違つていて驚いた
- ・グランドキャニオンがすごかつた
- ・やきものいっぱいの常滑がおもしろかつた

### まとめ

### ○野焼き

「野焼き」について振り返ってみると、実施に先だって私たちが予想しなかつた事態や準備不足な事柄が多くあり、長期にわたるプログラムにも関わらず、場当たり的な乗り切り方をしたりと、反省す

べき点ばかりが思い浮かんでくる。具体的には、スタッフ全体での打ち合わせが不充分であったこと、事前に参加者がもっていた野焼きの（赤く酸化焼成で焼き上がるという）イメージに対し、私たちのおこなう野焼きについてレクチャーが充分でなかつたこと、プログラムの日程変更（ペーパーキルンが変更）があつたこと等々である。今後も完璧なプログラム運営は出来ないかもしれないが、長期のプログラムの利点を生かし、参加者一人一人の顔をみながら進めていきたいと考えている。

また愛知県博物館協会 こどもと博物館研究会の事業ということで、館園の枠を越えて他館の方々と一緒に進んできたことから得たものは、陶磁資料館にとって大きな成果であった。是非今後の陶磁資料館と愛知県博物館協会の活動につなげていきたい。

### ○大窯

ふだんは授業中の子どもを相手にする程度なので、今回は先生や親がそばにいない、素顔の子どもたちが見えて大変嬉しい時間であった。と同時に、こうした企画は予想以上に準備に手間がかかり、実施に体力がいることを実感した。

このプログラムの反省すべき点は多い。まず全行程が長期間だったので、野焼きに続いての参加に躊躇する人も多かつたこと。また、野焼きから1ヶ月の間隔が

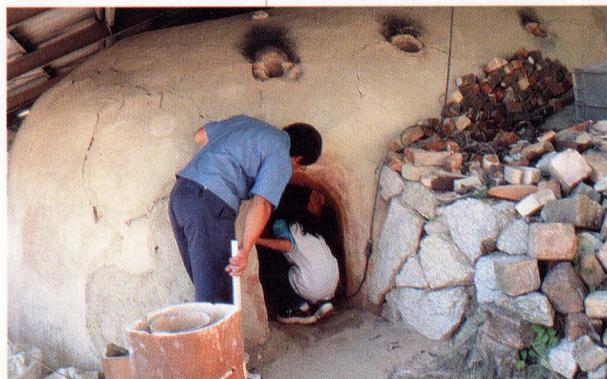
あり、しかも大窯焼成の行程と見学が同時進行であったため、本来のテーマである野焼きと大窯の印象が深まらなかつたのではないかと思われること。

さらに、作る方は興味があつても、身近な生活内にあるやきもの、瀬戸焼と常滑焼に子どもたちの関心が薄かつたこと、などである。これは企画内容が大人の視点であったためと気付き、ひとえに私自身の勉強不足、体験不足を痛感した。

しかし予想外の成果もいくつかあった。それは参加回数が多かつたため、こどもたちの間で自然におやつ交換会がはじまり、互いに仲良くなれたこと。講師の個性がこどもたちに印象的だったと思われること。焼成の結果、それぞれ異なる様子に焼き上がつた作品を、子どもたちが受け入れてくれたこと。軽い障害のある子ども3名が母親とともに参加したが、和気あいあいと楽しく過ごせたこと、などである。

私自身は子どもと博物館についてほとんど未経験だったので、子どもの目で見ることの面白さを知り大変有意義であった。しかし企画内容の不備が最大の反省点であり、「よりシンプルにより充実されること」が今後の課題であると思う。

最後に、スタッフや参加者から多くの協力をいただき、心よりお礼申し上げます。



窯詰め作業（大窯）



作家アトリエ訪問（大窯）

## どろんこやきもの探検隊


ちよつと  
やの  
野焼きの舞台ウラ!

何をしているのかな?

みんなのお父さんやお母さんが作った、  
こまどものもとになった石こうの型を作  
っているところです。さてといった石  
うは時間がたつと固まります。

固まるまえに流し終わら  
ないといけません。3人  
でがんばって、20個作  
ました。



焼きあがったこまどのかわい！どれもともと  
個性的なかわいできあがっていますね。

ペーパーキルンはどういうふうに作ったの?

野焼きのときには鶴江先生がやって  
みせてくれたペーパーキルンは、  
新聞紙をぼうのように丸めて、



それを使ってかごのようなものを  
2つ編んで、中に作品を入れ、くっ  
つけました。

野焼きパンフレット抜粋


黄瀬戸の時代をあるく  
長久手ドライブツアーリ

「黄瀬戸が作られたのはいつ?」

どんな時代だったの?」

今日は、みんなが作った黄瀬戸が、はじめて作られたのは、いつごろ  
だったのか？そしてそのころはどんな時代だったのだろう。

自分の足で歩いて考えてみよう。

1584年に豊臣秀吉VS徳川家康の戦い

「小牧・長久手の戦い」がありました。

黄瀬戸がはじめて作られた時代は、桃山時代でした。この  
ころは、日本じゅうでたくさんのいくわい(戦い)が、ありました。  
陶磁資料館のすぐあとないの町、長久手もその戦場のひとつで、  
文正12年(1584年)に豊臣秀吉と徳川家康の戦い、「小牧・長久手  
の戦い」があり、家康が勝利しました。じつは、この時代が黄瀬戸の  
作られた時代だったのです。



豊臣秀吉 (1537-1598)



徳川家康 (1542-1616)

## ●見学するところ

長久手古戦場公園・長久手郷土資料室  
資料室には長久手の戦いのことがわかる模型やパネルなどがあります

色金山歴史公園・床机石

色金山は豊臣が戦いの会議をひらき、戦略をたてたところです

## ドライブマップ



あいち子どもミュージアムキャラバン  
どろんこやきもの探検隊  
大窯で焼く

2000年9月9日(土)  
あいちけんとうしおりょうかん  
愛知県陶磁資料館  
0561-84-7474

大窯パンフレット抜粋

MEMORANDUM	東山公園にも、かまが
19/22	大きまは、中国やちょうどはんどう からつたふとてきた。中国はひろくから 大きさのぎしゆつカワは、たつ している。大きさがばんはいみにたつ。
19/240度	東山公園にも、でんとうてきぱくまかがある。 さんごで入り口でやく。
19/240度	のぼりやま
20日	大きまよりも作る力はいる えどじたいから、じょうは20年ぐらいた つかういた。
うえのほうが、1240度	エントラーホール
5日午後間	かまをうつしてきた。
19/240度	直径6m フーサー4軸
ねんうは、かまき	かま、900年前の間につくられた。
てつやで、5日とちよとたけ	昔は、かまは、いつようじだ。
いつまは、1週間ぐらい	ヒヒは、小さいものでなく、大きいもの。 とがんめいは、よこから、
いま、ひたれているかに、さわらなくて	10日へ12日、てつや。
あつい。	87のがまがつか。
11かまつ3日くらいいに、あうすけど、ぐんぐん	でなくても100度
かまつ玉にかまねどとたけ	とんねうかま、じんかのの中。 やきもの中トキスロヒヤキをあがっていろ
大きまは、はしら巣中にある。たまがら火かべ きかいで、かみひがふようによっている。	

参加者メモ

(左上) 参加者(午前の部) / (右上) 稲沢市荻須記念美術館  
(左下) 制作風景 / (右下) 参加者(午後の部)



# わたしのパリはコレ!

主体館●稲沢市荻須記念美術館  
報 告●稲沢市荻須記念美術館 山田美佐子

会場●稲沢市荻須記念美術館 会議室  
参加者数●小学生 16名、保護者 11名  
当日スタッフ●7名

**目的**

当館が所蔵・常設展示している荻須高徳作品(絵画)の鑑賞を深める事を目的とする。常設展示作品と、荻須がパリで使用していたアトリエ復元施設の見学と解説の後に、粘土で絵画作品を立体化する。制作後に感想を述べ合う中で荻須作品の特徴に繋げよう配慮する。

**概要****日程**

- 受付・あいさつ・メンバー自己紹介（10分）

## 2. 解説（20分）

会議室・アトリエ・展示室を回りながらパリと荻須について簡単に解説。アトリエでは建物の中を体感。展示してある荻須作品から粘土で作りたい作品を選び、ポラロイドで撮影。

## 3. 制作（1時間30分）

お菓子の箱などを利用して土台を作る。白・赤・青・黄・黒、5色のアクリル粘土を混ぜて色を作る。土台にはりつけ、ポラロイドを参考に荻須が描いた建物を立体で作る。

## 4. 感想（10分）

拡大したパリ市街図の上に置き、感想を述べ合う。

**内容****準備**

2000年8月31日、スタッフ打合せ会を稻沢市荻須記念美術館で開催した。打合せ会内容は下記のとおり。

## 1. メンバー紹介

## 2. ワークショップの進め方について

## 3. 当日までの準備

材料の仕入れ（材料チェック表別紙）

拡大地図の作成

パリ・グッズ集め（仏字新聞、化粧品・食べ物などの仏語表示ラベル、パリ地図）→会場ディスプレイや作品に使用。

箱集め→作品の土台に使用。

## 4. 当日の準備 会場設営

## 5. 当日の担当

受付（1）

## 会計（1）

解説者（1）

ポラロイド撮影（1）

制作サポート（5）

レポート係（1）

記録写真撮影（1）

## 6. 当日の流れ

受付（会議室にて）

あいさつ・スタッフ紹介・流れの説明解説

アトリエの見学

粘土で作るものを作る

制作（会議室）

## 7. 解説のポイント

（会議室→展示室→アトリエ）

（1）パリは芸術の都

（2）パリにあこがれ、パリに長く暮らした荻須の絵の特徴

ア. 何を描いたか

イ. どのように描いたか

ウ. いろ

エ. かたち

オ. 構図

## 8. 制作のポイント

（1）粘土だけでは大きさがでない。お菓子の箱を使って土台をつくる。

（2）土台を作るときは、はさみや両面テープを使う。模型のように細かくしない。

（3）色は原色が濃いので注意。少し混ぜるだけで良い。粘土は伸ばして土台に貼り付ける。

（4）かたちは、デフォルメ歓迎。細かいところは思いきって省略。

## 9. 鑑賞のポイント

（1）絵を見ていた時に気づいたこと・作っている時に気づいたことを発表する。

（2）大人の工夫、子どもの工夫、それぞれを尊重する。

（3）荻須の絵を鑑賞する新しい視点の開拓につなげる。

（4）時間のある参加者には、もう一度荻須の作品を見て帰っていただく。

## 10. 必要なもの

品名 必要数

アクリル粘土 一人につき 白色 大1個  
赤・青・黄・黒 小各1個

下敷き用厚紙 60枚

はさみ 10丁（子ども用）

カッター 10本（子ども用）

両面テープ（紙） 大1巻

## 品名 必要数

セロテープ 事務用3台

箱 葉子・化粧品の空箱をスタッフで集める

持ち帰り用手下げ袋 適宜（参加者持参）

記録用カメラ及びフィルム

ポラロイドカメラ及びフィルム

名札 講座用を使用

## 11. スタッフが実際に作り制作工程を確認

**募集方法**

- ミュージアムキャラバンリーフレット
- いなざわ広報で募集記事を掲載
- 依頼のあった雑誌に募集記事を掲載
- 美術館最寄りの小学校バザーで紹介コーナー設置
- ワークショップに興味がある教員の所属する近隣の小学校でチラシを配布

**経過**

- 締切日までに集まった応募数が少なかったため、地元の小学校にも参加を呼びかけた。
- スタッフの方々の協力で箱、パリの資料、パリ地図などが集まった。
- 自発的に粘土の試作をしたスタッフもあった。

**キャラバン当日**

質問形式のレジュメを当日配布し、これに従い説明をするようにシナリオを準備した。しかし時間が少なかったため、省略したり、当日の参加者の質問にも答えたり、臨機応変で解説した。

**1. パリは芸術の都**

**Q「フランスやパリから連想するものは？」**  
 みなさんが知っている、フランスの名前がついているものといえばフランスパンでしょうか。よく食べる食パンはイギリス風の焼き方ですが、フランスパンは長い棒みたいな形です。外の皮はぱりぱり、中はふっくらしています。三日月の形をしたクロワッサンもフランス生まれのパンですね。日本のケーキ屋さんやレストランはフランスの名前をよくつけます。

## わたしのパリはコレ！

おいしそうな感じがするからでしょうか。

荻須さんは今から100年前に稻沢で生まれました。その頃はまだ外国に行った人は少なかったのです。でも、荻須さんの叔父さんは東京でレストランをやっていたので、稻沢に帰ってくるとき、サンドイッチやバターをお土産に持って来てくれました。荻須さんは小さい頃、洋風の食べ物を通して外國を身近に感じていたようです。

さて、食べ物以外にもフランスで作られたものは意外にたくさん身の回りにあります。化粧品・洋服・カバン。ファッショングの流行もフランスが発信地。ニューヨーク・ミラノ・東京もがんばっているけれどね。今日の「わたしのパリはコレ」、略して「パリ・コレ」は、パリのファッショングショーガがまとめて開かれるのをパリコレクション、略して「パリ・コレ」っていうのをちょっと真似しました。

なんだか大人が楽しむものばかりかな？

そうです。フランスの人は年を重ねて味わいが出てきたものを大事にします。

そして、自分たちの文化や芸術を大事にします。モナリザやミロのヴィーナスがある大きな美術館があって、荻須さんが若い頃、芸術家的人はみんなパリで勉強したいと思っていました。お手本になる作品がいっぱいあるし、良い先生や仲間がいて、刺激になるからです。

### 2. パリに長く暮らした荻須

Q 「荻須さんはどれくらいパリに住んだの？」

荻須さんは稻沢に19歳まで住んでいました。それから東京の美術学校へ行き、卒業してすぐパリに行きました50年以上住みました。今は飛行機で14時間くらいですが、昔は船で1ヶ月かかりました。親兄弟ともう会えないかもしれませんと覚悟して行ったのです。時々は日本に帰ってきましたが、最後はパリで亡くなつて、お墓もパリにあります。

### Q 「パリのどこが好きだったのかな」

パリの建物の落ち着いた色やどっしりとした感じが好きだったので、それをずっと描き続けたいと思いました。パリの建物は石を積み重ねた上に漆喰という白い粉が塗っています。だからもともと全体は白っぽい。だけど何年も経って黒ずんだり汚れたりしてくる。そういう歴史を感じる建物が好きだったのです。これはあとから粘土で色を作るときの重要なポイントです。

それではアトリエに行ってみましょう。



(左) アトリエでの解説  
(右) アトリエ復元施設



### 3. 荻須さんが絵をかいた部屋=アトリエ

Q 「何があるかな？」

ここは荻須さんがパリで絵をかいていた部屋と同じ大きさで作ったものです。中の壁の色も荻須さんが好きな色を塗っています。青みがかった薄い灰色です。

家具や絵の道具は全部荻須さんが使っていたものです。古い家具を買って大切に手入れして使っていました。筆も使ったらきちんと洗って、次に気持ちよく使えるようにしていました。

### Q 「大きい窓はなんのため？」

この部屋は芸術家が住むマンションの一室です。お隣や上も下も、音楽家、画家、彫刻家、いろいろな芸術家が住んでいました。窓は、作品を作るときまぶしすぎないように北向きで、光がたくさん入るように大きくなっています。では、荻須さんがどんな絵を描いたか見に行きましょう。

### 4. みつけてみよう荻須さんの絵の特徴

荻須さんはまだ生きていた時に、ふるさとの稻沢市に自分の絵を寄付してくれました。

若いときから年をとるまで絵の移り変わりがわかるようにと考えていましたので、美術館でもなるべく描いた順番に並べています。

Q 「何が書いてありますか？」

荻須さんは写生が大好き。小さい頃から工力キがあだ名でした。中学校時代はこのあたりを自転車で出かけては写生していました。フランスへ行っても、やっぱり写生です。建物が多いですね。でも、あまり観光客のいない裏通りが好きだった



パリ資料コーナー



常設展示室



展示室での解説

ようです。人より建物が中心です。でもどこかの窓から人が乗り出していますよ。

#### Q 「どんな色を使っていますか？」

明るい？暗い？どんな感じがしますか？ 空の色もちょっと注目。よく、「パリはいつも天気が悪いのですか。」と聞かれるのですが…。

#### Q 「どんなかたち？」

縦長？横長？ 三角？ 丸？ 四角？

#### Q 「形の組み合わせはどうなっているかな？ どちらから建物を見ているかな？」

人が住む建物なのであまりへんなかたちは有りませんが、屋根はどのように繋がっているのでしょうか。線が組み合って面白くなっています。さて、創作家具屋はどんなふうになっているのかな。中庭があることは解りますか？

「金のかたつむり」や、「オーモカ・シャロンヌ」などは、建物のどちらから描かれていますか？真正面より少しどちらかに寄った方が、奥行きがわかりますよね。絵はどちらから見てもかたちのあるものを一枚の紙や布にかくのですが、見ている人にはそのかたちがわかるようにしたいので、影をかいたり、むこうのほうに延びる線で表したりします。

ところで、よく見ると建物が人の顔みたいにみえてこない？

#### Q 「何でかいているかな？」

(油彩・水彩・リトグラフ・タピスリー・ペン、いろいろあります。技法は長くなるので省略。)

色がはっきりして長持ちするのが油彩画です。水彩絵の具は水で溶きますが、油絵の具は油で溶きます。近くで見ると絵の具のかたまりですが、遠くで見ると形に見えるのが面白いですね。

#### 5. 荻須さんが油彩で描いた建物をひとつ選んでみよう

では、いよいよ作る作品を選びましょう。決まったらスタッフに写真を撮ってもらいましょう。写真と本物と比べて、本物の色を確認しておいてください。いつもは荻須さんの作品は撮影できません。絵は描いた人が死んでから50年間は勝手に写真を撮って使ってはいけないです。今日は美術館の中での研究用ということで、特別です。

会議室と展示室を行き来しても良いです。みんなが撮りおわったら会議室に戻ります。

#### 反省

##### 1. 参加者について

参加者が定員より少なかった。学校や地域の行事が多い季節であったこと、ワークショップの趣旨が伝わらない（粘土あそびは家でもできる）などがあげられる。また広域から募集する場合、午後の方が参加しやすいと思われる。しかし、会議室が狭いため1回5組程度が適当であった。

##### 2. スタッフについて

親子1組にスタッフ各1人が付くことができた。企画実行委員の協力に感謝している。どんどん作っていく参加者もあったが、スタッフが目の前で作りながらアドバイスすることで作りやすくなった参加者もあった。

##### 3. 時間について

制作時間が1時間30分では短いようである。制作を中断しづらく、延長したが、感想の時間でもう少し荻須の絵にフィードバックさせたかった。休憩を入れるようにして全体で3時間は必要ではないか。

夏休みなら午前は説明、午後は制作という1日コースも可能かと思う。

#### 4. 材料について

土台の箱は大量に要る。パリ資料集めとともに実行委員の協力を仰いた。

当初は小麦粉粘土で試作したが黒色がないため、荻須の描いた色が出しにくいくことと混色が難しかった。乾燥が速く、数日で作品がひび割れるのも難点であった。その後、扱いやすい粘土（ハーティ・クレイ）を事務局から提案され、試作の後採用した。混色も容易で手触りがよい。この粘土がワークショップ成功の鍵となった。

#### 参加者の感想

- ・家がたくさんで難しかった
- ・屋根がうまく行かなかった
- ・色の作り方や使い方が難しかった
- ・建物が顔みたい
- ・簡単だった
- ・時間があったらもっとやりたかった
- ・楽しかった
- ・土台だけ大変
- ・棒の色が難しかった（「ノワルムーチエの風車」の再現は、棒の表現でみんな苦労した）
- ・時間がないから無理かと思ったが余ったので地面も作り、風車も回るようにした
- ・シンプルだと思ったが難しかった
- ・集中できた
- ・にじんだような色を出すのが難しかった
- ・箱の組み合わせが難しかった

#### 実行委員の感想

- ・日頃子どもと接することがないので楽しかった

- ・ 子どもの想像力にびっくりした
- ・ いつもは空間がどうのとか考えて作るが、創作の原初の喜びを思い出した（芸大生）

### まとめ

絵画は「実用の道具」ではない。荻須が描いた油絵作品は、直接「使う」ことは不可能である。他の博物館の衣食住に密着したワークショップと比較して、美術館内での鑑賞が主体のワークショップは、あまりにもダイナミックさに欠けるのではないかという不安があった。

しかし、美術館として、一方的に解説するだけではない、より深い鑑賞体験の機会作りは懸案でもあったし、1館では行き届かない県下へのPRもできると考え、キャラバンの一環として参加することとした。

かねてから、通常行う視覚に頼る鑑賞を、「目から手へ伝達し粘土で再現することでより深いものに出来ないか」と考えていたので、子どもたちにとって、平面を立体にすることがどこまで可能かは疑問であったが、今回のような内容で開催することとした。

結果的には予想以上に子どもの想像力は素晴らしい、荻須作品のポイントをしっかりとつかんで、どんどん形にしていった。初めは消極的だった親も、子どもの制作の世話よりも、自分の作品制作に熱中していった。粘土の手ざわりが、子どもの頃の創作を思い出させてくれたようである。

また、作る楽しさだけでなく、土台を作り際にパリの建物の特徴に気づき、複雑な色を求めて試行錯誤することで、荻須の色使いの複雑さが実感できたようで、当初の目的は十分果たされたと感じた。

さらに、日頃、作品解説するうえで、なにが描いてあるか・どのように描いてあるか・どこに制作意図があるかを、鑑賞者自身が見出すよう心がけるが、このワークショップでは参加者が粘土で再現するという目的に向けて、これらのポイントを押さえて、自然に絵をよく見るという自発性が促されていた。解説を聞き流す受身の鑑賞とは意欲が違う印象を受けた。ただし、気づいていることに気がつかないことがあるので、言葉を添えてサポートすることが必要であるし、気づいたことを荻須の制作意図に繋げ、「作品や作家との共鳴」に近づけるよう配慮することが企画側の役割であろう。

街のシックな色彩、建物の構造、複数の建物が織り成す構成の美しさは、荻須がパリの絵を書き続けた動機であった。屋根や窓のつくりを細かに観察し、煙突を立てたり、影を作ったりして肉薄しようとする参加者の制作中の熱中ぶりを見ていると、作家が作品を描く時の熱い思いを彷彿とさせるものがあった。美術館にとっても、大変刺激となるワークショップであった。

### <配布資料>

2000.11.11

稻沢市荻須記念美術館

「わたしのパリはコレ！」

○受付

○あいさつ

○メンバー紹介

○ワークショップの進め方について

○解説

(会議室)

1. パリは芸術の都

Q フランスやパリから連想するものは？

2. パリに長く暮らした荻須

Q 荻須さんはどれくらいパリに住んだの？  
Q パリのどこが好きだったのかな  
(アトリエ)

3. 荻須さんが絵をかいた部屋

Q 何があるかな？  
Q 大きい窓はなんのため？  
(展示室)

4. みつけてみよう荻須さんの絵の特徴

Q 何が書いてありますか？  
Q どんな色を使ってますか？  
Q どんなかたち？  
Q 形の組み合わせはどうなっているかな？どちらから建物を見ているかな？  
Q 何でかいているかな？

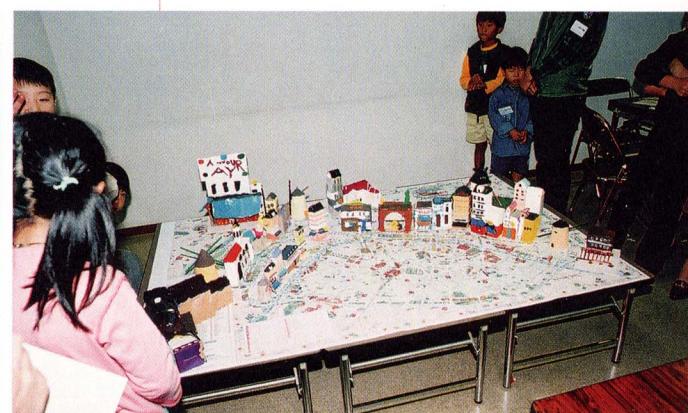
5. 荻須さんが油彩でかいた建物をひとつ選んでみよう

○制作 (会議室)

○感想

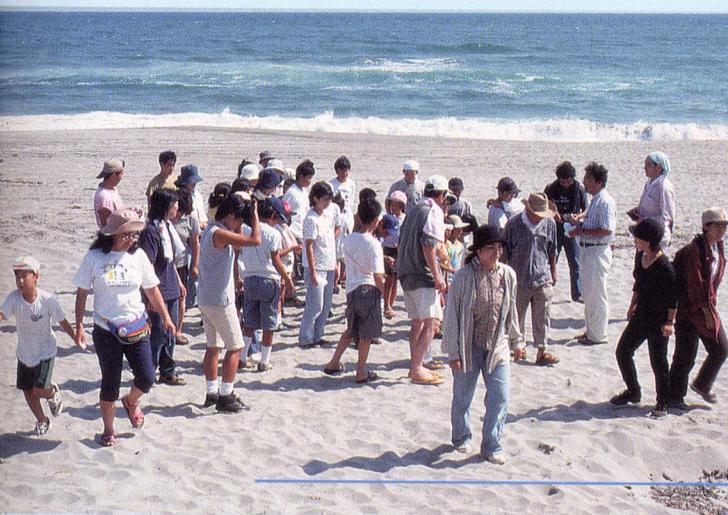


制作説明



パリ地図に作品を置いて鑑賞

(左上) 現地到着。残念そうに海を見る参加者たち。一見穏やかに見えるのだが、沖はうねっているため、網が引けない／(右上) 瀬能先生から魚の説明を聞きています／(左下) 食事のひとこまです。種類による味の違いがわかるかな?どの魚が一番おいしかったかな?／(右下) 準備ができたら、バーベキュー



# 漁師は海のおさかな博士

主体館●豊橋市自然史博物館  
報告●豊橋市自然史博物館 長谷川道明

開催日●2000年8月10日(水)  
会場●豊橋市細谷町の海岸  
参加者数●小学生 28名、保護者 19名  
当日スタッフ●14名

## 目的

海産魚類は、古くから日本人の重要な食料として、それぞれの地域で文化、風俗に深く関わっている。しかし、これほど身近な生き物でありながら、漁やダイビングでもしないかぎり直接その生きた姿を観察することはできず、漁業を営む家庭にでも育たないかぎり、子どもたちにとっては、まさに「近くで遠い存在」である。

このワークショップでは、地引き網漁によって、目の前の海に生息する魚類を捕獲し、郷土の海にはどのような魚が生息しているのかを直接観察することを第一の目的とする。

さらに採った魚を石器（石包丁）を実際に使用して調理し、食べることによって、昔の人々の知恵と暮らしを体験することを第二の目的とする。自然の中から食料を採集して生活していた時代、「食べられるもの」「食べられないもの」「味の良いもの」「味の悪いもの」等を識別することは生きていく上で必要不可欠な知識であったはずである。このことから、生物（自然）を学ぶことの大切さを実感する。また、石器がいかに工夫された道具かを実感する。

また食後、残骸となった骨を詳しく観察し、種によって骨にも特徴があることを知る。考古学の分野では、遺跡から出るゴミ（魚などの骨）を研究することによって大昔の人々の暮らしを明らかにする研究分野（動物考古学）ある。この紹介を第三の目的とする。

博物館協会主催ならではの複数館共同ワークショップとして企画。五感を使った今までにない総合体験型学習をめざした。

## ○導入…遺跡から出土した魚の骨（考古学）

### ○展開…

◇地引き網の体験・漁師さんと話す（キーワード：民俗学、マイナス・オン）

◇獲れた魚の分類（キーワード：魚類学・分類学・調べる）

◇魚を石器で調理する（キーワード：考古学、ハンズ・オン）

◇食べる（キーワード：味覚、味による分類、たのしい・おいしい）

◇残った骨を肉眼と顕微鏡で観察し、調べる（キーワード：解剖学、動物考古学）

## 概要

1. 開催日／8月3日（水）  
※荒天の場合は8月10日（木）に延期
2. 実施場所／豊橋市細谷町の海岸  
バス2台（豊橋駅前集合）
3. 対象／小学生・中学生とその親
4. 募集定員／50人
5. 持ち物／筆記用具、皿・箸、昼食  
用のご飯など
6. スタッフ  
企画／長谷川道明（豊橋市自然史博物館：動物学）、久保禎子（一宮市博物館：民具学・考古学）  
講師／瀬能宏（神奈川県立生命の星・地球博物館：魚類学）、樋原岳二（早稲田大学：動物考古学）、水野裕之（名古屋市見晴台考古資料館：考古学）、岩瀬彰利（豊橋市美術博物館：考古学）  
スタッフ／名古屋市博物館（犬塚康博）、愛知県陶磁資料館（佐藤一信）、一宮市博物館（川島正二、下出至子、宮下十有、祖父江佳世）、徳川美術館（加藤啓子）、岡崎市美術博物館（天野幸枝）、

## 日程

- 9:00 豊橋駅前集合・出発  
(バスの中で、主旨説明)  
9:50 到着・スタッフの紹介とあいさつ  
10:00 網入れ開始（漁の進行をみながら地引き網の仕組みを説明）  
11:00 網上げ  
11:00～12:00 採れた魚の分類と観察  
12:00～13:00 石器を使って採れた魚を料理  
13:00～14:00 食事・自由時間  
14:00～15:00 ゴミとなった魚を調べよう  
石器づくりを体験（2班に分かれて交互に実施）  
15:00 バス出発  
15:50 豊橋駅着・解散

## 内容

### 準備

#### 1. 地引き網

遠州灘に面する豊橋市細谷町では、観光地引き網が行われている。漁協から網元を紹介してもらい、ワークショップの企画意図を説明し、協力を要請した。

実施日は、網元と相談し、もっとも波の穏やかな日が多い、8月上旬に設定した。

#### 2. 講師

外部講師は、本ワークショップの中核となる魚類分類学、動物考古学の2分野から、現在最もアクティブに活躍している若手研究者としてお二方を招いた。これは、参加する子どもたちに最前線の研究者と接する機会を与えるという目的もある。

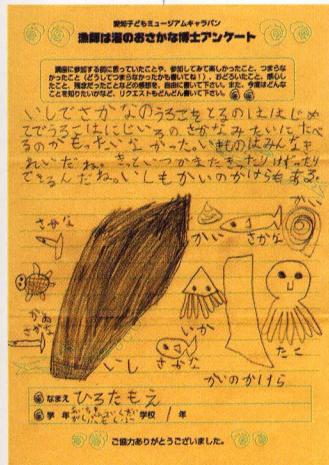
#### 3. 調理道具など

テント、バーベキューの道具について



(左) 荒天のため地引き網が引けなくなったため、やむおえず漁港で揚げられた魚を仕入れる  
(右) バスの中での樋原先生の説明

## 漁師は海のおさかな博士



参加者アンケート

は、地元リース会社を利用。顕微鏡、解剖用のトレイなどはそれぞれの博物館から持ち寄った。

## 4. 石器

調理に使用した石器（下呂石＝安山岩）は、子どもたちが自ら制作したものを使い始めたが、時間の都合上考古担当者が事前に人数分を用意した。石器は子どもが使っても問題ないよう、ある程度研ぎ具合は調整した。

## 募集方法

往復はがきによる事前受付

## キャラバン当日

南太平洋上で台風が発生し、その余波で波があり、予定日の8月3日に地引き網を実施することはできなくなった。10日に延期し、波が静まるのを期待したが、小型の船で操業する地引き網を実施できるまでに波が静まることはなかった。

やむをえぬ代替え案として、実際の船と網を見学されてもらい、漁師さんたちに道具の説明をお願いして、地引き網の体験に代えた。魚については遠州灘、三河湾の魚類を水揚げする地元の漁協に協力を要請し、早朝に出航できた船から水揚げされた魚を分けてもらい実施した。

## 実施内容

- 9:00 豊橋駅前集合・出発  
(バスの中で、主旨説明)
- 9:50 到着・スタッフの紹介とあいさつ
- 10:00 漁師さんによる地引き網と使用する船の説明
- 11:00～12:00 魚の分類と観察
- 12:00～13:00 石器を使って魚を料理
- 13:00～14:00 食事・自由時間
- 14:00～15:00 ゴミとなった魚を調べよう  
石器づくりを体験（2班に分かれて交互に実施）
- 15:00 バス出発
- 15:50 豊橋駅着・解散

## 反省と課題

最大の反省、心残りは、あえて延期までしたのにもかかわらず、海が荒れたため、地引き網を実施できなかったことである。

遠州灘に面する現地はサーフィンのメッカとして知られるほど波の高い日が多く、地引き網の操業日もそれほど多くない。実施できない可能性が必ずしも低くないことは最初から承知していたが、あえて「郷土の海に住む魚の観察」「県下でもっとも保存がよい自然海岸」という2点にこだわった。また、担当主体館である豊橋市自然史博物館の地元であるという点、バーベキューセットやテントなどリース物件の便などから現地が選ばれたが、波の静かな三河湾、あるいは伊勢湾内での実施を考えるべきであったかも知れない。

第二に、後で詳しく述べるように地引き網には、様々な利点があるが、学術的な正確さからいえば、時代的な矛盾を無視しておこなった。すなわち、地引き網が実際に行われるようになったのは古墳時代前期で、調理の際に使用した石包丁や遺跡から出土する魚骨の年代とは大きく食い違い、縄文時代の生活の体験という意味合いからは誤解を受ける恐れがある。さらに観察会の現地（豊橋市細谷町付近）で地引き網を行うようになったのは、戦後のことで、歴史はごく浅く、「地元に伝わる伝統漁法の体験」とはいえない。参加者にはそれぞれの体験が鮮烈であればあったほど、それぞれの体験（採集十調理十出

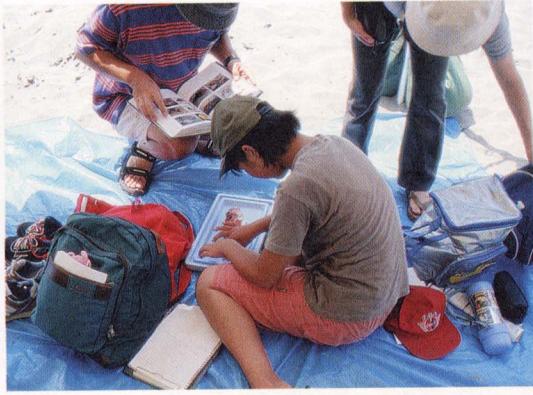
## 参加者の感想

- ・石でさかなのうろこをとるのははじめてで、うろこはにじいろのさかなみたいでたべるのがもったいなかった。生きものはみんなきれい（小1女子）
- ・専門知識を持った大人に身近に話を聞いてよかったです。地引き網ができなかつたのは残念でしたが、漁師さんが仕事道具を大切にあつかっている様子は、子どもなりに何かを感じとっていたと思う（大人）



(左) 地引き網漁に使う船を見学。思ったより小さい?  
(右) 漁師さんから地引網を見せてもらい、漁の方法の説明を聞く

(左)各自で気に入った魚を選びます  
(右)選んだ魚の名前を真剣に調べる  
参加者。名前がわからなければ食べ  
てはいけない約束です



土した魚骨の年代）を同一時代のものとして理解してしまう恐れがあり、注意が必要であろう。この点の矛盾に気がつかなかったのは、企画主担当者の長谷川が自然系で、考古、民俗の知識に疎かったことに起因する。

スケジュールの面からも反省がある。無理に一日の日程におさめたため、「一つの材料を多角的に、かつ一環した体験学習」を目標にしながら、自ら造った石器で、魚をさばけなかったことである。日程にもっと余裕を持って、まず、石器作りから始め、手製の石器で調理する機会を与えた方が、より学習にインパクトがあり、自分の作業目的を明確にできたと思われる。

### まとめ

最後にこのワークショップの企画意図と動機、そして我々が感じた成果について述べたい。

最近、各地で観光地引き網が盛んに行われ、人気を博している。何時だったか、家族とテレビを見ていたら、地引き網で上がった魚の種名を当てて、その博学を競うコンテスト番組があり、大変面白く視聴した。たしかに地引き網には実際に

色々な魚が混獲される。これを科学的に確かなワークショップに発展できないだろうか。そのとき思いついたのが、この企画である。

海産魚類はワークショップの対象として色々な利点が考えられた。まず第一にこれほど我々の生活（食生活）に浸透し、馴染み深い生物はそうざらには存在しない。しかし、その反面、その自然の姿を直接観察することが非常に難しい。スキューバダイビングという極めて専門的な趣味を有するか、あるいは漁師の家にでも生まれない限り、我々は、海の魚を水族館以外で見ることはほとんどできない。自然科学の分野では最近、環境教育がもてはやされ、野山で子どもを対象にした観察会が多く行われるようになったが、海産魚類を対象にした観察会が希なのは、こうした難しさの現れであろう。しかし地引き網なら、まさに目の前に広がる海に網を入れ、現在進行形で泳いでいる魚を無作為に浜に上げることができる。泳いでいる姿とその環境こそは見えないが、ふるさとの海に生息する魚（あるいは地元の海の生物多様性）の学習という意味では、直接的な自然観察とさほど変わらない。さらに地引き網という漁法を体験すること自体、大変楽しい体験学習であ

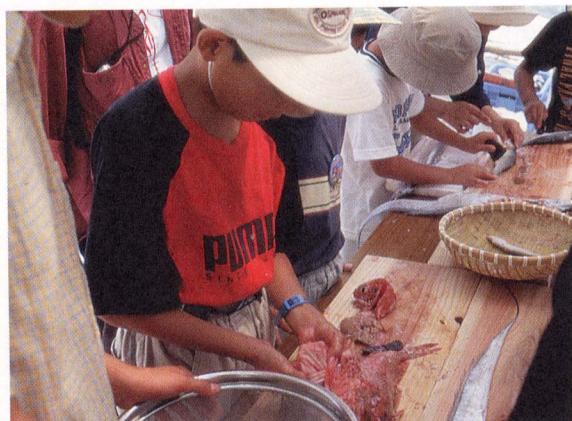
る。漁が成功すれば、参加者は収穫の喜びを得ることができるので加え、地元の海には実に様々な魚が生息していることを知ることができる。

次に先にも述べたように、魚には食材としての側面がある。魚の種の違いによるタンパク質合成の違いは「味」に反映される。旨い魚を食べるにはすなわち、旨い魚種を正確に同定する力が必要となる。味を決めるのは種の違いただけではない。魚は季節によって味の良い季節と悪い季節がある。何時の時期に味が良くなるのかは、その魚の生理・生態を知らなければならない。また多くの魚はいつも同じ海域に留まっているわけではない。魚の行動研究は、直接水揚げの成果に反映される。つまり、魚類学のさまざまな知識は、旨い魚をたくさん食べるため必要な学問であるのだ。こうした生活と率直な繋がりをもつ学問の側面を通して、子どもたちに自然科学を勉強することの意味を感じ取ってもらえることを期待した。

第二の企画意図は博物館協会に加盟する県内の博物館の学芸員が互いにそれぞれの専門分野を活かした共同企画の模索である。考古学では遺跡から出土する魚骨の研究が注目されているし、遺跡から出土する石器などの使用方法を体験する講座は盛んに行われている。一方で、いろいろな漁法は民俗学の重要な調査研究テーマである。魚というのは、考古学、民俗学等様々な分野からアプローチできる好対象と思われた。

### 「寄せ集め」の成果

この企画で、参加者、スタッフ共々最も得ることができたのは、「魚」という媒体を通して、色々な分野の側面に触れることができたことであると思っている。参加者には、より多様（多方面な）サービスが提供できだし、参加したスタッフには、マンネリ化する各館のワークショップに



石器を使って調理開始

## 漁師は海のおさかな博士

新しい風を吹き込む可能性を感じとることができたのではないだろうか。これは、筆者だけの感想ではなく、スタッフとして参加した天野幸枝氏（岡崎市美術博物館）も同様なことをレポートに述べているので、そちらもぜひ参照していただきたい（CEMA, 3）。

愛知県には多くの博物館が活動し、色々なワークショップが企画実践されているが、複数館が共同で一つのワークショップに取り組んだ例はこれまでになかったように思われる。各館独自の企画の場合、どうしてもいろいろな制約から実現が難しいが、今回のように博物館協

会という組織が主体になれば、このような企画も比較的容易であることは今回の一連のキャラバンが示している。こうした企画は、いい意味で博物館協会の独自性と指導力を発揮する良い機会となるし、加盟館相互の質の向上、さらにはより高度で魅力ある普及活動への発展へと繋がる可能性を秘めているようを感じた。

最後にワークショップに参加した子どものお母さんからいただいた感想を紹介して筆を置きたい。

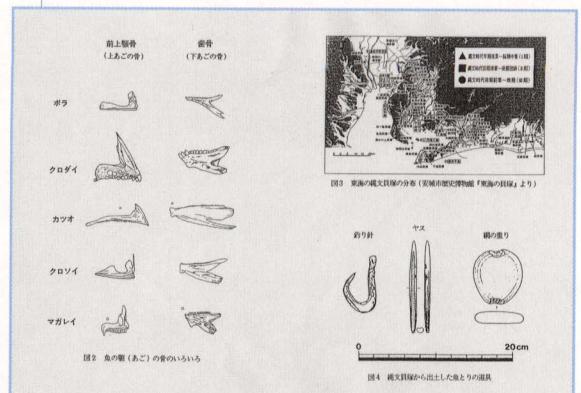
『子どもたちに貴重な体験をさせていただいてありがとうございました。普段接する大人は、学校の先生、習い事の先生、親

戚、近所の人たちとかで、魚の小さなカケラを見て種類がわかったり、魚のことにとっても詳しかったりする専門知識をもった大人に身近に話しかけたことはよかったです。地引き網体験ができなかったのは残念でしたが、漁師さんが仕事道具の網を大切にあつかっている様子には子どもなりに何か感じとってくれたと思います。石器を使って自分で選んだ魚を実際に調理して食べる体験は子どもにとってとても楽しかったようです。体験するイベントを通じて自分の興味をどんどん広げて知識を身につけてもらえたと思います。』



(上左)食事の後は、食べ終わった魚を利用して、骨を調べます。食べ終わった魚を水で洗い、骨をていねいに取り出します  
(上右)取り出した骨を実体顕微鏡で調べる。この時、食べる前に調べた名前が役に立ちます。同じ骨でも種類や場所によって形が違います。「きれい！」と思わず口にする参加者も  
(下)石器づくりに挑戦！切れる石器をつくる技術の高さを身をもって体験しました。これでは魚はさばけない？

レジュメから



(左上) まずはドングリを採集する／(右上) スダシイとクリの殻をむく  
(左下) 煮る・炊く・蒸す／(右下) できたぞ！



# 焼く・煮る・炊くは食の基本！

主体館●安城市歴史博物館

報 告●豊橋市自然史博物館 藤原直子（自然編）

安城市歴史博物館 岡安雅彦（土器づくり編）

開催日●2000年11月11日(土)・12日(日)・25日(土)・26日(日)  
午前10時～午後4時

会場●安城市歴史博物館

参加者数●小学生19名、保護者12名

## 目的

今回のキャラバンでは、縄文時代と弥生時代の違いを、食生活の面から見るとどうなのかを体験する事を通じて知ってもらうことを目的に開催された。具体的には縄文土器の深鉢と弥生土器の台付甕、という煮炊具の器形の相違が機能差を反映しており、調理方法が「煮る」から「蒸す・炊く」というように変化していることを土器づくり、縄文時代の料理・弥生時代の料理を通じて肌で感じてもらえばと考えて行った。

## 概要

### 日程

#### ○自然編

11月 11日（日）

食材とするドングリの採集

場所／岡崎市「健康の森」、白髪神社

講師／藤原直子（豊橋市自然史博物館）

スタッフ／豊橋市自然史博物館（藤原直子 長谷川通明）一宮市博物館（久保禎子）岡崎市美術博物館（天野佳枝）安城市

歴史博物館（榎原恵美）

#### ○土器づくり編

11月 12日（日）

縄文土器・弥生土器を製作

ドングリのアク抜き

講師／岡安雅彦（安城市歴史博物館；歴史・考古学）

スタッフ／豊橋市自然史博物館（藤原直子 長谷川通明）、一宮市博物館（久保禎子）、岡崎市美術博物館（天野佳枝）、愛知県陶磁資料館（佐藤一信）、安城市歴史博物館（榎原恵美）

11月 25日（土）

土器を焼く

講師／岡安雅彦（安城市歴史博物館；歴史・考古学）

スタッフ／豊橋市自然史博物館（藤原直子 長谷川通明）、一宮市博物館（久保禎子）、岡崎市美術博物館（天野佳枝）、愛知県陶磁資料館（佐藤一信）、安城市歴史博物館（榎原恵美）

11月 26日（日）

土器を使って煮炊き、食べる

場所／安城市歴史博物館

講師／岡安雅彦（安城市歴史博物館；歴史・考古学）

## 史・考古学)

森泰通（豊田市役所；考古学）

スタッフ／豊橋市自然史博物館（藤原直子 長谷川通明）、一宮市博物館（久保禎子）、岡崎市美術博物館（天野佳枝）、徳川美術館（加藤啓子）、愛知県陶磁資料館（佐藤一信）、安城市歴史博物館（榎原恵美）、

## 内容

### 準備

#### ○自然編

ドングリ採集場所の選定

標本の用意

#### ○土器編

縄文土器用と弥生土器用の土の準備

## 募集方法

往復はがきによる事前受付

## キャラバン当日

### ○自然編

11月 11日（土）

食材とするドングリの採集

午前10時に安城市歴史博物館駐車場に集合。新安城駅から参加者を拾ってくるバスを待っている間にすでに、駐車場沿いに植えられているシラカシのどんぐりを拾いはじめる親子の姿がみえた。「このドングリ知ってる？」とおしゃべりを始めると、「うちのちかくで前ひろったのはもっと大きいやつだったと思う。」「僕はドングリを食べたことがあるよ！」など、さまざまな返事がかえってきた。参加者の関心の程度が高いことが感じられ、この印象は一日中続いた。4日間にもわたるプログラムを体験しようという意気込みのある方ばかりだから当たり前といえばそうかもしれないが、「ドングリ」という素材の親しみやすさは抜群で、楽しそうだと感じてもらうのに説明は要らないことを改めて感じた。また、野外を歩くこと自体が気分のよいものだという感想も聞かれた。確かに、野外で行う自然史をテーマにしたプログラムの楽しみを十分に味わえる、良く晴れた秋の日であった。

だれでも知っているかわいい木の実

“ドングリ”とは、ブナ科の樹木、その中でも主にコナラ属の堅果の総称である。落葉性の種類をナラ、常緑性の種類がカシと二通りに呼びわけたりもするが、実際には日本には15種もの種類が知られている。同じくブナ科の植物であるクリやシイ類とともに、縄文人には重要な食べ物として利用されていた。このキャラバンは、縄文時代・弥生時代の煮炊きの土器を作成し、それを使って当時の食を体験するものである。当時の生活や社会を土器という道具を手がかりに考えていくわけだが、食べ物あっての道具、食べ物あっての生活である。種ごとに分布も、味一すなちあくの強さも違うさまざまなドングリを知ることは、その利用方法を体験するにあたって不可欠と言えるだろう。

全員がそろった後、バスで岡崎市の「健康の森」へ向かった。約1時間の移動時間中に、本日および4日間通した日程の説明、参加スタッフの自己紹介を行ったあと、今日のプログラムの導入として採集予定のドングリについて簡単に解説を行った。岡崎市美術博物館駐車場でトイレ休憩をとったのち健康の森駐車場へ移動し、すぐに歩き始める。駐車場に面した斜面は明るい雑木林になっており、コナラのドングリが道いっぱい落ちているのを拾うことができた。参加者はおののドングリ拾いに夢中になって列がほどけ、このあとは主に豊橋市自然史博物館の長谷川と藤原で、適宜質問に答えたり、解説をしたりしながら散策を続けた。ドングリを使った笛づくりなどの遊びや、昨年のドングリの実生がたくさん見られる様子などを紹介した。また、その他の植物や昆虫などについても、参加者の発見に答える形でお話しした。見晴らしの利く広場で昼食の休憩をとった。ここでは、準備してきたたくさんの種類のドングリを含めたブナ科植物の堅果や、参考になる図鑑などを紹介した。また、カセットコンロとフライパンを運びあげて、スダジイ・カヤを煎って食べてもらった。スダジイについては、散策中に近縁のツブラジイを拾うことができたため、生のそれと食べ比べて、火を通して味がわかることがよくわかつてもらえたようだ。「甘みがある」「おつまみにもいけそう！」などの感想が聞かれた。

昼食後も散策を続け、午前中とは違うコースを通って出発地点の駐車場へもどった。ここまでで、コナラ、アベマキ、ツブラジイ、シラカシ、アラカシそしてクリを拾うことができた。

再びバスに乗って約30分移動する。トイレ休憩を一度挟むが、参加者のほぼ全員が使うとそれなりに時間がかかってしまう。

その後、岡崎市内白髪神社とその周辺でイチイガシを探集した。イチイガシの他にアラカシ、コナラ、アベマキを探集することができた。

これで日程は終了し、帰路に就く。一日野外で活動すると、車内にもさすがに疲れが漂う。特に何も行わずに休んでもらい、東安城駅経由で安城市歴史博物館へ向かった。

本来ならば、この後、採集したドングリの虫殺しをし、天日干しをして殻を割り、粒のままアク抜きしたり、石皿で粉にしてアク抜きするなどの作業を実際にやってもらうとよかったです。時間的制約もありスタッフが下準備をしてしまった。そして、参加者には水さらしをする方法をお伝えし、家に持ち帰ってアク抜きをしてもらいました。ただ、13日の土器づくりの最中に、作業の終わった子どもたちから順に石皿、敲石の体験をした。

### ○土器づくり編

スケジュールは、11月13日に縄文土器・弥生土器を製作してもらい、26日に土器を焼成し、27日に取り上げた後その土器を使って実際に煮炊きをして食べてみるという行程で行った。

土器づくりは、最初に縄文土器と弥生土器の違いについて話をした。そして両

者の違いを生業の変化との対比の中で説明し、土器の機能分化が器種の変化・増加として現れていることを理解してもらうよう努めた。しかし、整形方法自体はどちらも粘土をひも状にして輪積みで作られていること、ろくろを使わないことなど、基本的な部分では共通していることも説明した。

実際に製作に取りかかる前にどのようにやるのが実演し、粘土ひもを積み上げていく際の注意点を理解してもらった後製作に取りかかってもらった。粘土はあらかじめ主催者側すぐに製作にかかる状態にまでにしたものを準備しておいた。安城は今でも三州瓦の原料となる粘土が豊富に存在しており、手に入れるのは比較的容易である。本来ならこうした粘土が露出して砂と混ざった状態で存在する場所から採集してくるのが一番なのだが、なかなか講座参加者が使用するだけの量を自由に確保できないので、割り切って川砂と混ぜて作ってしまう。また、縄文土器と弥生土器の模造品をいくつか用意しておき、参加者にイメージしやすいようにした。しかし、どんなワークショップでも同じことであると思うが、全く、あるいはほとんど経験のないことをいきなりやってそんなにうまくいくはずがなく、これまで博物館講座として実施してきた土器づくりと同じく穴があく、亀裂が広がる、つぶれる、形が全然違うものになるという予想通りの展開が待っていた。そしていつものごとく手助けし、その後またトラブルに見舞われてまた手を入れてという課程を繰り返し、できあがったものは参加者のものなのか講師のものなのかわからないという結果がいつ

ものように訪れる。土器づくり講座をやるたびに、口頭による説明・アドバイスだけにとどめて、外観上どんなにひどい作品になろうともいっさい手を出さずに参加者だけの力で作った方がいいのかなと思うのだが、いつも考えるだけに終わってしまい、毎回手を入れてしまう。

2週間の陰干しの後、26日に土器を焼成した。午前中に天日乾燥させておき、午後から広場に持つていて縄文土器は野焼きで、弥生土器は覆い焼きで焼成した。野焼きは予定通り焼けたのであるが、覆い焼きの方はうまく火が燃え広がらずに消えそうになってしまい、長谷川氏・佐藤氏の驚異的ながんばりによって何とか火はついたが、やはりうまく火が回らずに失敗してしまったため、翌朝もう一度焼き直しする事となった。今度はうまく火がつき、かろうじてスケジュールに間に合わせることができた。

### ○土器を使って、食べてみる

26日、土器を焼き始めた後、シイの実、クリの実などアク抜きを必要としないものを敲石で割って殻をむいたり、アク抜きをしたドングリの粉からデンプンをこし出す作業をしておいた。

土器が焼けたら今度はその土器を使って縄文時代の料理と弥生時代の料理を作ってみる。この部分は台付甕の第一人者である豊田市役所の森泰通氏が担当した。森氏から台付甕の持つ意義を縄文土器の深鉢との機能の違いを交えながらわかりやすく説明をしてもらった後、調理を開始。縄文料理は深鉢を使って食材を煮て調理し、弥生料理は煮る以外に台付甕を使ってご飯を炊いたり、瓶を使って



準備した土



概要を説明する



焼き方を説明する

## 焼く・煮る・炊くは食の基本！

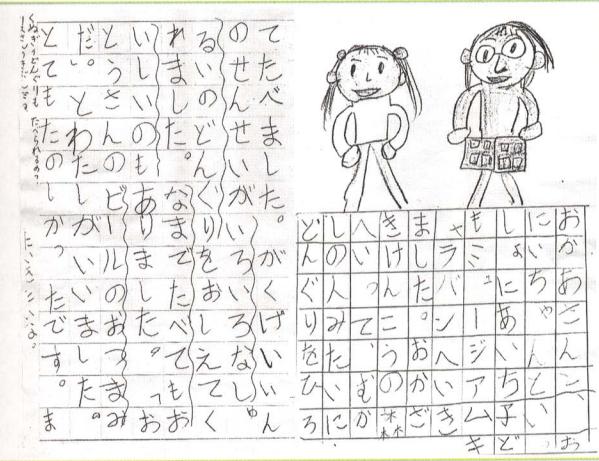
蒸したりして調理を行った。使用した土器は、スタッフが用意したものである。当初、参加者の作った土器を使うつもりであったが、実際はもったいなくて使えなかつた。また、深鉢の中ではドングリ団子（すいとん状にする）を入れた縄文汁ができるが、つなぎに使つた卵が少なかったため、縄文粥となってしまった。しかし、粥の方が分量も多く感じ、願ったり叶つたりの結果となつた。これまでの講座でやつてきたのは焼く方法だけだったので、粥の方が食事としては向いていたと感じた。ただ、パン状炭化物の分析結果と全く同じ材料を使うことは実際には不可能であり、「マガモを用意すれば良かった。」、「アミタケなどキノコを乾燥させておけば良かった。」など、スーパーの買い物に慣れきってしまった現代

人の浅はかさを恥じる結果となつた。次回やるときは、食料の保存、加工から始めようと思う。

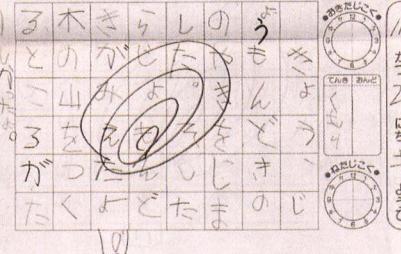
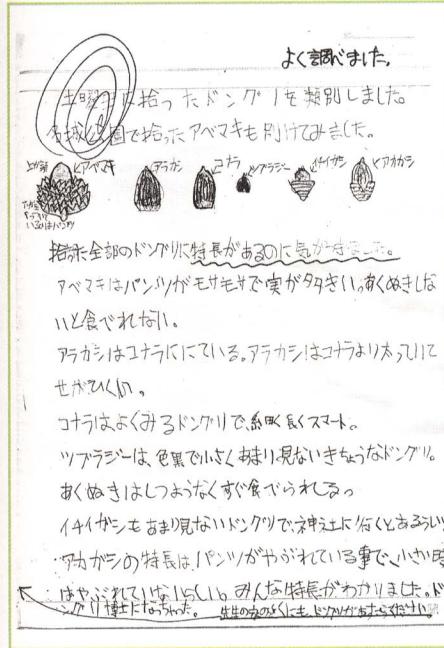
土器が焼けたら今度はその土器を使って縄文時代の料理と弥生時代の料理を作つてみる。この部分は台付甕の第一人者である豊田市役所の森泰通氏が担当した。森氏から台付甕の持つ意義を縄文土器の深鉢との機能の違いを交えながらわかりやすく説明をしてもらつた後、調理を開始。縄文料理は深鉢を使って食材を煮て調理し、弥生料理は煮る以外に台付甕を使ってご飯を炊いたり、甕を使って蒸したりして調理を行つた。できた料理を参加者と共に味わつたのだが、味の方はどうだったのだろうか？

## 参加者の感想

- ・どんぐりが食べられるなんて知らなかつた（多数）
- ・どんぐりにたくさん種類があることを知つた（多数）
- ・どんぐりは苦くてあまりおいしくなかつたが、シイの実はおいしかつた（多数）
- ・土器の作り方を知れておもしろかつた（多数）
- ・赤いご飯が一番おいしかつた。家に持つて帰つたご飯はくんせいのようにおいがした（小5女子）
- ・どんぐりの種類が多くて感心した。土器を作る時はむずかしかつたけどおもしろかつた。赤米は一生食べられないようなお米なので、おいしかつたけど少しかたかった。家にクッキーを持って帰つてお父さんお母さんに食べさせてあげたら、今のクッキーの方がおいしいといった（小5女子）
- ・どんぐりクッキーは今のクッキーみたいに甘くておいしいと思ったら、粉っぽくて味がしなかつた。ゼリーも水っぽくておいしくなかつた。土器で米をたいたらスナック菓子みたひだつた。昔の人はよくこんな毎日食べていたなと思った（男子）
- ・どんぐりのことをたくさんおしえてもらつて、どんぐり博士になつた気分（女子）
- ・どんぐりつぶしが楽しかつた（小1男子）



参加者アンケートより





2つの方法で焼成

- ・知らないことがわかりやすく、体験しながら入ってくるのでとても楽しかった。土器を焼くは初めてのことばかりで、野焼きは感激だった。土をどけていく時のどきどきする気持ち、どんぐりの料理の味を見るワクワクした気持ち、自分が子どもに戻って体験することができた（大人）
- ・他のことを忘れて土器に集中する時間は、楽しいひとときで、少しずつ形になっていくごとに愛着が深まっていた（大人）
- ・いろいろなものが食べられて、自分で土器が作れてよかった（小6女子）
- ・オリジナルの弥生土器が作れて楽しかった（小6女子）
- ・本を読むだけでなく、生きた学習ができた。参加後も子どもたちは日記に描いたり、どんぐりを空き箱に分けたりして勉強を続けていた。また、土器は宝物で今も玄関に飾っている（大人）
- ・土器づくりは最初に選んだ形と変わってしまった、粘土をまっすぐに積むのはむずかしい。拾ったどんぐりは家で植えるつもり。どんぐり料理はすべて茶色で、味がなくておいしくなかった。どんぐりをそのまま食べたら甘かったのに、料理したら味がなくなったので不思議だった（小4男子）
- ・どんぐりを昔の人が食べているなんて初めて知った。どんぐりについていい

### 勉強になった（小1女子）

- ・遠方からは参加しにくい。しかし短時間では得られない満足度や、充実感があった。どんぐりのアク抜きは1~2週間も流水にさらすとは大変で、下準備には頭が下がる。デンプンゼリーやクッキーなど、自分一人ではできないよい体験ができた。野焼きも初めてで、急に燃やすと割れるので徐々に火に近づけて焼くことなど、くわしいことがよくわかった（大人）
- ・バスの中の話ではよくわからなかったが、実際にどんぐりを拾ってみると、楽しくてどんどん名前を覚えた（小5女子）
- ・山歩きでは普段できない自然とふれあうことができた。もう少し距離が近いと気軽に参加できると思う（大人）
- ・土器の作り方と使い方については、教科書のちっぽけな白黒写真から、鮮明に創意と工夫に満ちたものに、ダイナミックな進歩の過程をかいまたないように変化した。なぜ縄文土器の底がとがっていたのか目からうろこが取れるように感動した。翌日翌々日に出たウンチは動物園のゾウやサイのみたいで楽しかった。また、壁の向こうの存在だった芸能の仕事が楽しいから勉強が続けられるもので、自分たちの生活を潤してくれるものに変化した（大人）
- ・もっと早くから企画を知っていたら、ほかのキャラバンにも参加したかった（大人）
- ・機会があれば、または非参加したい（大人多数）
- ・4日間すべてに参加するのは難しい、4日は多すぎる（多数）
- ・ゼリーなどを作っている時、やることがなかったり、同じ人ばかりがやっていてつまらなかった（小6女子）

◆◆◆本来、赤米を使用すべきではなかたが、手元に玄米が残っていたこともあり、米の1種類として事情を説明して使ったつもりであるが、そのインパクトによって、説明が参加者の脳裏から消えてしまったようである。

### まとめ

#### ○自然編

1日を通して食べるモノを採集する、という楽しみは満喫してもらえたように思う。また、どうしても羅列的になってしまって個々の種類に関する情報は伝えきれなかったと思うが、少なくとも、ドングリといつてもたくさんの種類があるということ、それを近くの山を歩くだけで結構拾ってみることができること、という2点はわかっていただけたのではないかと思う。

ただし、これで満足しないで、それぞれのドングリについてもう一步すすんだ理解をしてもらうためには、もう少し準備や、工夫があるとよかったです。例えば、持ち寄ったたくさんの標本類は、ドングリとその木の葉っぱの標本などをセットにして、参加者が手にとって見やすいように、あるいは、ブナ科の様々な植物のグループがわかりやすいように体系立てて整理してあれば、往路のバスの車中や昼食時の解説などでもっと活用できたはずだ。一目でたくさんの種類のいろいろなドングリが見られるように並んで箱に入っているだけで、まったく効果が違っただろうと思う。ただしもちろん、今回のキャラバンの形式のように、離ればなれの博物館のスタッフが事前の準備を詰めるのにはやはり困難が多い。直接集まる手間をかけずに準備できることを増やすには、



(左)石皿でつぶしたドングリのアク抜き  
(右)ドングリでのんぶんをこし出している

少し連絡を密にして各自の分担を明らかにしておくことが大切なだろうと感じた。前述のドングリ標本の準備などはできたはずだ。どうしても各地からスタッフが派出してやらなければいけない準備がやはり大変である。例えば今回なら、ドングリを拾いに行く場所の選定があげられる。安全に散策ができ、移動が可能な範囲内で、少しでも多くの種類のドングリを、集めて食べられるだけ大量に拾えるなくてはならない。またドングリの種類や量を確認するためにはどうしても直前の下見が必要である。今回は、一宮市博物館の久保、豊橋市自然史博物館の長谷川が、車で何所も巡って場所を決めている。

次に、散策時の時間配分について述べたい。野外を歩く観察会の形式は、自然史をテーマにする場合は珍しくないが、今回のキャラバンの中ではこの1日だけだったと思う。野外で一定のコースを歩く形式の観察会では、時間のコントロールが大変難しい。それは参加者の方が時間忘れて楽しんでいる結果であることも多い。今回も、歩き始めは全員集中力もあり、夢中になってドングリを拾うためちっとも先には進まない、という様子だった。逆に、観察する対象が今ひとつであったりそのためうまく関心をひきつけにくかったりするとペースが上がってしまう。また、下り坂のコースを歩くときは、周囲に注意を払って歩いてもらうことはほとんど無理だし、途中で参加者を呼び集める事も困難である。

今回も昼食以降に遅れがでたが、単純にそれが問題なわけではない。予定に縛られることなく、参加者の方の興味に合わせて時間を使えば良いと思う。ただし、その結果予定が押して急いで歩くことになったりすると、それが事故の原因になることもあるため、できるだけ避けるべきだろう。万が一はぐれても不安のないように、地図を使って全体のコースの丁寧な説明を心がけるべきであるし、最初やお昼の休憩後など、歩き始める区切りのところでかかる時間や予定を全員に一言伝えておくことは有意義だと思っている。

最後に、もう一点感想として、キャラバン初日の自己紹介はスタッフにとどまつたが、参加者の方にも自己紹介の時間と名札を用意しても良かったのではないかと思った。バスの中での話が困難であれば、昼食の時間でも良かった。参加者の中にはこういったものをいやがられる方もみえると思うが、4日間もの日程と一緒に体験するのだから、最初のアイスブレーキングは影響が大きい。スタッフから提供されるもの待つだけでなく、参加者同士が感想や知識を交換してその刺激を楽しんでもらうーおしゃべりを楽しんでもらう雰囲気を用意することで、観察会やワークショップはもっと楽しくなるはずだ。参加者の立場を連想するまでもなく、言葉を「参加者」から「スタッフ」に置き換えてそのまま同じ事が言えると思う。初めてのスタッフと一緒に観察会をすすめるのは大変だ。しかし、相手がど

んな人かを少しでもたくさん知っていれば、困難な作業もすすめやすかったり、トラブルを防ぐことができたり、そして何より、もっと楽しいことだろうと思う。

#### ○土器づくり編

とりあえずスケジュール通りには進んでいたのであるが、参加者の方々が何を得ることができたのかについては非常に心許ない。全くはじめての経験だった人にとっては1つ1つが新鮮な驚きであったと思う。おもしろかったと言ってもらえばそれでよいのかもしれないが、個人的には土器・石器づくりや織物・編み物、狩りといった作業は、当時の人々にとっては生きていく上の必要不可欠なものばかりであり、年齢・性別により当然会得しなければならない技術・技能であると思っている。そのため、自分がはじめて挑戦してみてうまくできなかった（経験がないことをいきなりやってそんなにうまくいくはずがないのであるが）から昔の人はすごかったんだという結論ではなく、今の時代とは違った厳しい環境の中で必然的に身につけられた技術であることを理解してほしいと思いつつ、毎回うまく伝えられずに終わってしまっている。また、煮炊きにしてもなかなか沸騰しないとどんどん薪を追加して消費してしまうが、当時の人々がそんな無駄な使い方をしてはいないこと、本当に炎で調理したのかということをもっと検討してみると必要があると痛感している。



土器と煮炊きの説明



焼き上がり（覆い焼き）



焼き上がり（野焼き）

## 焼く・煮る・炊くは食の基本！

**あいち子どもミュージアムキャラバン3**

## 焼く・煮る・炊く は食の基本！



Aichi Museum of Natural History and Children's Museum Research Institute

**日程**

11月11日(日)

- 9:40 ..... 新安城駅
- 10:00 ..... 安城市歴史博物館
- 11:00 ..... 岡崎市「健康の森」到着、散策
- 12:00~13:00 ..... 昼食
- 13:00~14:00 ..... 散策の続き
- 14:00 ..... 「健康の森」出発
- 14:30 ..... 白髪神社到着、散策
- 16:00 ..... 出発
- 16:30 ..... 東岡崎駅
- 17:00 ..... 安城市歴史博物館

11月12日(日)

- 10:00~10:30 ..... 説明
- 10:30~12:00 ..... 土器づくり
- 12:00~13:00 ..... 昼食
- 13:00~14:00 ..... 土器づくり
- 14:00~16:00 ..... ドングリのアク抜き、準備

11月25日(土)

- 13:00~16:00 ..... 土器を焼く

11月26日(日)

- 10:00~10:30 ..... 説明
- 10:30~14:00 ..... 食べる準備、食べる!!

レジュメ表紙  
レジュメの作成はパソコンを使って手作りで行った

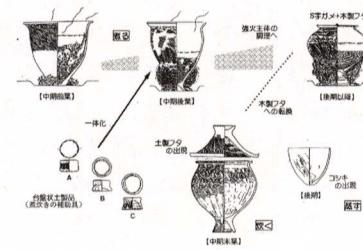
## 3. 調理する～煮炊きの道具の歴史～

年表

## 1.縄文土器の誕生

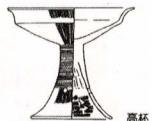
【中期】一宮市見塚遺跡  
コメ作りの開始

## 2.弥生時代における煮炊きの変化-煮る・焼く・蒸す-



## 3.弥生人は何を食べていたか-魏志倭人伝の語るもの-

- 「倭水人好沈没捕魚蛤」
- 「倭地温暖冬夏食生菜」
- 「食飲用蕷豆手食」
- 「蘆橘椒薑荷不知以為滋味有」



森泰通氏レジュメ  
調理する～煮炊きの道具の歴史～

## 2. 土器を焼く

## 土器の焼き方

## その1)野焼き…縄文時代以来の焼成方法

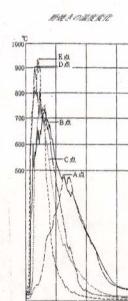
\*薪をしいた土に土器を密着して置き、さらに薪で覆って点火する。

\*短時間の焼成で、音頭は部分的に900度をこえる時もあるが、カベがないために熱を閉じこめることができず、不安定な焼き方。

\*急激に温度があがるために、砂が多く入っている粘土でないと破裂してしまう。



①薪は出なくなり、灰に変わる  
②焼成終了 上部や内側にはいが堆積している



## その2)窯焼き…弥生時代以降の焼成方法

\*薪やワラをしいた土に土器を密着して置き、ワラで覆った後さらに泥や灰をかぶせて点火する。

\*泥や灰がカベへの役目をするため、熱が逃げにくく、長時間にわたって高温(600~700度)が持続する。

\*野焼きと窯焼きとの中間に位置する焼き方。

\*野焼きに比べて温度の上昇はゆるやかであるため、やや砂の少ない粘度でも割れずに焼くことができる。



11

12

岡安雅彦氏レジュメ  
土器を焼く～野焼きの方法と温度変化

(左上)カラムシの採集／(右上)織る  
(左下)藤橋村自然舎で学ぶ／(右下)弥生の布と縄文の布



# 編む・織る！縄文・弥生の布！

主体館●一宮市博物館  
報 告●岡崎市美術博物館 天野幸枝

開催日●2000年10月22日(日)  
2001年1月27日(土)・28日(日)  
会場●藤橋村歴史民俗資料館、一宮市博物館  
参加者数●11組 24名の親子

## 目的

綿が広く繊維の中心になる以前に、麻などとともに主な繊維の一つであったカラムシを採集し、オコキをして繊維を取り出し糸にして、弥生時代の方法で織ってみる。また、縄文時代の方法も体験し、弥生時代に平織りの技術が急速に普及した理由について考えてみるワークショップ。

## 概要

### 日程

○前編 2000年10月22日(日)

1. 場所／藤橋村自然舎

2. 参加者／11組24名の親子

3. 時間／

8:30 岐阜駅集合・バス出発

10:00～16:30 藤橋村歴史民俗資料館

18:00 岐阜駅バス着・解散

車内にて参加者自己紹介及びレジュメにて布をつくる技術・歴史・材料などを説明する。

弥生機で布を織るときの、よこ糸とするカラムシの糸を作製するため、周辺地にて自生の《カラムシを採集》する。諸注意・説明を受け、親子でカラムシの表皮を採集する。繊維を取り出すため《オコキの作業》を行う。次に取り出した《繊維を糸にする作業》を行う。繊維をつなぎ合わせて、ツモにて撚りをかける。採集したカラムシで糸まで仕上げることができなかつた残りを、各家庭で作業ができるように道具を貸し出す。最後に自然舎を見学する。

○後編 2001年1月27日(土)・28日(日)

1. 場所／一宮市博物館

2. 参加者／27日8組20名、

28日8組21名

3. 時間／両日とも 10:00～16:00

はじめに、植物繊維を利用した布作製の伝承地やその文化的背景などを説明する。手織の仕事着や編布で製作したソデナシの着物など、講師の脇田氏らが採集した資料に実際に触れてみる。その後、弥生機にて布を織る準備を行う。自ら作製したカラムシの糸を使用し《弥生の布を織る》と同時に、《縄文の布(編布)》を編

む》作業をする。また、弥生機ではカラムシの他に裂いた布を織り込むなど各自でアレンジをして布に仕上げる。

## 4. 参加スタッフ

講師／脇田雅彦・脇田節子(藤橋村歴民)

久保禎子(一宮市博物館)

スタッフ／平岩里張(安城市歴史博物館)

天野幸枝(岡崎市美術博物館)

下出至子(一宮市博物館)

## 内容

### 準備

#### 1. 植物繊維の選定

植物繊維の出土例としてクワ科のアサガホが挙げられるが、イラクサ科のカラムシやアカソを同定している研究者、否定している研究者がいる。確実な出土例にこだわりすぎては講座が成り立たない。アサガホを採集することは無理である。出土例がないことが、使われていなかったことを示すわけではない。今回は栽培種ではない野生植物であり、現在、河川や堤防などでも見ることのできる身近な植物カラムシを使用する。ただし、河川や堤防で見られるカラムシは栽培種であるため、自生しているカラムシが採集でき、その植物繊維を使用した伝承のある地域、藤橋村へ行くことにした。

#### 2. カラムシ採集の道具

- ・長靴(マムシ等の危険があるため)
- ・ゴム手袋(カラムシの汁が付着しないため)
- ・ビニール袋(採集したカラムシ表皮を入れ、乾燥を防ぐため)
- ・大きなゴミ袋(オコキの際の汚れ防止)
- ・ボール(水を入れ、カラムシ表皮を入れる)

#### 3. カラムシから糸をつくるための道具

- ・オヒキガネ(カラムシの表皮から繊維質のじん皮を取り出すオコキをする道具。民俗資料のオヒキガネは使い古した庖丁などを利用している。これは刃があると切れ味が良すぎ、かえって糸となる繊維を傷めてしまうことになるからである。今回は鉄板にて作成。)
- ・ツモ(取り出した繊維に撚りをかける道具。弥生時代の出土例として鬼虎川遺跡のもがあり、同じような形態の道具

を作製。ツモは両端の尖った白木の箸を紡茎にして紙粘土で紡錘をつくり、抜けないように接着剤で固定。撚りをかけやすいようにツモの先に糸が引っかかるかぎ爪となる分をナイフなどで削っておく。)

- ・ボール(繊維を湿らせるため水を入れる容器。)

#### 4. 弥生機の道具

主に竹内晶子 1989『弥生の布を織る』東京大学出版会を参考にする。一宮市博物館にて子ども向けに実施している弥生機のワークショップで使用している道具をベースに、脇田節子氏の指導により道具を準備。

- ・経巻具、布巻具の丸棒3本(長さ40cm、径約1.5cm)で、両端から約3cm内側に紐かけ部分を彫ったもの。
- ・開口具締続棒(長さ約35cm、径約7mm)
- ・開口具中筒用三角筒(長さ40cm一辺5cmの三角筒を厚紙にて作製)
- ・締続糸用に細めの糸
- ・緯越具用の糸巻き(H型)
- ・緯打具(長さ45cm、幅6.5cm)
- ・腰あてとする幅広の綿紐
- ・ビニール紐等の別紐(機を固定する、アヤにとおす)
- ・ワラ数本(布幅に合わせ長さ20cm程度で太めのもの)
- ・ハサミ
- ・接着テープ(幅広で粘着性の強い布製もの)
- ・整経台(整経机)
- ・弥生機を固定するための棒(机を裏返して角材を渡し固定、机は動かないよう重りをのせておく。)
- ・経糸用糸
- ・緯糸(カラムシの糸、裂いた布、毛糸等)
- ・ボール(カラムシを湿らす水入れ容器)

#### 5. 編布作製の道具

- ・編み台
- ・コモヅチ(経糸の本数×2個)
- ・経糸
- ・緯糸(カラムシの繊維によりをかける)
- ・ボール(カラムシを湿らす水入れ容器)

**募集方法**

往復はがきによる事前受付

**経過**

作業はすべて親子で行う。作品を作るのではなく、その過程が重要であるため布を作るための材料採集や機織りの準備もすべて参加者が行った。うそを伝えないように心がけた。スタッフも機織りの手順を知るために事前に指導を受けた。

**キャラバン当日****○前編（藤橋村編）**

布の材料となるカラムシの纖維を採集する。本来、カラムシの採取時期としては6～8月であるが、2番手のカラムシ採集時期として10月頃（霜が降りる前）が最終となる。この企画のため藤橋村の自然舎周辺に自生しているカラムシを残しておき、参加者に採集してもらった。

《カラムシの採集》上部の葉をしごき、根本より50cm程上のあたりから茎を折り、表皮（纖維）を傷めないように剥ぐ。成長しすぎて大きなカラムシは、節があり、オコキの際にひっかかり、長い纖維を取り出しそう。

参加者は慣れるにしたがいコツを覚え、次々と採集していった。この時、子どもにとって大きなゴム手袋は手から抜けてしまうので、採集したカラムシの表皮を紐として手首の辺りで縛るのに利用した。こうした何気ない植物の利用の仕方は、一事物一用途ではない物の利用の仕方を実感させたと思う。

採集したカラムシの表皮を乾燥させないようにビニール袋に入れていく。また、纖維を傷めるため絡まないように注意する。《オコキの作業》採集した表皮を水につける。一本一本オコキをしやすいように、親が取り出していく。それを子どもが、手前にモト（根元）がくるように板にのせて、モトからサキ（先端）へ表皮の表面をオヒキガネで剥ぎ、じん皮（纖維）を取り出す。やりすぎると、纖維を傷め短くなってしまう。これは後の纖維を績む作業に関わってくる。採集した表皮をひたすらこく根気のいる作業が続く。親子で役割を交替しながら各自作業進める。

《纖維を糸にする作業》取り出したじん皮（纖維）は少し湿っている程度の状態で次の作業を行う。纖維をつなぎ合わせ長くするうむ作業はサキ（細い方）にモト（太い方）をつぎ、糸の太さが一定になるよう績んでいく。今回はきれいに糸にするのが目的ではないため、少々のデコボコは気にしないで績む。つなぎ合わせる方法としては、撫り合わせ法で行った。しかし、少々難しいため結び合わせ法でもよい。またこの時、纖維が短いうむ作業が多くなり大変である。次に、纖維にりをかけて糸にする。ツモの紡茎に纖維を縛る。

纖維の長い部分を自分の背中越しに垂らし、ツモ先端から30cm辺りの纖維を左手親指と人差し指で押さえ、右手でツモに回転（右回転・左回転統一して）をかけて纖維をよる。1回で不足なら、2回3回と回転させよりをかける。ただし、よりが強すぎるとねじれすぎて良くない。よりがかかったら、回転方向と同じ方向に紡茎の紡錘近くから巻いていく。この時、よりのかかった部分を少し残して、新たな纖維の部分を先ほどと同様によりをかけていく。糸はよりをかけ、そのまま乾燥させるとよりが固定する。この一連の作業は藤橋村ではやりきれなかったため、道具を貸し出し、各自で後編（一宮市博物館編）までに糸に仕上げる宿題となった。オプションとして、オコキをしたクズ=オグソにも纖維が含まれている。じん皮外の部分を水につけて腐らし、洗い、叩きながら纖維を取り出す。叩くことで纖維が毛羽立ち、これをよって糸にするとモサモサした糸になり布にすると、空気を多く含むため多少暖かい布になる。このオグソから纖維を取り出す作業は説明のみで参加者の自由意志で糸の作製をした（しかし、大半の参加者が糸に仕上げてきた）。

（右上）オコキ（表皮をこき出す）  
（左）纖維を績む  
（右下）ツモで撫りをかける



## ○後編（一宮市編）

時代的には現代から過去へ遡っていく形式で織りの技術や植物纖維利用の布の説明を行う。ワークショップ会場である一宮市博物館の一室に脇田氏の採集した労働着やウチオリ布など見て、触って、体感できる民俗資料展示スペースを設けた。資料をとおし既製品の服とは異なる風合いや、裂き織り布など木綿が貴重品として大切にされていたことがより実感できると思う。

《弥生の布を織る》経糸の準備で糸玉を作る。かつてはよく見られた風景であると思うが、子どもがかせ糸を手に親が糸玉を作っていく。次に整経台を使用して、糸の流れをそろえるように注意しながらたて糸を準備する。ポイントごとに講師によるチェックをしてもらう。特に糸縫続を作るところは大切。「人の道と糸の道は間違ってはいけない。」と言われているくらい重要である。ここまでできれば、後はどんどん織っていく。縫続が上手く開けないからといって、上下以外にあまり動かさない方がよい。今回、自ら作製したカラムシの糸を横糸に使用して織り込んだり、太めの毛糸や裂いた布など使用し、参加者が思い思いの布を織った。あらかじめ、ポシェットやコースターなどできあがりを想像して、その大きさ、ふさの部分など考えながら織ると良い。端の始末はミシン掛けをして、ほころばないようにする。子どもだけでは準備段階で難しい所があるため、親が補助をする。織りの作業にはいると単調であるが、織り上がっていく成果が目の前に見えるため楽しい

作業である。子どもだけでなく、親もやりたくなり交替しながら行っているようだった。機織りの準備だけで半日と少しかかり、各所でチェックを受けるので、各人の進み具合に差ができる。その間、編布の準備を行う。作業は後編1日に引き続き、2日目も各自のペースで行った。また参加者の都合により2日目しか参加できない等のケースもあり、スタッフが随時対応した。

《縄文の布を織る》弥生の布を織る準備で参加者の進み具合等に差ができるので、チェックの待ち時間などに編布の準備を随時行う。今回は、小銭入れを作ることを目安に準備を行う。縫糸として、カラムシの纖維に手でよりをかけたものを使用。別によりをかけなくてもよいのだが扱い易さを考慮した。また、ワラをなうようにカラムシに撚りをかけていくのだが、こうした作業も現在では日常で行われることがないため、参加者にとっては新鮮なのではないだろうか。そして、纖維に撚りをかける人、布を編む人と役割を分担しながら作業をすることで、暇をもてあましがなくなった。また、参加者は弥生機と比較して編布に要した時間とその成

果から、技術と労力の関係などを体感した。

最後に自らの作品と記念撮影をして締めくくりとした。

## 参加者の感想

・藤橋村に行って、カラムシを取る面白い取り方で、とても楽しくカラムシの皮を取りました。その後、纖維質を取り出しました。ぼうすい車という、道具を使って糸によりを掛けました。 ぼうすい車を使って糸によりを掛けるのがとても難しくて、嫌になってしまいましたが、がんばってやりました！私は、弥生機を織るとき、最初はとても難しくて苦戦していましたけど、なれるととても楽しかったです。

その後、アンギンをやりました。アンギンも、覚えるのに苦労しました。覚えると簡単で楽しかったです。

またやりたいです。

・10月22日、1月27・28日の日程でカラムシを採取して糸をつくり弥生の布を織り、縄文の布を編みました。作品は完成しましたが、もう一度作れるかと聞かれると出来ないと思います。一回だけの企



親子で糸玉づくり



(左) 経糸を整経する  
(右) 縫続をとる

## 編む・織る！縄文・弥生の布！

画ではなく何回も手が覚えるまでやれる機会があることを望みます。

今回参加して、親はどこまで手を差しのべるべきか学芸員の人達もどこまでやるべきか、子供達も何処までなら理解出来るのか。

子供達の為になるには どうしたらいいか？考えさせられました。

そして、今の教育は自分で考えることを唱えていますが、現実には、考える力は乏しいと思います。頭の中だけでなく身体で覚えてこそ、そこから考えることが出来るのでは…。また、そういう企画がすべての子供達にいきわたってない事、子供がやりたくても親が参加したいと思わなければ参加できない事など問題点はあります。国・学校・地域・家庭が一体となって子供達を色々な事に体験させてあげればいいなと思いました。

## 反省

今回のように何日間かに渡り開催される企画は、原則として全日程参加が条件であるが、親の仕事の都合や学校行事と重なる等どうしてもすべての参加は難しいというのが現状である。その場合、途中から加わる参加者にどうフォローアップをするかが問題となるが、果たしてそれができていたか不安である。

それから、兄弟での参加も多く、1家族に道具1セットのため取り合いになる場

面があった。しかし、教える側の混乱を避けるためにこの原則は仕方のない事であったと思う。

また、愛知県博物館協会が母体となった今回の企画は、単館で行うのと異なりスタッフ間の連絡調整が大変であった。スタッフ所属館それぞれの事情もあり、キャラバンの企画に参加したくてできないケースもあった。通常の館業務を抱

えてのこのような企画はやはり、主体館の職員にかなりの負荷がかかってしまった。その一方で、キャラバンに参加できた他館のスタッフにとっては学ぶ事の多い有意義な企画であった。ただし当初の予定では、スタッフとして参加するために、事前の打ち合わせ等の時間を設けるはずであったが、諸事情があるにせよ、それが十分に行えなかったことは残念である。



(上下とも) 編布を編む

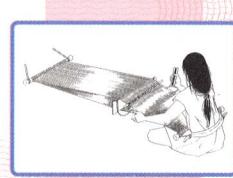


## &lt;縄文・弥生の布&gt;に参加しての感想

大和・朝子  
藤枝市にカクシキンを覗きに行つた時、「さでも多くカラシをとりたいと思いました。けれども、あまりしゃべらなかつたので懲念でした。せんべいするや束の間、刃物がいるよりない物の方がやりやすかったのです」とおっしゃっていました。また、せんべいをとった後一度は寝ちらして寝とおさすのは間で何にかかのうなどと思いました。床の間せとものうわわせたり、織る時に糸を入れるところの自分のしまったカラシも、シロい柔らかい布ができます。

宮城龍舎でやった弥生生徒は、最初すぐにこんながらがて「ひずかしくできないかな？」と思いましたがこまかくくると結構構造もしかめたであります。しかし、編み機がすごく簡単にたどるよもじました。けれども、編み機はたくさん並んで織機を作れすごい良かったなと思いました。織文・弥生のことを教えてもらってはしゃがったです。ありがとうございました。

大和・朝子  
家族と一緒に参加させていただき、とてもよい思い出ができました。藤枝市で行って何度もするのかと、興味本位に軽い気持ちで参加したのですが、思っていたより作業がたくさんあって家族みんなでなくらいカラシを買いました。そこで、自分たちのやる気を出せば、もっとやる気が出るなど、自分たちのやる気を出せば、他のやる気も出るんだよ、とおもいましたが、なかなか時間がとられませんでした。藤枝市でせんべいが取れること、それを糸や織にしても布が作れることを教えていただき、また体験させてもらって身体で感じることをできました。暮子は、今まで肌を触ったことがありませんでした。今から家庭教師が教えるのですが、がんばりながら、自分でやることで、やる気を出せば、必ずやる気が出るのです。うれしかったです。わたしも藤枝先生のお話を、あの先生の言ふとおりにやりました。織文人や农业生产者の技術の高さにおはづくくなりました。自分の身の回りのものにまつわって見方を変えるようになります。企画・運営をしてくださった学芸員の皆様、ほんとうにありがとうございました。

編む・織る！  
縄文・弥生の布！

愛知県博物館協会ごともども博物館の会

## アンギンを編む

編布の檻台はふたまたになった木を2つにわって脚として、板(ケタ)に目盛をきざんでコモヅチに糸をまきつけたものをとりつけます。目盛の幅は約8~9ミリ。コモヅチには、ウツギ(タニウツギ)の芯をぬいで作ったものが最も多い。

アンギンの作り方(海賊第一代海賊)



コモヅチの作り方(檻)



1-3巻と5巻(中山道) 5-7巻(山道)  
裏表 8-9巻(山道)



「縄文・弥生」(1.マフア・2.ナシナ・3.マエカワ)

・伊丹市に残された檻台

(木山行) 文政11年(1828年)

## 布を織り始める

弥生時代になると、機織りの技術はしだいに日本列島に広まっていきました。しかし、縄文時代以来の機織りの技術もいろいろな形で生活の中に残りました。どんなものがあるのか暮らしの中で探してみましょう。

弥生時代の機織りの道具は他の資料の出土量にくらべて少ないのですが、布ややさ、腰帯などが発見されています。また、糸作りをする紡錘車も完全な形で見つかったものがあります。当時の機織りの道具はどんなものだったのかな?

参加者アンケート

レジュメから



# キャラバン総集編

～火焰土器とアンギンを見に行こう！～

約半年間にわたって5つのキャラバンを実施してくる中で、「もう少し参加者と話がしたい」という思いから急遽企画したキャラバン。なるべく多くのキャラバンに共通するテーマでと考え、なんとか1、3、4、5に共通するものということで落ち着くことができた。ただし、最初に企画したキャラバンからの参加者がなく、興味を持続することの難しさや、「一期一会」とならないためにはどうしたらよいかという、これからの大好きな課題を得ることになった。

このキャラバンは、縄文土器の中でも装飾性の優れた火焰土器（国宝ほか）と、縄文時代の布の末裔である要有形民俗文化財に指定されているアンギンを所蔵する十日町市博物館と、最近開館したばかりで、縄文時代の人々の暮らしの様子をジオラマで復原している新潟県立博物館を見学した。以下がそのスケジュールであるが、「本物を見せたい！」という思い込みのせいで「無理」が生じていることは否めない。

◆2月24日(土)

- 8:30 名古屋駅出発  
12:00 昼食  
15:00 十日町市博物館、収蔵資料の見学  
(十日町市博物館学芸員竹内俊道氏のレクチャー)  
18:00 宿(長岡市内)到着  
18:30~19:10 食事  
19:10~20:30 キャラバン紹介、交流会

◆2月25日(日)

- 8:00 朝食  
9:00 宿出発  
9:30 新潟県立歴史博物館見学  
(新潟県立歴史博物館学芸員渡邊裕之氏のレクチャー)  
11:30 出発  
12:00 昼食  
18:00 名古屋駅着、解散

この無理を通した企画を考える中で、6時間という長い道中をいかに有意義に過ごすかという新たなテーマも生まれ、参加するスタッフにミニワークショップを持ち寄ってもらうことにした。それぞれ30分程度で行ったが、スタッフが酔つてしまったり、雪で真っ白と化した長野・新潟の風景やバスの運転手さんの独り言にスタッフがそわそわするなど、単調ではなかった。

ただ、まずは積もった雪を見て感動し、さらさらの雪を触って感動し、十日町市博物館で本物の火焰土器とアンギンを見て感動。そのときの参加者の目は輝いていて、ここまできて良かったと思った。また、年度末の忙しい最中、両博物館の学芸員の方にはレクチャーをしていただくことができ、非常に有意義だった。

開催日●2001年2月24日(土)・25日(日)  
会場●十日町市博物館、新潟県立歴史博物館  
参加者数●小中学生9名、保護者5名  
当日スタッフ●9名

## 総集編はじまり、はじまり！

私は、バス中プログラムの前座として、過去のキャラバンを思い出してもらうこと、さらに若干の参加者の意識調査と、リラックスを目的に、全員で自己紹介大会をした。キャラバンの中で一番思い出に残っていること、キャラバンに参加したこと学校で話したか、学校の授業で一番好きな科目、5年生以上には社会見学で出かけたところ（美術館など）今までに行なったことのある美術館（博物館、科学館など）などについて、しゃべってもらつたが、結果的には、ねらいどおりの答えが得られなかった。

実は、同じ内容のアンケートを「どろんこやきもの探検隊」でも自己紹介形式でおこなった。参加者の興味がどちらかと言えば、造形に集まり、反面、歴史への興味が薄かったことなどがわかった。また、半数近くの参加者が、学校で先生・友人に話した、さらに5年生の女の子1人は、地元の産業を調べるテーマが「瀬戸のやきもの」であったため、特に熱心に大窯の構造などを調べ、学校での発表にもキャラバンで得たことを充分にいかした、ことがわかり、参加者の意識の高いことが確認できた。

反省点；もっと答え易い設問にすべきであった。また、夜に宿でおこなったスライド上映とあわせておこなったほうが効果があったかもしれない。（愛知県陶磁資料館 佐藤一信）

## 縄文原体をつくろう！

総集編では火炎土器の本場である新潟県を訪れるため、縄文土器に親しんでもらおうとワーク・ショップとして縄文原体を作ることにした。まず、レジュメを見ながら縄文土器には縄文だけではなく沈線文・隆蒂文・爪形文などの様々な文様があることを理解してもらい、施工方法などを簡単に説明した。その後に縄文原体づくりに取りかかる。本来はカラムシなどの材料を用いるべきであるが、バスで移動中に製作するため、やむおえずティッシュペーパーを材料に作ることにした。ワークは燃り方の手本を見せて説明しながら縄文原体をつくっていく方法をとった。1段の燃りは子供たち全員ができるが、2段目を燃るときに失敗する子供たちが大半であった点は、反省材料となつた。

ワーク後に火炎土器の話に移り、王冠形と鶏冠形の2種類がある点や周辺地域にも似た土器がある点、太平洋側では形の違う簡素な土器が使われていた点を説明した。そして、縄文土器は多種多様なものがあることを理解してもらえるように努力した。（豊橋市美術博物館 岩瀬彰利）



## 土器の焼き方から考えよう！

子供たちに縄文土器と弥生土器の焼き方の違いについて知つてもらうため、それぞれの土器の写真を見せ、土器の表面についている黒斑の形の違いについて考えてもらった。黒斑は、土器を焼くときに生じる斑点状の焼きムラで、その形・大きさが焼き方を考える上で重要な要素となっている。子供たちが縄文土器と弥生土器とで黒斑の付き方がどのように違うのかを自分なりに考えて理解してもらえばと思ったのである。土器を焼くという話をはじめて聞く子がほとんどであり、黒斑の違いに気づいてくれれば十分で、そこから考えられる焼き方の復元については、こちらで用意した写真を見てもらい説明をした。

物事を考える上で、いろいろな視点や角度から見てみることの必要性を、土器の黒斑という現象を通して理解してもらいたかったのであるが、準備不足・自分自



身の話し方の未熟さもあって、どこまで通じたかははなはだ疑問である。（安城市歴史博物館 岡安雅彦）

## 貝あわせで遊ぼう！

夕食後、徳川美術館で夏休みに子ども向け企画として実施した「作って遊ぼう 貝あわせ」のミニ教室を開催し、「貝あわせ」のゲームと合わせ貝作りで楽しみました。まずは、「貝あわせ」という平安時代から伝わる遊びについて簡単に説明し、実際に十二対の蛤の貝殻で、「貝あわせ」の遊びをしました。蛤の貝殻を地貝と出貝にわけ、地貝十二枚をテーブルに円を描くように伏せて並べます。円の中心に出貝一枚伏せて出し、その出貝にあう地貝を貝殻の形から選び、手の中で出貝と地貝をあわせ、ぴったり合つたら当たりです。多く合わせ取った人が勝ちというゲームです。参加した子どもたちは当てようと真剣に取り組んでいました。まわりの大人们も興味深く見学していました。

次に、貝あわせに使う合わせ貝を蛤の貝殻に油性のマーカで思い思いの絵を描いて作成しました。参加出来なかった子どもも翌日、車中貝あわせ作りに熱中していました。（徳川美術館 加藤啓子）



## 食べ物のはなし

食べ物は身近な話題であり、また、今回のキャラバンや施設見学をとおして参加者は縄文人や弥生人の食事について知識を深め、興味関心も広がっている。そこで、天正10年(1582)、織田信長が徳川家康を安土城でもてなした料理の展覧会を準備する過程で得た当時の食文化に関する情報を、縄文時代・弥生時代から現代への通過点として、また、無意識に口にしている食材や調味料について目を向けて考えてもらう（当たり前が当たり前ではな

い) 契機になることを願い目的とした。例として、以下のような簡単なクイズ(問い合わせ)を交えながら話を進めた。

室町時代に「三鳥五魚」として美味しい鳥、魚とされていた種類はなに?→鳥はツル・キジ・ガン、魚はコイ・タイ・スズキ・カレイ・フカ。今ではツルのように口にしないものもある。また現在、魚で一番といえば鯛であるが、江戸時代より前は鯉が一番であったことなどを話した。



反省:準備不足でまとまりがなく、武士のものでなし料理の内容よりも、庶民の日常食についてもっと話ができるといえば、より自らの食事と比較して考えることができたのではないかと思った。(岡崎市美術博物館 天野幸枝)

#### 焼き物の焼成

総集編はカラムシの編物と日本中で最も著名な縄文土器を見ることと各キャラバンの交流会として実施したが、愛知県

陶磁資料館主催のどろんこ焼き物探検隊では野焼きと窯焼きの2つの焼き物を体験した。どろんこ焼き物探検隊から総集編への参加者はほとんどいなかったため、VTRを見ながら陶磁資料館にて実施した大窯による焼成との比較などを交えて焼き物への親しみをもってもらうことにした。窯の焼成を実際に見てもらうことがベストであるが、その機会はひじょうに少ないとみため、どろんこ焼き物探検隊に関連して日本の陶器の源である須恵器・灰釉陶器の焼成復元をされている小原村の大石さんの須恵器焼成のVTRを新潟へ向かう長い道中のバスの中で見ていただき、どろんこ焼き物探検隊での子どもたちの体験と比較しながら焼き物の焼成についての理解を深めてもらうこととした。(豊田市郷土資料館 杉浦 裕幸)

#### ネジリカゴをつくろう!

バスの中でのミニワークショップということで、何か今までにおもしろいことができないかと思った。話だけでは子どもたちが寝てしまうのではないかという不安もあり、オオムギのムギワラを持ち込んでムギワラ細工をすることにした。自然の素材の特徴や、それを利用する側の智恵、できあがったものの良さを知ってもらいたかった。

しかし、帰りの車中での実施となったことで、何点かの問題が浮上した。まず、

出発日の前日から水につけておいたためにムギワラにカビが発生し、半分が使用できない状態になってしまった。ビニールを開けた瞬間、緑色になったムギワラに「絶句」である。6時間の長旅故に考えたミニワークショップだったが、自らの弱点である「乗り物酔い」を忘れていた。車中で立って話し始めた途端気持ち悪くなり、作業をやり始めた途端立っているのも辛くなつた。結局、皆さんに助けられ実施できた。

ということで、車中は景色を見ながらゆっくりする方が良かったのかと、反省することしきりであった。(一宮市博物館 久保禎子)



■キャラバン参加者一覧■

ca区分	大人1	大人2	子ども1	学年	子ども2	学年	子ども3	学年	住所地
どろんこ	杉浦裕幸		裕紀	小1					名古屋市緑区
どろんこ	奥野康子		真央	小2					名古屋市守山区
どろんこ	近藤深雪		英里	小5	近藤貴洋	小1			名古屋市名東区
どろんこ	竹内美砂子		一児	小3					名古屋市名東区
どろんこ			田中翔太	小1					
どろんこ	内木正司	四七子	賢吾	小5	翔大	小1			小牧市
どろんこ	今井正人	美智子	洋介	小3	美貴	小2			豊田市
どろんこ	鈴木真里		陽子	小4					愛知郡長久手町
どろんこ	長江貴子		航	中2	百合奈	小4			瀬戸市
どろんこ	牧 千恵子		成道	小2					瀬戸市
どろんこ	浅野文子		有紀子	小4	早紀子	小4			瀬戸市
どろんこ	飯野早苗		翔太	小3					瀬戸市
どろんこ	植村尚子		真	小4					愛知郡長久手町
どろんこ	三輪昭三		昭太	中2	麻生	小4			瀬戸市
パリコレ！	加古敦美		亮	小4	陣	小1			東海市
パリコレ！	家田済	由美	侑	小1					稻沢市
パリコレ！	日野弘子		智子	小4	景子	小2			一宮市
パリコレ！	越田清美		将浩	小2	敏行	4歳			稻沢市
パリコレ！	近藤光司	恵美	芽衣	小3	大蔵	小1			名古屋市
パリコレ！	渡辺記美代		奈央	小3					中島郡祖父江町
パリコレ！	伊藤康子		綾花	小3	翔太郎	小1			稻沢市
パリコレ！	川村ひろこ		もとき	小4	はるか				瀬戸市
パリコレ！	岩田登美子		悠揮	小4	峻佑	小2			葉栗郡木曽川町
漁師は海	林志保		尚希	小6	昌奈	小3			豊橋市
漁師は海	蜂須賀光明		愛理	小1					刈谷市
漁師は海	梅元泰弘		博章	小3					名古屋市中村区
漁師は海	石川敏則		綾華	小3	雅之	小1			蒲郡市
漁師は海	神谷周三	優子	奈那	小6					豊橋市
漁師は海	伊藤仁一		裕規	中3	相忠	中2			岡崎市
漁師は海	国井絹子		綜志	小4	繭子	小2	基思	5歳	豊橋市
漁師は海	丹羽由美子		駿太	小5					名古屋市守山区
漁師は海	石田登志香		薰史	小6	瑛子	小4			豊橋市
漁師は海	永田直美		耕大	小5	健人	小3			名古屋市西区
漁師は海	廣田くみ子		百英	小1					名古屋市守山区
漁師は海	佐井育美		祐里奈	中1	絵里奈	小6	茉里奈	小4	日進市
漁師は海	佐藤直二		尚子	中1	誉将	小5	智徳	小3	豊橋市
漁師は海	伊津野泰子		莉々子	小6	美波	小3			豊橋市
漁師は海	大谷宣人	順子	洋人	中2					豊橋市
漁師は海	山崎明子		進						西尾市
焼く煮る	塙田宝裕	元美	宝	小4	円	小1			名古屋市中区
焼く煮る	大和 仁	順子	慧悟	小4	昂貴	小1			名古屋市西区
焼く煮る	伊藤かずみ		亜希		早矢志健太	小6			名古屋市中川区
焼く煮る	周戸広美		紗織	小5	良樹	小3			名古屋市中川区
焼く煮る	角谷絵美子		真由	小6					安城市
焼く煮る	青山みどり		瑞季	小6					安城市
焼く煮る	松岡恵子		宏樹	小5	路子	小1			高浜市
焼く煮る			紗妃	小5	河村真妃	小5			安城市
焼く煮る	川崎みどり		川崎悠加	小6					安城市
焼く煮る			築山結奈	小6					安城市
焼く煮る	澤田 勇	弘美	澤田陽介	小6	京平	小2			半田市
焼く煮る	中村由佳		友哉	小4					名古屋市
編む織る	三澤紀雄	かおり	里奈	小5	佳奈				西加茂郡三好町
編む織る	塙田宝裕	元美	宝	小4	円	小1			名古屋市中区
編む織る	大和 仁	順子	慧悟	小4	昂貴	小1			名古屋市西区
編む織る	小野寺和志		秀和	中1					静岡県引佐郡引佐町
編む織る	竹内誠	栄子	航	小4	明日香	小1			名古屋市西区
編む織る	伊藤数美				早矢志健太	小6			名古屋市中川区
編む織る	奥村誠治		緑	中1	彩子	小5			名古屋市名東区
編む織る	植田なおみ		さとみ	小5					一宮市
編む織る	加藤美和子		日沙子	小6					一宮市
編む織る	阪のり子		由加里	中1					名古屋市中村区
総集編	大和 仁	順子	慧悟	小4	昂貴	小1			名古屋市西区
総集編	川崎みどり		悠加	小6					安城市
総集編			築山結奈	小6					安城市
総集編	小野寺和志		秀和	中1					静岡県引佐郡引佐町
総集編	加藤美和子		日沙子	小6	昌也	小5			一宮市
総集編	杉浦裕幸		裕紀	小1					名古屋市緑区

# CEMA 1

July 11, 2000  
Circle for Studying Children & Museums,  
Aichi Museums Association

7月9日 日曜日 (晴)

心配していた台風3号は既に北に去り、今日も蒸し暑い夏日となりました。「どろんこやきものたんけん隊」第1ラウンド野焼き製作編は、昨年陶磁資料館で開催された「野焼き」を、基本的には踏襲した内容です。ただ新たに組み込まれたのが、「製作用粘土を採集するところから始める」と、「作品製作の時に親と子を別プログラムにする」ことでした。

午前中のメニューは、講師である鯉江先生のお話の後、陶磁資料館裏の露頭にて粘土採集。参加者約70名、サポートスタッフ合わせると100名ほどが、遊歩道沿いに土をかき回す事となりました。予想外の短時間で大量の粘土を採集し、「大漁!」と声をあげつつ昼休憩に入りました。

午後からの「製作」に際し、講師の先生をはじめ企画側の一番のねらいは、「子どもたちの自由な造形や感覚、アイデアを最大限に引き出したい」ということでした。しかし昨年は親子一緒に製作を行ったため、保護者の持つイメージ(やきもの=器などの「機能」を持つもの)に子どもは引きずられ、花瓶や皿の製作に偏ってしまったとのことでした。今回作業室は同じながら、別のプログラムを行ったことは、大成功を収めたと言えます。最初は親の方が気になり、不安げな子どももいましたが、先生の「好きなものを作れ!

かっこいいものを作れ!」の掛け声にすぐに目の前の粘土に夢中になりました。違う粘土を混ぜたり、高く高く積み上げて50センチほどの高さの塔を作ったり…。

勿論焼成のことを考えれば、粘土の混ぜ合わせ・無理な造形は避けたほうがよいのです。けれど先生がくり返しあつやったのは「失敗も大事にしなければならない。きれいに焼きあがることだけではなく、土の感触・それぞれのアイデアや感覚を大事にしたい」ということでした。私達も子どもたちに「やきもののお皿やカップならお家にあるでしょ。お家にはないキミだけのやきものを作ろうよ!」と呼びかけました。自由に好きなものを思い描いて粘土に向かい始めた子どもたちは、みるといきいきした目になっていき、見ている私達が驚かされました。1つ作りあげると、すぐ次の製作にかかり始めるのです。結局2時間半フルに製作につぎ込み、膨大な量の作品ができあがりました。

保護者プログラムのほうも予想外の大盛況。保護者パワーというもののが凄さを思い知ったというのが担当者の弁のよう

す。子どもの事など忘れたかのように「こまきち」の型おこしに熱中するみなさん。同じ部屋の中で、子どもと保護者それぞれの「興奮状態」が充満しており、一種異様な空間を作り出していると感じたほどでした。

今回「歴史学習」の立場からの野焼きしか頭になかった私にとって、この異様なほど高いテンションの製作は、本当に新鮮でした。とともに、特に口に出して「指導」しなくとも、この盛り上がったテンションの中でなら、子どもたちはその時自分に必要なこと—製作に適した粘土の粘性や、模様のつけ方、バランスのとり方など—を、無意識のうちに自分で身についているのではないか、と感じました。

子どもたちは何かに対して「集中」している姿をよく見せてくれます。でもそれと「いきいきしている」又は「充実している」姿とは違うのですね。今回の成功のポイントとなったのは、親子別々にしたことと共にもう一点、スタッフの学生のきめ細かい子どもたちへのケアだったと思います。逆にいえば企画側が彼らスタッフの力量に甘えてしまった部分が大きかったのですが、子どもたちに「大人」という壁を作らず接してくれた彼らの姿勢は、そのまま講師の先生の方針につながるもので、これからさまざまな事業を企画していく際に、大切なことです。これは年齢・性別の問題ではなく、姿勢の問題だと思います。

まとまらぬまま最後に一言。今回は「やきもの」に対する「子ども」と「大人」のイメージの違いを実感しましたが、それなりにそのイメージを膨らませ、作品を通じてお互いが対話できるという、心の接点をつくることもできたのかな、と思いました。

まだまだ第1ラウンド、正念場は8月の野焼きです。条件としてはかなり厳しいですが、より多くの作品を焼成成功させたいと思います。

(このキャラバンは、陶磁資料館担当:佐藤(主担当)・神崎・田村が企画し、愛博協:杉浦・淺野が参加しています。)

**NOTE** 「CEMA(Children's Experience Museums of Aichi)」は、文部省「平成12年度親しむ博物館づくり事業」の委嘱事業となった「あいち子ども体験ミュージアム」に関するニュースをお届けします。お届けは、ファックスまたは郵便にて。刊行は不定期です。各館園で回覧していただきますよう、お願ひ申し上げます。

発行: 愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

愛知県陶磁資料館 (担当: 佐藤)

〒489-0965 瀬戸市南山口町234

phone:0561-84-7474 facsimile:0561-84-4932

編集: 愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

名古屋市博物館 (担当: 犬塚)

〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

phone:052-853-2655 facsimile:052-853-3636

# CEMA 2

August 31, 2000

Circle for Studying Children & Museums,  
Aichi Museums Association

## あいち子どもミュージアムキャラバン 漁師は海のおさかな博士 ミニレポート①

天野幸枝  
(岡崎市美術博物館)

8月10日 木曜日(晴)

当初の予定日である8月3日は、高波のため地曳網ができず延期となりました。そして、雨天と高波にならないことを祈りつつ待った1週間でしたが、このところの不安定な気候のため相変わらず外海は波が高く地曳網を曳くことはかなわない結果となりました。しかし、それを補うことができるほど今回のキャラバンは盛りだくさんの内容だったと思います。

参加者はおよそ46名、実施日の延期をしたため若干参加者が減りました。豊橋駅西口に集合し、受付を済ませたあといざ豊橋市の細谷海岸へと2台のバスを走らせました。駅から海岸までは約1時間。そこで、車中では今日の内容に関してレクチャーをしました。私が同乗したバスAでは豊橋市美術博物館の岩瀬さんが、大西貝塚、水神貝塚から出土した魚等の骨を参加者に見てもらいながら「動物考古学」や「愛知県の貝塚と縄文時代の漁業」について説明をし、参加者は話を聞きながらメモを取ったり、骨をスケッチしたりと忙しそうでした。もう一方のバスBでは早稲田大学非常勤講師の樋原さんが「動物考古学」についてお話しされました。

そうこうしているうちにバスが海岸に到着しました。さすがに暑い!しかし、風もあり浜に設置されたテントの陰に入れば暑さもしのぐことができました。それにしても、どうしてこんなに天気が良いのに地曳網が引けないのかと悔しさを感じましたが、海を見て納得。波が高く小さな地曳網船で海に出るのは無理な状況でした。

海岸でスタッフの自己紹介をした後、漁師さんに漁法や道具の説明をしてもらいました。一宮市博物館の久保さんが話の誘導をしながら、漁師さんに網をひろげてもらいたい地曳網漁のイメージをふくらませていきます。「地曳網でどんな魚がかかりますか?」という問い合わせに対して漁師さんが答える前に、イワシ・コノシロ・スズキなど子どもたちの方から魚の名前がいろいろ出てきます。始めはみんなどこか控えめで堅い雰囲気でしたが、このころから徐々にうちとけて子どもたちも親に促されてではなく自発的に動き出しました。網のおもり(ヤ)は常滑焼きでできていることを手にとって確認したり、投網を船に仕組む作業を実際にさせてもらい、網(ワタ)が絡まないように漁師さんの指示にしたがいながら行ってきました。また「船をどうやって海までもっていくの?」という問い合わせに対して漁



▲参加者一同、テントの下で、神奈川県立生命の星・地球博物館 藝員の瀬能宏さん(しゃがんで、魚をつかんでいる白いTシャツの人)の説明を聞く。

師さんが船を少しだけ動かしてくださいました。木を枕にして転がすのではなく滑らすのですが、こういった表現も実際に状況を見なくてはその違いがわからないことだと思います。本来ならここで、地曳網漁を体験して自ら捕った魚を分類、調理となるのですが、残念ながらそれはできませんでした。

そのかわり、早朝に三谷漁港で仕入れた魚をテントの下で広げ、持参した魚類図鑑をみながら分類しました。魚の先生は神奈川県立生命の星・地球博物館の瀬能さんです。「魚は成長するにしたがい性が分かれるモノがある。」などと説明する一つ一つに子どもも親も反応し「これはオスかメスか?」とか「せんせーい、これなーにー!」などと生の魚に躊躇することなく、魚をわしづかみしてにぎやかに魚の同定が行われていきました。用意した魚はイワシ・メバル・スズキ・アイナメ・ホウボウ・アマイソ・サッパ・イカなど多種多様で、大きさも様々。次第にどんな魚かわかったら、今度は食べたい魚を選んで石器で調理へと、そのまま移行していました。(つづく)

発行：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

愛知県陶磁資料館 (担当：佐藤)

〒489-0965 濱戸市南山町234

phone:0561-84-7474 facsimile:0561-84-4932

編集：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

名古屋市博物館 (担当：犬塚)

〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

phone:052-853-2655 facsimile:052-853-3636

# CEMA 3

September 7, 2000

Circle for Studying Children & Museums,  
Aichi Museums Association

## あいち子どもミュージアムキャラバン 漁師は海のおさかな博士 ミニレポート②

天野幸枝  
(岡崎市美術博物館)

石器は名古屋市見晴台考古資料館の水野さんがせっせと用意してきてくださった下呂石(安山岩)を原石としたものです。危ないので少し切れすぎないようにしてあったのですが、魚の種類によっては思ったより皮が丈夫だったモノもあったようです。石器での調理は「思ったより切れる」とか「切れなーい!」

「これおいしいかな?」「どうやってさばくの?」などと言いながらも、自分のお腹の中へと入る魚の鱗を取り、はらわたを出してテキバキと調理していきます。スタッフが火をおこすなど、あたふたと準備をしていて気が付いたら、参加者は魚をさばいて焼いて食べていたという状況でした。

午後からは石器づくり体験と、魚骨の観察の2班に分かれて交替する形式を取りま

した。参加者には予め自分の食べた魚の骨を残しておくようにお願いしており、魚骨観察班はその骨をもって樋泉さんを囲みました。食べた後の魚の骨なんて普段でもそんなに気にするモノではないのですが、改めて見るとおもしろく、いろんな発見がありました。頸の骨、耳石、脊椎骨それぞれの魚にそれぞれの特徴があり、骨をきれいに掃除して顕微鏡で見てみたりしました。この感動を記録したいと思ったのか、顕微鏡の接眼レンズにカメラをくっつけてシャッターをきっている子もいました。もう一方の石器づくり班は、水野さんを囲み石



石器でさかなをさばく



参加者・スタッフ勢ぞろい

器の説明を受けた後で、鹿皮を膝にかけて下呂石を鹿角でカツカツと割剥がしてみました。ここでも先ほどの船同様で転がすのではなく滑らす、削るのではなく割剥がすという体験による言葉の意味合いを実感できたのではないかと思いました。

多分野の専門家が集まりこのような企画を行うことにより、参加者も魚をとおして、いろんな分野の側面に触れることができたのではないかと思います。それにともない興味も人それぞれに幅広く広がったのではないかでしょうか。帰りのバスは疲れて寝ている親あり、興奮冷め止まぬ子どももありという状況でしたが、笑顔でバスを降りて行かれたのをみて一安心でした。今回のキャラバンはとてもハードでしたが、参加したスタッフも楽しめて、学ぶことの多かった企画だったと思いました。

### ▼「漁師は海のおさかな博士」スタッフ

(敬称略)

#### 【講師】

神奈川県立生命の星・地球博物館：瀬能宏  
早稲田大学：樋泉岳二

#### 【愛知県博物館協会】

豊橋市自然史博物館：長谷川道明  
一宮市博物館：久保禎子・川島正二・宮下十有・下出至子・今枝雅子・祖父江佳世  
名古屋市見晴台考古資料館：水野裕之  
豊橋市美術博物館：岩瀬彰利  
徳川美術館：加藤啓子  
岡崎市美術博物館：天野幸枝  
愛知県陶磁資料館：佐藤一信

名古屋市博物館：  
犬塚康博

▼この日の様子は、  
2000年8月11日付  
の『東愛知新聞』(東  
愛知新聞社)で報  
道されました。

発行：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

愛知県陶磁資料館 (担当：佐藤)

〒489-0965 濑戸市南山口町234

phone:0561-84-7474 facsimile:0561-84-4932

編集：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

名古屋市博物館 (担当：犬塚)

〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

phone:052-853-2655 facsimile:052-853-3636

# CEMA 4

12/22, 2000

Circle for Studying Children & Museums,  
Aichi Museums Association

## あいち子どもミュージアムキャラバン わたしのパリはコレ！ミニレポート（前編）

高橋洋充（豊橋市美術博物館）

今回のミュージアムキャラバンは、既に終了した「どろんこやきもの探検隊」など何日かに渡って開催しているものが主となっていますが、この「パリ・コレ」は午前、午後にわかれ、同じプログラムで2回開催するものでした。

当日は、午前の部に3組（親4人、子ども5人、計9人）、午後の部に5組（親7人、子ども11人、計18人）の参加者があり、荻須記念美術館の山田さんの説明・進行により他のスタッフが各親子につきそい粘土細工を進めました。

ところで、開催までにはいろいろな苦労があったようで、簡単に紹介しますと、例えば粘土はどんなものを使うのかという問題がありました。ものによっては、すぐにはがれ落ちたり、ひび割れしたり、持ちが悪くなります。これについては今回のスタッフにもなっている荻須記念美術館の実習生の2人が実際に他の粘土を使って試作をしたり、また子どもと博物館研究会の他のメンバーからいろいろな粘土を紹介してもらったなどの話を聞いています。

その後8月に一度9人のスタッフ全員が集まり、打ち合わせを行うとともに全員で実際に試作を行いました。その時は作りたい色が上手くできず、この試作品は当日、失敗例としてみてもらおうと思い帰収したものです。

さて、前置きが長くなりましたが、当日の報告に移りたいと思います。

早めに集まって来た子供たちが大きく広げられたパリの地図を眺めたり、並べておいたパリグッズを手にとったり、スタッフに話しかけてきたりと、既に開始前には結構うちとけている子が何人かいました。

始めに荻須記念美術館の後藤館長からごあいさついただき、スタッフが自己紹介した後ワークショップが始まりました。まずはパリや荻須高徳さんについての説明です。用意したフランスパンやワイン、荻須さんが描いた建物の写真などを前に、パリがどんなところなのか、そのパリが好きだった荻須さんはどんな人なのか、そして今ではすぐ行けるパリも当時は船で1ヶ月くらいかかったこと、荻須さんは歴史を感じさせる建物が好きだったことなどの話を聞きました。

次にアトリエに移り、こんな部屋で絵を描いていたということを実際に見てもらいました。ここでは子供たちからも見慣れない物を見つけては「これは何？」という質問が出ました。また親からも「筆がきちんと洗ってあるんですね？」などの声が聞かれました。

続いて常設展示室で実際に荻須さんの描いた作品を見てもらい、描かれている物、どんな色を使っているのか、観光客がいない裏通りを好んで描いていたようだといった説明がありました。

その後実際に作る作品を選んでもらい、決まった人からスタッフに写真を撮ってもらい部屋へ戻りました。すぐに決まった人、最後まで迷っている人いろいろでした。1人1点作ってもらったのですが、親子で作ると思っていた人もいて、

「あ、私も？」と驚いている親もいました。

ちなみに人気のあった作品は『金のかたつむり』『ノワルムーチェの風車』『ギュドモン城館』といったところで、いずれも「荻須記念美術館所蔵品図録」に載っていますので興味のある方はご確認ください。

粘土などの簡単な説明があり、いよいよ制作に入りました。用意された粘土は白・黒・赤・青・黄の5色です。これを混ぜて荻須さんの描いた色を作ていきます。全て粘土で作るのは大変なので土台はお菓子などの空き箱を使い、それに貼りつけていくというやり方です。制作時間は約70分です。（2枚目に続く）



## あいち子どもミュージアムキャラバン わたしのパリはコレ！ミニレポート（後編）

高橋洋充（豊橋市美術博物館）

（1枚目から続く）

まずは自分の作る建物に見合った箱探しです。

ここから先は人それぞれの思惑があつて面白いものでした。この箱選びにしても、1つだけ持ってくる人、5つも持ってくる人などなど。次に屋根の斜面や、底の部分などを箱を切ったり、差し込んだりして作ります。大胆にてきぱき切り抜いていく人、念入りに建物の形を整えていく人、ただ今回はあくまでも粘土細工、ペーパークラフトではないのであまりここで熱心になりすぎてもいけません。そのあたりはスタッフがアドバイスしながら進めて行きました。円錐状になっている屋根の部分について、「どうやって作るの？」「ここを切ってこうして…」という親子の会話もあり、場の雰囲気も活気を帯びてきました。

ここからは写真を見ながら色を作り、粘土をどんどん貼り付けていきます。ただ、あらかじめよく混ぜて、ある程度薄く延ばしてから貼らないとうまくいきません。小学校低学年くらいだとまだまだ非力で、なかなか混ぜられない子もいたりして、こんな時にもスタッフが活躍します。また白以外の色は濃いので少し混せれば色が随分変わります。「ああ、こんな色ができちゃった」という声に、荻須さんの色作りに苦戦しているなと思いました。実際私自身も悪戦苦闘し、質問された色がうまく出せず他の親子を見渡してちょうどいい色があると「どうやって作るのか聞いてみよう」などと言つたりしていました。

ある程度時間が過ぎると早い子たちはほぼ完成します。すると「ここに、窓をつけていい？」「反対（絵では見えていない部分）も作っていい？」などの問い合わせがありました。必ずしも絵とそっくりにするのがねらいではありません。写真から想像して見えない部分を作っていくことや、自分の好きな色を作ることも重要です。子供の方から自然にそんな状態に入っていけたのはよかったです。なかには建物だけではもの足りず、作業用の台紙に土や草まで貼りつける子や建物の中の人を作る子もいました。

最後に、完成した全員の作品をパリの地図の上に置いてみました。セーヌ川沿いに何軒もの家や、箱をいくつか組み合わせて作った大きなお城が建ち並び、郊外にも風車小屋が見られ、すっかり街らしくなりました。

午前と午後を比べた場合、人数的なものもあるかも知れませんが、午後の方がより和気あいあいと賑やかに楽しめたという気がします。また、小学生とは思えないしっかりとした

説明をしてくれた子もいました。いずれも大作、力作揃いで感想も皆嬉しそうに話していました。

感想の主なものは「色の出し方が難しかった」「窓や屋根が難しかったけれどうまくできた」「土台で時間をとってしまった」「久しぶりに集中できて楽しかった」などでした。2時間という限られた時間の中で、平面（作品に描かれた建物）の構図・色彩から立体を想像して作る、荻須さんの色を考える、そして作家の制作意図へ近づこうというねらいは達成できたのではないかと思います。これを機にまた一味違った絵画鑑賞ができると思います。また愛博協加盟館が協力して、単独館ではなかなかできない事業を開催していくということも大切で、今後も何らかの形で継続できればと思います。スタッフもいろいろ勉強できたと思います。

帰り際に子供たちから「今度はいつやるの」「家で続きをやろう」と言われたことを最後に添えてこの報告を終わります。



※11月15日付「朝日新聞」尾張近郊版で報道されました。

NOTE 「CEMA(Children's Experience Museums of Aichi)」は、文部省「平成12年度親しむ博物館づくり事業」の委嘱事業となった「あいち子ども体験ミュージアム」に関するニュースをお届けします。お届けは、ファックスまたは郵便にて。刊行は不定期です。各館園で回覧していただきますよう、お願い申し上げます。

発行：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

愛知県陶磁資料館（担当：佐藤）

〒489-0965 濱戸市南山口町234

phone:0561-84-7474 facsimile:0561-84-4932

編集：愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

名古屋市博物館

〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

phone:052-853-2655 facsimile:052-853-3636

# 愛知県博物館協会加盟館における 子ども向け事業実態調査報告

目的と内容　徳川美術館●加藤啓子

文部省「平成12年度親しむ博物館づくり事業」の委嘱を受けた「あいち子ども体験ミュージアム事業」の一部としてアンケートを実施した。

愛知県博物館協会加盟123館園を対象に、子ども向け事業に関する現在までの収集・保管、展示、解説、研究室などの施設、技術的研究、ホームページ、研究会、他館との交流、学校等との協力といった事業実績、将来の予定、各館園・各事業の背景等を調査した。

アンケート結果を公開することで、各館の現状や抱える問題を把握し、今後の子ども向け事業を実施する糸口となったり、手助けになったり、また、分野を越えた、他館との情報交換など幅広く資料が活用されれば幸いである。さらに、学校五日制にむけて、各館が子ども向け事業を迫られる時、限られた人員、予算の中で対応できる事業を考えるきっかけとなればと考える。

設問内容は子ども向けに

- (3) 博物館資料の収集・保管をしているか？
- (4) 博物館資料を展示しているか？
- (5) 館外での巡回展示等をしているか？
- (6) 博物館資料の利用に関する説明、助言、指導等をしているか？
- (7) 研究室、実験室、工作室、図書室等を設置し、その利用を促進しているか？
- (8) 博物館資料に関する技術的研究や、展示に関する技術的研究を実施しているか？
- (9) 博物館資料に関する子ども向けの案内書、解説書等を作成し、頒布しているか？
- (10) インターネット上にホームページを開設しているか？子ども向けコンテンツがあるか？
- (11) 博物館資料に関する子ども向けの講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助しているか？
- (12) 子ども向けの事業で制作された作品を博物館資料として収集・保管、調査・研究、公開・教育しているか？
- (13) 子どもの博物館（資料）利用に関し、他の博物館等（博物館と同一の目的を有する国の施設を含む）と連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借を実施しているか？
- (14) 子どもをテーマにした事項で、学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を支援しているか？
- (15) 子ども向けの諸事業を実施する際、貴館園が立地する地域の事情を考慮したり、学校教育を援助し得るように留意しているか？
- (16) 子どもの博物館（資料）利用に関する事項を所轄する担当者あるいは部署はあるか？

## 質問票

### あいち子ども体験ミュージアム事業 子どもも向け事業実態調査アンケート

#### 【凡例】

[1] このアンケートは、文部省「平成12年度親しむ博物館づくり事業」の委嘱を受けた「あいち子どもも体験ミュージアム事業」の一部として実施するものです。愛知県博物館協会加盟123館園を対象に、子どもも向け事業に関する現在までの実績、将来の予定、各館園・各事業の背景等を調査します。

[2] 設問は、博物館法第3条を基礎とし、法文中の「一般公衆」を「子ども」に置き換えて作成しました。

[3] このアンケートで言う子どもとは、便宜上、中学校3年生までの意味で用いています。

[4] 各設問中の連番は、おおむね、括弧のあるアラビア数字は記述式、アルファベットは選択式（選択後の記述あり）となっています。

[5] 子どもの博物館利用をテーマにする場合、学校との連携（学社連携、学博連携）をどう位置づけるかが問題になりますが、このアンケートでは、学校との連携を設問14・15で扱います。したがって、それ以外の設問は、すべて博物館独自または固有の事業を対象としています。

[6] 設問中、「計画」とは平成13年度中（2002年3月まで）の実施が現時点を見通せるものを指し、それ以後の実施について「希望」とします。

[7] 調査データは、2000年10月1日現在とします。

[8] 別紙「回答票」にご記入の上、同封の返信用封筒にて、2000年10月31日まで郵便にて回答して下さい。

[9] 回答内容を踏まえ、必要に応じて、さらに電話・ファクス・面談等による聞き取り調査をさせていただきます。

[10] この調査の成果は、報告書『あいち子どもも体験ミュージアム』(仮称)にて公開する予定です。公開に支障のあるデータについては当該館園と協議します。

[11] このアンケート調査に対するお問い合わせは、下記までお願いいたします。  
〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂1-27-1 名古屋市博物館学芸課内 大塚康博  
電話052(853)2655 フアクシミ052(853)8400

#### 1. 名称

#### 2. 開館年

3. 貴館園では、子どもを利用を前提とする、博物館資料の収集・保管をしていますか？

- a. している
- b. していない

1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。

- (1) 収集・保管を開始した時期
- (2) 収集・保管する資料の種類（実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード、その他）
- (3) 代表的な資料の名称、数量、子どもも向けてして収集・保管した理由
- (4) 当該資料の登録方法（例：登録上、他の博物館資料と区別していますか？）
- (5) 当該資料の保管場所（例：他の博物館資料と同一の収蔵庫に保管していますか？）

2) 回答bの館園は、以下から選択してください。

- a. 実施計画がある  
(具体的に)
- b. 計画はないが、希望している  
(具体的に)
- c. 計画・希望ともにない

4. 貴館園では、子どもも向けて、博物館資料を展示していますか？

- a. している
- b. していない

1) 回答aの館園は、次の2つに即してご回答下さい。複数ある場合は列記して下さい。

- (1) 常設展で実施している場合の会期・会期
- (2) 特別展・企画展で実施している場合の会期・会期

2) 回答bの館園は、以下から選択してください。

- a. 実施計画がある  
(具体的に)
- b. 計画はないが、希望している  
(具体的に)
- c. 計画・希望ともにない

5. 貴館園では、子どもも向けて、館外での巡回展示等をしていますか？

- a. している
- b. していない

1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記して下さい。

- (1) 展示名称
- (2) 会期
- (3) 会場

2) 回答bの館園は、以下から選択してください。

- a. 実施計画がある  
(具体的に)
- b. 計画はないが、希望している  
(具体的に)
- c. 計画・希望ともにない

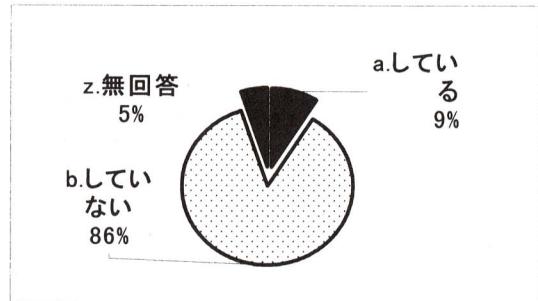
<p>6. 貴館園では、子ども向けに、博物館資料の利用に関する説明、助言、指導等をしていますか？</p> <p>a. している b. していない</p>	<p>1) 回答aの館園は、次の2つに即してご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 子ども向け専用として作成・頒布している案内書、解説書等の名称・刊行年 (2) 一般向けのものに含めて作成・頒布している案内書、解説書等の名称・刊行年</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に b. 計画はないが、希望している (具体的に c. 計画・希望ともにない</p>	<p>7. 貴館園では、子ども向けに、研究室、実験室、工作室、図書室等を設置し、その利用を促進していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>
<p>9. 貴館園では、博物館資料に関する、子ども向けの案内書、解説書等を作成し、及び頒布していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>	<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 子ども向け専用として作成・頒布している案内書、解説書等の名称・刊行年 (2) 一般向けのものに含めて作成・頒布している案内書、解説書等の名称・刊行年</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に b. 計画はないが、希望している (具体的に c. 計画・希望ともにない</p>	<p>10. 貴館園は、インターネット上にホームページを開設していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>
<p>11. 貴館園では、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 施設の名称・設置年 (2) ①の施設は、子ども向け専用に設置したものですか？ 一般向けと共用するものですか？ (3) 利用促進の内容と方法</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に b. 計画はないが、希望している (具体的に c. 計画・希望ともにない</p>	<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 子ども向けのコンテンツがある a. 子ども向けのコンテンツはないが設ける計画がある c. 子ども向けのコンテンツはなく設ける計画もない</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 開設計画があり、子ども向けのコンテンツを開設する b. 開設計画があるが、子ども向けのコンテンツは設けない c. 開設する計画はない</p>	<p>11. 貴館園では、博物館資料に関する、子ども向けの講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>
<p>12. 貴館園では、子ども向けの、博物館資料に関する技術的研究や、展示に関する技術的研究を実施していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>	<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 研究の成果物（論文・ノート・エセー等）の名称・公表年 (2) 研究成果を応用して実施した展示・事業の名称・実施年</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に b. 計画はないが、希望している (具体的に c. 計画・希望ともにない</p>	<p>1) 回答aの館園は、次の2つに即してご回答下さい。複数ある場合は列記してください。</p> <p>(1) 定期的に実施しているもの (2) 不定期に実施しているもの</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に b. 計画はないが、希望している (具体的に c. 計画・希望ともにない</p>

<p>12. 貴館園では、子ども向けの事業で制作された作品を、博物館資料として収集・保管、調査・研究、公開・教育していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>	<p>13. 子ども向けの事業で制作された作品を、博物館資料として収集・保管、調査・研究、公開・教育していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>
<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記して下さい。</p> <p>(1) 代表的な資料の名称・数量 (2) (1)を制作した事業の名称と実施年</p>	<p>1) 回答aの館園は、「考慮」[留意]の内容について具体的にご回答下さい。</p>
<p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に) b. 計画はないが、希望している (具体的に) c. 計画・希望ともにない</p>	<p>16. 貴館園で、子どもの博物館（資料）利用に関する事項を所轄する、担当者あるいは部署はありますか？</p> <p>a. ある b. ない</p>
<p>17. 貴館園で、子ども向け事業を継続実施あるいは新規実施する際の条件として、何が必要とお感じですか？</p>	<p>18. その他、設問項目以外で特記すべき事項、およびご意見がございましたらご記入下さい。</p> <p>b.</p>
<p>19. ご回答いただいた方のご氏名・所属・役職・ご連絡先</p> <p>ご協力ありがとうございました。引き続き、この調査に対するご理解とご協力をお願い申し上げます。</p> <p>a. 実施している b. 実施していない</p>	<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記して下さい。</p> <p>(1) 連絡・協力関係にある他の博物館等の名称 (2) (1)の博物館等との協力・支援の内容と方法 (例：刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借) (3) (1)の博物館等との協力・支援の開始時期</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に) b. 計画はないが、希望している (具体的に) c. 計画・希望ともにない</p>
<p>14. 貴館園では、子どもをテーマにした事業で、学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を支援していますか？</p> <p>a. している b. していない</p>	<p>1) 回答aの館園は、以下の項目にご回答下さい。複数ある場合は列記して下さい。</p> <p>(1) 協力・支援関係にある施設の名称 (2) (1)の施設との協力・支援の内容と方法 (3) (1)の施設との協力・支援の開始時期</p> <p>2) 回答bの館園は、以下から選択してください。</p> <p>a. 実施計画がある (具体的に) b. 計画はないが、希望している (具体的に) c. 計画・希望ともにない</p>

**あいち子ども体験ミュージアム事業  
子ども向け事業実態調査アンケート**  
総計 123館 回答館 102館 (回答率83%)

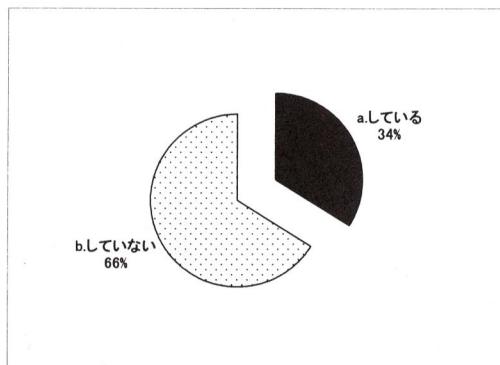
**3. 貴館園では、子どもの利用を前提とする、博物館資料の収集・保管をしていますか?**

- a. している 18館(18%)
  - b. していない 81館(79%)
- 2) 回答bの館園は、以下から選択してください。
- a. 実施計画がある 0館
  - b. 計画はないが、希望している 19館(23%)
  - c. 計画・希望ともない 62館(77%)
- z. 無回答 3館



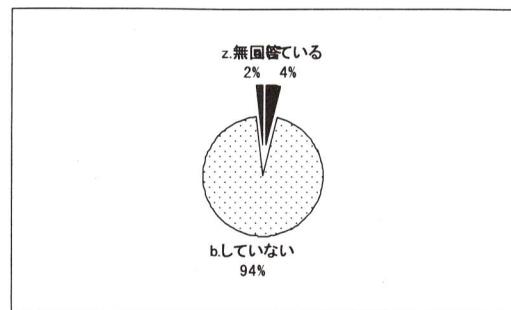
**4. 貴館園では、子ども向けに、博物館資料を展示していますか?**

- a. している 35館(34%)
  - b. していない 67館(66%)
- 2) 回答bの館園は、以下から選択してください。
- a. 実施計画がある 2館(3%)
  - b. 計画はないが、希望している 15館(22%)
  - c. 計画・希望ともない 46館(69%)
- z. 無回答 4館(6%)



**5. 貴館園では、子ども向けに、館外での巡回展示等をしていますか?**

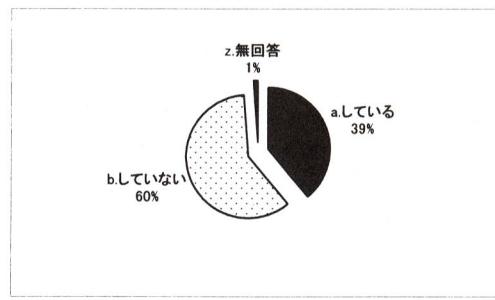
- a. している 4館(4%)
  - b. していない 96館(94%)
- 2) 回答bの館園は、以下から選択してください。
- a. 実施計画がある 1館(1%)
  - b. 計画はないが、希望している 17館(18%)
  - c. 計画・希望ともない 75館(78%)
- z. 無回答 3館(3%)
- z. 無回答 2館



**6. 貴館園では、子ども向けに、博物館資料の利用に関する説明、助言、指導等をしていますか?**

- a. している 40館(39%)
  - b. していない 61館(60%)
- 2) 回答bの館園は、以下から選択してください。
- a. 実施計画がある 1館(2%)
  - b. 計画はないが、希望している 13館(21%)
  - c. 計画・希望ともない 45館(73%)
  - d. 要望に応じて 1館(2%)
- z. 無回答 1館(2%)

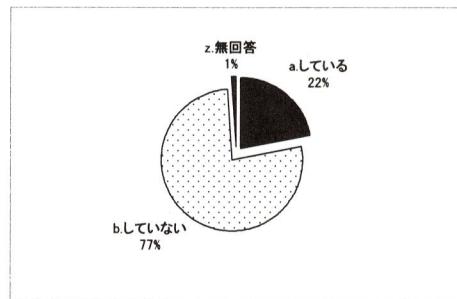
z. 無回答 1館



**7. 貴館園では、子ども向けに、研究室、実験室、工作室、図書室等を設置し、その利用を促進していますか?**

- a. している 22館(22%)
  - b. していない 79館(77%)
- 2) 回答bの館園は、以下から選択してください。
- a. 実施計画がある 0館(0%)
  - b. 計画はないが、希望している 7館(9%)
  - c. 計画・希望ともない 69館(87%)
  - d. 無料観覧券を付ける 1館(1%)
- z. 無回答 2館(3%)

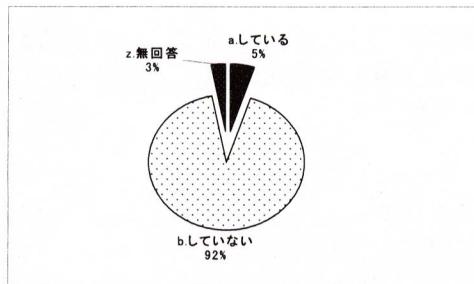
z. 無回答 1館



**8. 貴館園では、子ども向けの、博物館資料に関する技術的研究や、展示に関する技術的研究を実施していますか？**

- a. している 5館( 5%)  
b. していない 94館(92%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 0館(0%)  
b. 計画はないが、希望している 22館(23%)  
c. 計画・希望ともない 69館(73%)  
z. 無回答 3館( 3%)

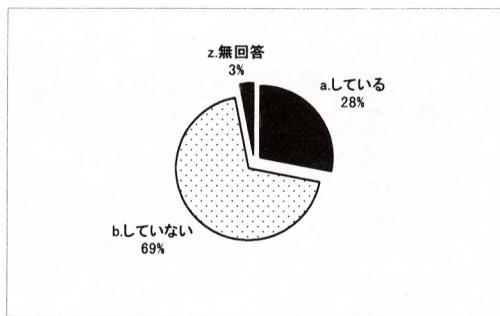
z. 無回答 3館



**9. 貴館園では、博物館資料に関する、子ども向けの案内書、解説書等を作成し、及び頒布していますか？**

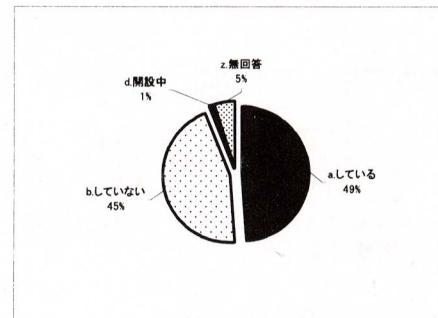
- a. している 29館(28%)  
b. していない 70館(69%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 3館(4%)  
b. 計画はないが、希望している 19館(27%)  
c. 計画・希望ともない 46館(66%)  
d. 競書誌「硬筆中道」発行 1館(1%)  
z. 無回答 1館(1%)

z. 無回答 3館



**10. 貴館園は、インターネット上にホームページを開設していますか？**

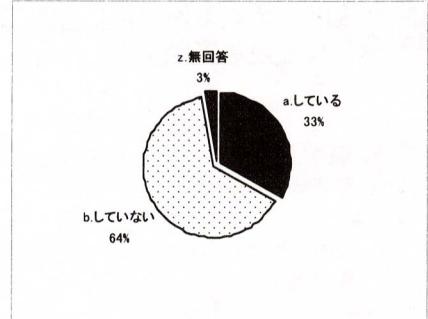
- a. している 50館(49%)  
1) 回答aの館園は、以下から選択してください。  
a. 子ども向けのコンテンツがある 7館(14%)  
b. 子ども向けのコンテンツはないが、設ける計画がある 10館(20%)  
c. 子ども向けのコンテンツはなく、設ける計画もない 32館(64%)  
d. 検討中 1館(2%)  
b. していない 46館(45%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 開設計画があり、子ども向けのコンテンツを設ける 3館(7%)  
b. 開設計画があるが、子ども向けのコンテンツは設けない 9館(19%)  
c. 開設する計画はない 32館(70%)  
d. 検討中 1館(2%)  
z. 無回答 1館(2%)  
d. 開設中 1館  
z. 無回答 5館



**11. 貴館園では、博物館資料に関する、子ども向けの講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助していますか？**

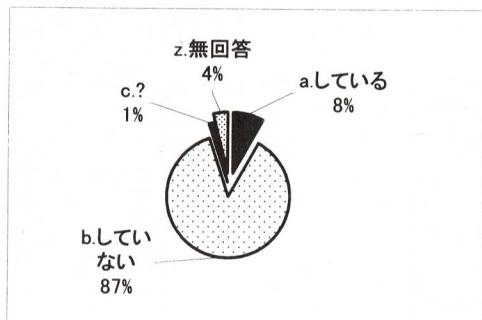
- a. している 34館(33%)  
b. していない 65館(64%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 1館(2%)  
b. 計画はないが、希望している 8館(12%)  
c. 計画・希望ともない 53館(82%)  
z. 無回答 2館(3%)

z. 無回答 3館



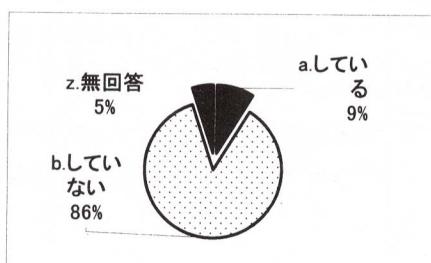
12. 貴館園では、子ども向けの事業で制作された作品を、博物館資料として収集・保管調査・研究、公開・教育していますか？

- a. している 8館( 8%)  
b. していない 89館(87%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 0館(0%)  
b. 計画はないが、希望している 9館(10%)  
c. 計画・希望ともにない 77館(87%)  
z. 無回答 3館( 3%)  
c. ? 1館  
z. 無回答 4館



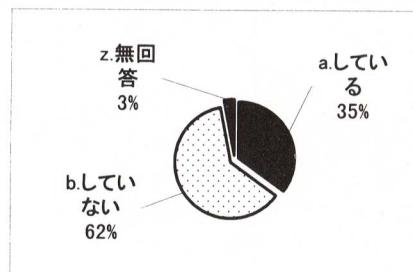
13. 子どもの博物館（資料）利用に関し、他の博物館等（博物館と同一の目的を有する国の施設を含む）と連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借を実施していますか？

- a. 実施している 9館( 9%)  
b. 実施していない 88館(86%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 1館( 1%)  
b. 計画はないが、希望している 23館(26%)  
c. 計画・希望ともにない 58館(66%)  
z. 無回答 6館( 7%)  
z. 無回答 5館



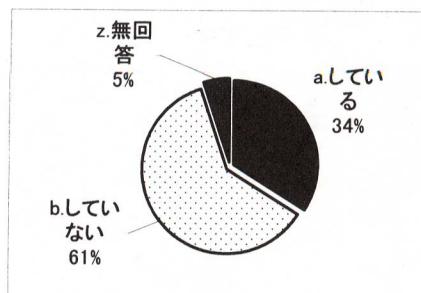
14. 貴館園では、子どもをテーマにした事項で、学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を支援していますか？

- a. している 36館(35%)  
b. していない 63館(62%)  
2) 回答bの館園は、以下から選択してください。  
a. 実施計画がある 1館( 2%)  
b. 計画はないが、希望している 15館(24%)  
c. 計画・希望ともにない 45館(71%)  
z. 無回答 1館  
z. 無回答 3館



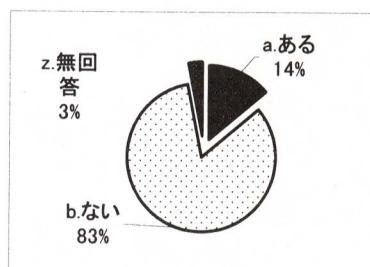
15. 貴館園では、子ども向けの諸事業を実施する際、貴館園が立地する地域の事情を考慮したり、学校教育を援助し得るよう留意していますか？

- a. している 35館(34%)  
b. していない 62館(61%)  
z. 無回答 5館



16. 貴館園で、子どもの博物館（資料）利用に関する事項を所轄する、担当者あるいは部署はありますか？

- a. ある 14館(14%)  
b. ない 85館(83%)  
z. 無回答 3館



3. 貴館園では、子どもの利用を前提とする、博物館資料の収集・保管をしていますか？  
「a. している」と回答のあった18館の具体的な内容

1. 名称	3.1.1 収集・保管 を開始し た時期	3.1.2. 収集・保管する資料の種 類（実物、標本、模写、模 型、文献、図表、フィル ム、レコード、その他）	3.1.3. 代表的な資料の名称、數 量、子ども向けてして 収集・保管した理由	3.1.4. 当該資料の登録方法	3.1.5. 当該資料の保管場 所
あいち健康の 森健康科学総 合センター 健康科学館	開館時	文献、フィルム、その 他（健康教育用教材）	・文献→子ども用図書 (330冊) ・フィルム→ヘルスサ イエンスシアターにて 上映(9本) ・その他健康教育用教 材(36テーマ)	特にしていない	展示室、収蔵庫
一宮市博物館	1999年	民俗資料	アブチ、石臼など、実 際に民俗資料を身近に 理解してもらうために 収集を始めた。	登録をしないで（寄 贈者にその旨を伝え てある）「使用」目的 として区別している。	食にかかるもの など薰蒸ができな いので、別に保管。
岡崎信用金庫 資料館	昭和57年	実物、標本、模写、模 型、図表、フィルム、 その他	「中世の商い」「さまざま な貨幣」「あいちの地 場産業」 (社会見学 の1コースにと思い)	区別していない	同一の展示
ガスエネルギー 一館		実物、模型、図表、写 真、レーザーディスク	実物：ガス灯、ガスの 花、マイコンメーター、 ガスネオン、むかしの ガス機器 模型：LNGタンカー 図表：気体と液体の温 度 写真：科学者の顔写真	区別はなし。	他の展示物と同一
設楽町 奥三河郷土館	昭和52年 3月から	実物、標本、模型、は く製	昆虫標本 約300点、鉱 物・化石標本 約100点 歴史（縄文～古代～戦 国時代） 模型 約50点等 郷土理解のために収集	当該資料は一括して ある	ガラスケース内に 展示以外は町の収 蔵場所に保管
晴嵐館	開館 当初 より (昭和46 年)	実物、文献	書写書道作品・教育書 写手本など多数 書写 書道教育普及発展のた め	正式な登録はしてい ないが、区別して保 管してある。今後登 録作業をすすめたい。	特に決めてはいな い。
武豊町歴史 民俗資料館	開設 当初 から	実物、文献、レコード	遊び道具類	登録の区別をしてい ない	特定の場所を決め ていない
作手村歴史 民俗資料館	昭和59年	昭和期のおもちゃ全般	特になし	していない	展示物のみ(約5 0点程)
でんきの 科学館	昭和61年 7月	本、資料		していない	同一でない
豊田市 郷土資料館	平成10年	実物、写真、標本、文 献	民俗資料 ex. しょい こ、籠 実際に触れて、 使ってもらうため	参考資料(体験用) として登録	同じ
トヨタ博物館	開館準備 以降、收 集・保管 を開始	実物、模型、文献	「ティントイ」約320点、 「ペダル・カー」8点 …特別展示 「書籍」 …資料室閲覧	他の博物館資料と区 別せずに登録(資料 室閲覧除く)	同一の収蔵庫に保 管(資料室閲覧 除く)
名古屋海洋博 物館・南極観 測船ふじ	当初より  ※一般向 けの博物 館資料の 中に子 ども向 けの ものを 含 んでいま す。	実物、模型、フィルム	実物：南極観測船ふじ (一隻)、名古屋海洋博 物館の実物資料として “生きた教材として船 を体験して頂こう”と いうものです。 模型：船模型 フィルム：16mmフィル ム(12本)、海・船・港 ・南極に関するアニメ ーションのフィルム、 海事思想の普及を目的 にしています。 ※一般向け資料の中 に含まれるものもその 他あります。	博物館資料として登 録(区別はしていな い)	同一の収蔵庫に保 管
名古屋港水族 館	1994年頃	実物、標本、模型、文 献、図表、写真、その 他	スクールの教材(生態ピ ラミッド図など)、タッ チタンクでの活動	登録という形式はな い	

1. 名称	3. 1. 1	3. 1. 2.	3. 1. 3.	3. 1. 4.	3. 1. 5.
名古屋市科学館	開館のときから	模型	246点(=全展示品数)、大人より子どもの入館者の方が多いので	区別なし	なし
名古屋市東山動植物園	1950年代から(昭和25年から)	実物、標本、模型、写真。動物:骨標体、ネコ科の爪や視角の模型等、写真:イベント時に多く使用、動物クイズ等	動物会館(子供の動物科学館)にて日本産動物の剥製、骨格標本など。子ども動物園にてヤギ、ウシ、ヒツジ、ウサギ、モルモットなどふれあい用。	名古屋市の財産として登録のみである	当動物園内
日本独楽博物館	1970年	実物、模型、文献、写真、レコード	・内外のこま約2万点 ・江戸～現代の玩具(中心は駄菓子屋玩具)約2万点 ・海外の手作り玩具約2千点 ・戦意高揚玩具等約千点		
半田市立博物館	昭和59年	実物、標本、模型、文献	からくり人形模型	一般資料と同じ	同一収蔵庫
碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	開館当初より	実物、標本、模型、文献、図表、写真、フィルム、その他漁具・出土品・生物・港等に関する物	①希少淡水魚類 ②クラゲ類 ③深海、北の海の生物 ④暖海性の魚類 ⑤サンゴ礁の魚 ⑥矢作川の魚 ⑦内湾の魚 ⑧ウミガメコーナー等	登録博物館	別
御園高原自然学習村	開館当初より	観測広場に設置してある天体望遠鏡15台のほか上記の全て(実物・標本・模写・模型・文献・図表・写真・フィルム・レコード)	天体望遠鏡15台	子ども向けの施設であるからすべて自館登録	同上

#### 4. 貴館園では、子ども向けに、博物館資料を展示していますか？

「a. している」と回答のあった35館の具体的な内容

1. 名称	4. 1. 1. 常設展で実施している場合の会期・名称	4. 1. 2. 特別展・企画展で実施している場合の会期・名称
愛知県陶磁資料館		平成11年より「こども美術館 やきものはっけんでん」(11年 7/17-9/5、12年 7/15-9/17) 12年度より「焼き物王国あいち」(12年 7/20-11/23)
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	・常時→お話ランド ・定時→エデュケーションスタジオ ・定期的→工作ランド ・随时→オリエンテーション	なし
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	会期: 夏休み期間 名称: 夏休み特集「絵の中の動物たち」(2000年度の場合)	
一宮市博物館		平成3年度から毎年1月～2月会期 「くらしの道具—今と昔—」
一宮町歴史民俗資料館	土器にさわってみよう。	
大口町歴史民俗資料館	無期限、体感広場	
岡崎信用金庫資料館	常設、「中世の商い」「さまざまな貨幣」「あいちの地場産業」	
ガスエネルギー館	常設(土曜、日曜(第一日曜日を除く)、年末年始、当社が定める休日以外の日) エネルギーの科学	
窯のある広場資料館・世界のタイル博物館	特に名称はないが、世界のタイルの中の技術展示で、原料の粘土や石をオープン展示、焼き物の琴のオープン展示、組み合わせタイルのオープン展示	
刈谷市美術館		年2回程度、特別展会期中にを行う。 2001年9月23日～10月29日「アートでたんけん！絵画の世界へ」を開催

1. 名称	4. 1. 1.	4. 1. 2.
産業技術記念館	「テクノランド」コーナーで機械に使用されている機構・原理を体験しながら学べる装置、ゲーム機がある(総数22分野)	
設楽町奥三河郷土館	火曜日及び年末・年始の各3日間を除き年間通して展示。特に名称はない。	奥三河郷土館特別展として例年11月中(毎年ではない)
七宝町郷土資料館		2月～3月 企画展「くらしの民具」常時掛替え 競書作品展示
晴嵐館		「発見・体験・学習広場」夏休み期間中
武豊町歴史民俗資料館		「むかしのくらし展」冬季
知立市歴史民俗資料館		市内小学校による資料館見学に合わせた時期(2月)「きて・みて・さわって」シリーズ
作手村歴史民俗資料館	コーナーを設け「むかしの遊び」	
津島児童科学館	常設展示室にガラスケースにより化石、隕石等の展示	
でんきの科学館	本関係	
トヨタ博物館		1998.10.6～12.6 第18回特別展「子どもの世界」 2000.10.3～11.26 第20回特別展「夢のクルマ大集合」
名古屋港水族館	タッチタンク	
名古屋市科学館	いつも 子どもと大人も共に見学することを前提にしている。	いつも 子どもと大人も共に見学することを前提にしている。
名古屋市博物館		平成5年9月14日～10月13日 企画展「原始・古代をあそぶ」 平成7年7月22日～8月27日企画展「夏休み親と子のれきしどぶつえん」 平成12年7月15日～8月27日企画展「夏休み子ども博物館おもしろやきもの展」
名古屋市東山動植物園	動物会館(子どもの動物科学館)通年	金紫猿展約1年、田んぼの生き物たち展、8月の3週間「木の実、草の実展」12年12月～13年1月
名古屋市美術館	会期：毎年・夏休み期間 名称：夏休み子どもの美術館	
新美南吉記念館	新美南吉の代表作のジオラマ	
日本独楽博物館	ほとんど子供の玩具・生活用品ばかりで、常設のみ(貸出しあげている)	
博物館明治村	明治のよろず体験(2000.10～)	明治のタイムカプセル (1998.3.21～5.31) 明治のタイムカプセルPart II (1998.7.18～11.23)
春日町中央公民館郷土資料室	常設展(特に名称なし)通年	
半田市立博物館	半田の祭礼、民俗	
古橋懐古館	飢餓関係資料、民具類…常時	
碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	科学館“水—森から海へ”をメインテーマに1999年12月リニューアル。体験を取り入れた環境学習のために最適なブースが7つ!	夏 7月上旬～8月 夏の特別展 冬 1月2日～1月31日 冬の特別展
鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館	中学生が理解できる内容のものを心がけている。展示資料はほとんどが自然に関する実物標本展示。	
御園高原自然学習村		子供天体写真教室を通年
野外民族博物館リトルワールド	野外展示家屋 「ドイツバイエルン州の村」 メルヘンバート2F 玩具展示室	2000年4/29～8/31 第32回テーマ展「どんなくらし? こんなくらし? —リトルワールドKIDSミュージアム」

## 5. 貴館園では、子ども向けに、館外での巡回展示等をしていますか？

「a. している」と回答のあった4館の具体的な内容

1. 名称	5.1.1. 展示名称	5.1.2. 会期	5.1.3. 会場
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	「移動美術館 “美術館がやってきた”」※子どものみを対象とした事業ではないが、開催地の教委や学校との協力で、小中学生の団体（学年別、クラス単位）に学芸員が説明などを実施している。	毎年10月頃 10日から3週間程度	名古屋から公共交通機関で1時間以上かかり美術館のない地域の公民館・体育館等
御園高原自然学習村	『星の出前』と名付けて巡回観測車（走る天文台）	冬期を除き通年	へき地の学校を中心に
晴嵐館	①全国教育書道展 ②中道書初め展	①毎年8月中旬 ②毎年2月上旬	①愛知県中小企業センター展示場②江南市民文化会館展示室
名古屋港水族館	一日水族館（仔カメ展示など）	祭り・学校休業中	祭り会場ブース、デパート、特設会場
名古屋市東山動植物園	動物フェスティバル	9月1日	久屋大通り公園

## 6. 貴館園では、子ども向けに、博物館資料の利用に関する説明・助言・指導等をしていますか？

「a. している」と回答のあった40館の具体的な内容

1. 名称	6.1.1. 定期的に実施しているもの	6.1.2. 不定期に実施しているもの
愛知県陶磁資料館		展示解説（主に「子ども美術館」展での学校単位での作品についてのガイド、社会見学の際の説明）
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	・エデュケーションスタジオにてエデュケーション ・お話ランドにて絵本の読み聞かせ	オリエンテーションにて健康教育
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	夏休み子ども鑑賞会	学校団体および中学生のグループ鑑賞等への説明など
渥美町郷土資料館	特になし	学校より館内見学の希望があった場合、実施している。
一宮市博物館	前述の「くらしの道具ー今と昔ー」に際し、展覧会の利用の仕方を提示する。	
一宮町歴史民俗資料館		学校からクラス単位での来館の際。
稲沢市荻須記念美術館		団体鑑賞時、説明依頼のあった時
犬山市文化史料館		小・中学生等の来館があって、特に説明等の要望があった場合に説明・指導をしています。
ガスエネルギー館	気体の断熱圧縮、ふしげな浮沈子	
かみや美術館	美術館視聴覚室のビデオに子供むけの作品があり希望者は見ることができる。 分館「南吉の家」の説明テープは子供にもわかる内容にしてある。	
刈谷市美術館		特別企画展中に、子供を対象としたギャラリー・トークを行っています。造形を中心としたワークショップも行っています。夏休み時は、鑑賞を主にしたアートゲームを行いました。
産業技術記念館	子ども達の見学に際しては館員によるモノができる様子の実演や機械の作動、それに合わせた詳しい説明を行っている。また子ども達自らが参加し体験できる展示物が多くある。	
醸造「伝承館」	小学校等地域産業についてをグループで調べる会等があり、その時は分かりやすく説明している。	
昭和美術館		学校指導の社会見学に伴ひ来館の際一同教室於て博物館の意義と実際を講義す。
杉本美術館		説明等
晴嵐館		要望に応じて適宜実施
瀬戸市歴史民俗資料館		企画展パンフレットに子供向けのものを作成することがある。
高浜市やきものの里 かわら美術館	展覧会ごとに、市内と近隣の小・中学校にチラシを配布している。	年1回の絵本展の時には子ども向けのチラシを別途作成し、無料観覧券をついている。また、要望があれば、小・中学生の団体観覧の解説・案内を行う。
知多市歴史民俗博物館		特別企画展の展示説明会
東海銀行貨幣資料館		電話照会、来館時での対応

1.名称	6.1.1. 定期的に実施しているもの	6.1.2. 不定期に実施しているもの
東海市立平洲記念館・東海市立郷土資料館		小中学校の見学
徳川美術館	第2・4土曜日は小・中・高生無料入館日とし、希望者に常設展示室を解説。 「夏休み子ども特別企画」夏休み中の企画展に対し、ワークシートを作成し、8月中、企画展を解説	
常滑市民俗資料館	なし	社会見学、郷土学習等の見学時に希望があれば子供向けの説明を行う程度
豊田市郷土資料館		学校の団体見学の際に、解説書（子ども用）を渡し、学芸員の案内を行う
豊田市民芸館・豊田市陶芸資料館		小・中学校の団体見学を対象とした説明
トヨタ博物館	団体見学時、見学前に館利用の説明、博物館資料の簡単な説明を行っている（学校行事、子ども会行事等）	館内説明員→見学の邪魔にならない程度に声をかけたり、質疑の応対をしている。 整備士→開館時間内に展示場にて資料点検を実施。質疑の応対をしている。 学芸員・職員→要請に応じて、質疑（電話・手紙等を含む）の応対や資料の助言、指導を実施。
名古屋港水族館		情報ルーム（図書室）において、Q&Aに対応する職員が待機、職場訪問に対応、ボランティアによる紙芝居
名古屋市東山動植物園	動物会館に動物相談員が常駐対応。※実施計画予定、小中学生対象「自然環境学習コースの設置」（屋外）	動物園ガイド
名古屋市美術館	「夏休み子どもの美術館」期間中に おけるガイドツアー	
名古屋城		特に主催して実施することはないが、学校等から要望があり学芸員のスケジュールが合えば展示品の説明を行ったりすることがある。
日本独楽博物館		問い合わせ、来館時
日本モンキーセンター		事前に申し込みのあった学校等についてレクチャーを行なっている。
博物館明治村	建物説明（3ヶ所 午前・午後各1時間）	明治のよろず体験の明治の道具体験
春日町中央公民館 郷土資料室	小学生（低学年）の施設見学	小学生の生活科で「昔のくらし」について学ぶ際の展示室見学
半田市立博物館	小学校の見学に合わせ、教材を用意、説明をしている	
古川美術館		学校からの分散学習等での解説
古橋懐古館	学校から希望のあった場合、事物に即し説明する	
碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	市内小学生校学習指導 6月…2年生 水族館の見学 10月、11月…6年生 水族館のしくみ、解剖実習 4年生 郷土見学と科学館学習	「総合的学習の時間」を使った小、中学生の訪問、体験学習を受け入れている。
御園高原自然学習村	個別指導を主としている	

7. 貴館園では、子ども向けに研究室、実験室、工作室、図書室等を設置し、その利用を促進していますか？

「a. している」と回答した22館の具体的な内容

1.名称	7.1.1 施設の名称・設置年	7.1.2. (1)の施設は子ども向け？一般向けと共用するもの？	7.1.3 利用促進の内容と方法
愛知県陶磁資料館	陶芸館、ビデオコーナー	共用するものである	(館全体の案内ではあるが)11年度より小中学校向けにパンフレットを作成し、呼びかけをおこなっている。
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	・工作ランド H10.11 ・お話ランド H11.4	一般と共に	健康科学館ニュースやイベント案内等当館発行の各種ちらしに掲載
一宮市博物館	学習室（1987、開館時）	一般向けと共用	学業期間 第2、4土曜日は入館料無料
稻沢市荻須記念美術館	市民ロビー、図書閲覧室 1983年	一般向けと共用	団体での美術館見学時にPRと利用法の説明をする

1.名称	7.1.1	7.1.2.	7.1.3
碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	サマースクール、工作教室	子ども向け専用	工作教室は夏休み中4回設定し、できる限りたくさんの子どもたちに参加してもらうよう、内容等も吟味している。
御園高原自然学習村	開館当初より望遠鏡の製作、改造のため工作機械を開設	一般向け	
野外民族博物館 リトルワールド	1983年 学習室	共用	体験クラブとして予約制の工作教室を実施

8. 貴館園では、子ども向けの博物館資料に関する技術的研究や展示に関する技術的研究を実施していますか？

1.名称	8	8.1.1. 研究の成果物(論文・ノート・エセー等)の名称・公表年	8.1.2. 研究成果を応用して実施した展示事業の名称・実施年
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	b		研究はしていないが、常設展の夏休み特集として、以下の展示を実施した。 ・1999年度「長谷川潔の銅版画」…作品と併せて銅版画の材料や道具を展示し、ビュラン体験コーナーを設けた。 ・2000年度「絵の中の動物たち」…生き物の絵を集めキャプションと解説パネルに大人用・子ども用を二段掛した。
一宮市博物館	a	・『迷える学芸員のある日の暴走』久保禎子 1999月刊『』VOL. 33 ・『博物館で語られた「地域の昔」』福田珠己 2000人間科学論集第30号	
蟹江町歴史民俗資料館	b	「研究成果」と言うことはできないと思うが、小学6年生を対象に夏休み期間に実施する、郷土文化研究クラブ（昭和57年度より実施）の参加児童の感想文を平成2年度より書いてもらっていて、平成3年度より年報に掲載し、公表している。	
晴嵐館	a	書写書道教育研究の委託 繼続中	
名古屋港水族館	a	論文、港内に対する付着生物の生活史を観察する サマースクール（1998）動物園水族館雑誌39(2): 39-46、海岸生物と生息環境を理解させるため の水族館の体験型教育プログラムに関する検討 (2000)、環境教育10(1):28-34	
名古屋市東山動植物園	a	「こども動物園」のふれあい広場の建設にあたり全国調査	こども動物園のふれあい広場 平成9年3月

↑ a 実施している b 実施していない

9. 貴館園では、博物館資料に関する子ども向けの案内書、解説書等を作成し、及び配布していますか？

「a. している」と回答した29館の具体的な内容

1.名称	9.1.1. 子ども向け専用として作成・頒布している案内書、解説書等の名称・刊行年	9.1.2. 一般向けのものに含めて作成・頒布している案内書・解説書等の名称・刊行年
愛知県陶磁資料館	「はっけんメモ帳」1999、2000 A5 16ページ程度 「伝統的な日本の焼き物」2000 A3両面	
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	小中学生向けワークシート（1993-96年）、館蔵作品展「鑑賞の手引き」1996年、 小学1-3年生向けワークシート（1997-98年）	
渥美町郷土資料館	「たずねる・ふれあう わたしたちの郷土資料館」平成10年3月（小学校6年生を対象）	
一宮市博物館	『くらしの道具』1996 『くらしの道具－今と昔－すごろく』1997 『くらしの道具－今と昔－かるた』1998 『くらしの道具－今と昔－（はり絵）』1999 『くらしの道具－今と昔－（パズル）』2000	

1.名称	7.1.1	7.1.2.	7.1.3
産業技術記念館	<p>① 図書室：1994年設置。産業と技術を中心とした書籍5万冊所蔵。同様の児童図書も2千冊ある。</p> <p>② ビデオライブラリー：1994年設置。産業技術やモノづくりのビデオ約270本ある。</p> <p>※ ①、②とも観覧料なしで開館中はどなたでも自由に利用できる。</p> <p>③モノづくり体験工作室：2000年設置。展示場の一角に小学生の団体や一般の希望する方に簡単な“モノづくり”ができる工作室を設置、運営している。</p>	一般向けと共用です。	<p>図書室・ビデオライブラリーとも書籍やビデオの充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書室は児童図書の増加。</li> <li>・ビデオライブラリーは“モノづくり”に携わった人達を紹介したビデオなど子ども達が関心あるものや親しみあるビデオを増やす。</li> </ul>
晴嵐館	鍊心講堂 昭和52年	一般と共に	書道指導
高浜市やきものの里 かわら美術館	陶芸創作室 平成7年	一般向けと共用	市内・市外問わず小中学生が学校授業として利用する場合は費用を減額する。
でんきの科学館	ライブラリー 昭和61年7月	共用する	館内看板とパンフ紹介
東海市立平洲記念館・ 東海市立郷土資料館	平洲ホール、平成12年	共用	クイズ、ゲーム、ビデオで平洲を学ぶ
豊田市民芸館	豊田市陶芸資料館内陶芸室、染織室	一般と共に	市内小中学校へのPR強化。継続的に実施し、定着を図る。
トヨタ博物館	図書閲覧室 1989年 工作教室（不定期に設置） 1991～2000年 1～2回/年（設問12で回答）	一般向けと共用で子ども向け 図書・絵本・ビデオ等を用意している。	受付カウンター横にワゴンを設置。新着や特別展に関連した図書を紹介している。パソコン検索システムを一般向けとは別に子供向けも設置。図書閲覧室にビデオ閲覧テーブルを設置。子供向けのビデオテープを設置。受付カウンターにて質疑に応対している。
豊橋市自然史博物館	山福文庫（図書コーナー） 1988年	共用	市内小中学校の教員からなる図書館部会による読みきかせの会（夏休みに開催）など
名古屋海洋博物館・ 南極観測船ふじ	講堂・会議室 ※名古屋海洋博物館は展望室・会議室を含む複合施設ポートビルの3,4Fにあります。講演会・映画会・教室・特別展等の企画時には、ポートビル内の講堂・会議室を利用しています	一般向けと共用するもので、子ども向けにも利用しています	月1～2回以上、企画、イベントで利用（特別展示の際は1ヶ月以上）ex. 海の映画会、親子ふじ大学、夏休み子供教室ボトルシップ入門、ボトルシップの作り方入門教室、ポートウォッキング等
名古屋港水族館	情報ルーム（図書室）、 レクチャーホール	一般向けと共用	時間帯によってはQ&Aに対応する職員が待機
名古屋市科学館	科学実験室、電子工作室、学習室、 情報資料室（現在のものは平成元年から）	共用	実験工作室等の主催
名古屋市東山動植物園	動物会館 昭和60年4月開館	一般向けと共用	常設展示「食べる」をテーマ、図書館、ハイビジョンシアター等
新美南吉記念館	工作室、図書室	共用	折り紙教室など工作系講座や読み聞かせ会などの開催
日本独楽博物館		大人も子供も、又共に伝承あそびの技の指導	
日本モンキーセンター	森の工作室 1997年 おさるの図書館 1988年	共用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身のまわりにある木の実や木片などを使ってサルや自分の好きな物を造る。</li> <li>・サルに関する本や図鑑類の閲覧、絵本なども多くおいている。</li> </ul>
半田市立博物館	59年「体験学習室」	一般と共に	

11. 貴館園では、博物館資料に関する子ども向けの講演会・講習会・映写会・研究会等を主催し、及びその開催を援助していますか？

「a. している」と回答した33館の具体的な内容

1.名称	11.1.1. 定期的に実施している	11.1.2. 不定期に実施している
愛知県陶磁資料館		親子陶芸教室、「こども美術館」にあわせての野焼き
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	映画ー土・日・祝日に子ども向け	・映画ー特別シアターとしてイベント時や長期休業（春、夏、冬休み）中に、アニメをはじめ、話題のものを。 ・健康教室ー親子で参加できる教室を開催（ex. 親子で秋を探そう！）
一宮市博物館	・土器づくり ・子どものための尾張歴史講座（平成12年度～）	・編布、縄文時代の布づくり ・弥生時代の布づくり ・縄文時代の食（ドングリ） ・石器づくりなど
稻沢市荻須記念美術館		「わたしのパリはコレ！」ワークショップ 2000年
ガスエネルギー館	映写会	
蟹江町歴史民俗資料館		郷土文化研究クラブ 刺繍学習会小学生児童の部 (いずれも夏休み期間に実施)
蒲郡市博物館	S L写生大会	
刈谷市美術館		絵本原画展会期中に、お話をしています。
産業技術記念館	①周年イベントとして小学4、5年生を対象にした科学実験教室「科学のびっくり箱 なぜなにレクチャー」を開催 ②子ども達を対象にしたモノづくりが体験できるイベントを3～4回開催。	
晴嵐館	書道教室・学生向け展覧会・書きぞめ会（1月2日）	なし（要望に応じて）
武豊町歴史民俗資料館	春、夏、秋、冬に体験教室を開催している	
知多市歴史民俗博物館	体験講座「親子しめかざり作り」 体験講座「親子おこしもの作り」	その他体験講座
知立市歴史民俗資料館		資料館探検 民俗資料による体験講座（おこしものづくり、たらいで洗濯など）
津島児童科学館	化石教室、理科工作教室、星空教室	
でんきの科学館	実験教室（こどもでんきくらぶ）、工作教室（こどもくらふとくらぶ）	
徳川美術館		夏休み子ども特別企画 小中学生の歴史教室、作って遊ぼう貝あわせ教室 甲冑づくり教室、刀・火縄銃バラバラ事件ほか
豊田市民芸館	夏休みに実施する、穴窯陶芸講座	外部団体が実施する子ども向けに実施するワークショップに対して場所を提供する。
トヨタ博物館		新旧車比較講習会 映写会（？）
豊橋市自然史博物館	映写会（第2、第4土曜日に開催）	学習教室、自然観察会
名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ	毎月第2土曜日に海の映画会を実施、内容は子供向けアニメーションとドキュメンタリー。「夏休み子供教室ボトルシップ入門」・「ボトルシップの作り方入門教室」（一般も含む）・「ポートウォッキング」（一般も含む）・「親子ふじ大学」（親子対象）を年各一回開催	なし
名古屋港水族館	サマースクール、ウインターフェスティバル	中日エスクカーション、仔ガメ放流会、紙芝居
名古屋市科学館	実験工作教室、サイエンス工房、電子工作教室、かがくの実験室、生命科学の実験室、だからからだゼミナール、各種親子教室、プラネタリウム学習投影ほか	他機関から突然「子ども向けの講演会（恐竜とか宇宙について）」をやらせてほしいという依頼があった場合に実施
名古屋市東山動植物園	動物園サマースクール、写生大会、3Dハイビジョン上映、動物園友の会、ハイビジョンシアター上映、親子教室、昆虫探検、木の実の工作教室、植物に関する講演会	動物講演会 1回/年、動物園裏側探検ウォーク
名古屋市美術館	夏休み子どもの美術館 期間中に開催	
名古屋城	「名古屋城縁縫教室」親子を対象に夏休みに開催。名古屋城の歴史などについて講習する中で博物館資料についても言及する。名古屋城振興協会主催。	
新美南吉記念館		自然観察会、絵本の読み聞かせ、折り紙教室
東浦町郷土資料館	古代の塩づくり教室	
船橋楽器資料館		学校からの依頼が在れば講演会等

1.名称	9.1.1.	9.1.2.
稻沢市荻須記念美術館	・いなざわとパリがふるさと おぎすたかのり 1999年 ・いつもと違う美術館へいこう 1999年	
岡崎信用金庫資料館		・「おかねの歴史」(パンフレット、平成12年) ・「あいちの地場産業」(書籍、平成12年)
ガスエネルギー館	新エネルギーものがたり (1999年改訂版)	小、中学校の先生向:ガスエネルギー館解説ノート (2000年改訂版) 企業関係者(外国人)向:GAS ENERGY EXHIBIT HALL (2000年改訂版)
刈谷市美術館	1993年開催の「轟内佐斗司の博物学的世界展」で子ども向けのセルフガイドを作成したのがはじめです。昨年には、鑑賞カード(10枚1セット)を作成しました。	
産業技術記念館	①スタディブック「オモシロテクノ」→2000年9月改訂。当館を見学する小学生に配布。当館展示場の案内ガイドではなく、当館を学習の場として活用いただくための参考となる内容のもの。 ②小中学生用リーフレット→学校行事以外での小中学生向けの当館展示場案内リーフレット。1997年制作。	①ガイドブック→1994年制作。当館の展示構成にそって展示内容、展示物全てを紹介した解説書。
醸造「伝承館」	全国味噌連合会等が出している子ども向けの本やマンガによる説明の本	
晴嵐館	競書誌「中道」毎月1回発行	競書誌「中道」毎月1回発行
高浜市やきものの里 かわら美術館	常設展示室用に子ども向けを前提とした瓦の名称を示すチラシを館内で印刷して置いている。	
知多市歴史民俗博物館	子供用パンフレット(平成11年) 「郷土の画人展一小島老鉄・神原鳳章斎・富田古觀一」子供用パンフレット(平成12年)	
でんきの科学館	シュミレーションブック	一般パンフ、ワークシート、科学館ガイド
東海銀行貨幣資料館		パンフレット 日本のお金そのあゆみ(S.58)
東海市立平洲記念館・東 海市立郷土資料館	パンフレット(子ども向け)昭和49年	
徳川美術館	夏休み子ども特別企画、企画展を分かりやすく紹介したワークシート	徳川美術館への招待(毎年2月発刊)
豊田市郷土資料館	・常設展解説 ・民俗資料館解説 内部印刷でそのつど印刷	
トヨタ博物館	「くるまのおはなし」1992年2月 「カーウォッキングガイド」1994年6月 「館内案内リーフレット(子供向)」1989年	「館内案内リーフレット」1989年 ガイドブック 1989年4月 パンフレット 1989年4月 「展示体系」1996年9月 「TOYOTA文化施設ガイド」
豊橋市二川宿本陣資料館	名称なし 平成5年	
名古屋海洋博物館・ 南極観測船ふじ		※一般向けで、小学校高学年～中学生的読解力があれば読むことの出来る内容のものがあります。 ・リーフレット「海」「船」「港」の3部 ・「名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ」「展示案内」 当初からほぼ毎年刊行
名古屋港水族館	かんさつノート(1995)	
名古屋市科学館	・オリエンテーリング用紙(A41枚のもの)・見学ガイド(A41枚のもの)	「あけてごらん科学のとびら」毎年改訂版を発行(有料)
名古屋市博物館	平成7年「夏休み親と子のれきしどうぶつえん」の解説書 平成12年「おもしろやきもの展」の解説書	
名古屋市東山動植物園	動物レストラン 平成9年(1997)	案内パンフレット 東山動植物園
名古屋市美術館	別添(1)の表を参照 平成3年から毎年夏休み子どもの美術館ワークシートほかを作成	上の表にまとめました 開館から「常設展見学のしおり」、刊行年不明「名古屋市美術館周辺の彫刻」、平成8年から「子どもを対象にしたミュージアムガイド」、平成9年から「所蔵作品解説カード」
新美南吉記念館	「ごんぎつねのふるさと」(B4四ツ折のパンフ、文学散歩案内、南吉の紹介等)平成6年	
日本独楽博物館		手作りパンフ 1980年
博物館明治村	博物館明治村ポケットガイドブック 平成5年	博物館明治村ガイドブック 平成5年
碧南海浜水族館・ 碧南市青少年海の科学館	レクチャーコーナーの「レクチャーガイド」～水族館ミニ知識～ 年3回	マリンドリーム(年3回)、年報(年1回)、イメージポスター(年1回)
鳳来町立 長篠城址史跡保存館	長篠城址案内(夏休み研究) 毎年度	

1.名称	11.1.1. 定期的に実施している	11.1.2. 不定期に実施している
古川美術館	こども美術講座 こども絵画コンクール	
鳳来町立鳳来寺山 自然科学博物館		学校の要請に応じて講演会、講習会を実施。
メナード美術館	春・夏休み こども講座	
野外民族博物館 リトルワールド		ジュニア教室、セミナーとして、子どもあるいは家族向けの体験的教室をひらいている

12. 貴館園では、子ども向けの事業で制作された作品を、博物館資料として収集・保管、調査・研究、公開・教育していますか？

「a. している」と回答した8館の具体的な内容

1.名称	12.1.1. 代表的な資料の名称・数量	12.1.2. (1)を制作した事業の名称と実施年
あいち健康の森健康科学 総合センター 健康科学館	エデュケーションスタジオ教材(36テーマ)	エデュケーションスタジオ H10. 6
ガスエネルギー館	映像(レーザディスク)×4 3D×1 地震体験シアター 1基を公開している。	映像「少年自然観察日記」「ガンバレエネルギー」「火と文明」「天然ガスの旅」 3D「地球と人間・エネルギーの将来」
晴嵐館	競書出品作品・手本、展覧会出品作品	競書作品展示(毎月)・全国教育書道展(毎年8月)・中道書初め展(毎年2月)
でんきの科学館	エコリサイクル作品入賞作品の展示、約10点	中部電力株広報部、毎年
東海市立平洲記念館・ 東海市立郷土資料館	中学生の描いた細井平洲(版画)45枚	平成6年
名古屋港水族館	生態ピラミッド図(2)、ゲームで使用するお面、カードなど(数個)	サマースクール、ウインターフェスティバル(1994-)
名古屋市科学館	名古屋タンボポ調査隊	93年、98年
名古屋市東山動植物園	写生大会の絵画	

13. 子どもの博物館(資料)利用に関し、他の博物館等(博物館と同一の目的を有する国の施設を含む)と連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借を実施していますか？

「a. している」と回答した9館の具体的な内容

1.名称	13.1.1. 連絡・協力 関係にある他の博物 館等の名称	13.1.2. (1)の博物 館等との協力・支援 の内容と方法	13.1.3. (1)の博 物館等との協力・ 支援の開始
あいち健康の森健康科学 総合センター 健康科学館	愛知県児童総合センター	展示物の借用	H11年8月に約1ヶ月間
稻沢市荻須記念美術館	あいち子ども体験ミュージアム 事業 ミュージアムキャラバン で((1)、(2)は参加館の記述を 統一して下さい)		2000年～
ガスエネルギー館	東京ガス(株) ガスの科学館、環境 エネルギー館 大阪ガス(株) ガス科学館、姫路 ガスエネルギー館 西部ガス(株) 西部ガスミュージアム	刊行物及び情報の交換	昭和60年(1985)
蟹江町歴史民俗資料館	弥富町、美和町、甚目寺町、歴史 民俗資料館、七宝町郷土資料 館、佐織町歴史民俗資料室、津 島市児童科学館、(大治町、飛島 村、佐屋町社会教育課等)	情報の交換及び資料の相互貸借 等(子どもの博物館利用に限らず 関連事業の情報交換を行って いる)	平成3年
高浜市やきものの里 かわら美術館	刈谷市美術館	情報の交換	平成7年
名古屋市科学館		・事業概要、紀要などの送付(送 付先多数) ・特別展の時の資料借用	
名古屋市東山動植物園	名古屋市科学館、他施設の刊行 物の閲覧	情報及び資料の貸借、他施設と の刊行物の交換	平成2年頃(科学館)、昭 和60年から(刊行物)
名古屋市美術館	愛知県立美術館、三重県立美術 館、滋賀県立近代美術館、刈谷 市美術館、東京国立近代美術館、 東京都現代美術館、広島市現代 美術館、高知県立美術館等	情報交換	平成4年～

1. 名 称	13.1.1.	13.1.2.	13.1.3.
日本独楽博物館	横浜「人形の家」 東京「子どもの城」 名古屋「名古屋市博物館」 岡崎「子ども美術博物館」等	要望があった時、随時。 貸出し、相互ではない。	
古川美術館	名古屋市美術館、愛知県美術館等	情報の交換	1999年3月

14. 貴館園では、子どもをテーマにした事項で、学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を支援していますか？

「a. している」と回答した36館の具体的な内容

1. 名 称	14.1.1. 协 力・支 援 关 係 に 有 る 施 設 の 名 称	14.1.2. (1)の施設と の協力・支援の内容と 方 法	14.1.3. (1)の施 設との協力・支援 の开始时期
愛知県陶磁資料館	県内小中学校	見学の受入、来館者の説明（特に5年生の社会見学）（事前の先生方へのレクチャーも場合により有）	開館以来
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	学校	・健康教育の実施 ・学校の実施する健康教育、総合学習へのサポート	H11.4
渥美町郷土資料館	・町内各小・中学校・渥美町文化会館（文化ホール、図書館） ・渥美町中央公民館	印刷物の掲示及び配布など	・当館開館当初 ・文化会館開館以後
一宮町歴史民俗資料館	町内の小学校	特別展開催時に、授業の一環としての来館	
稻沢市荻須記念美術館	市内、小・中学校	観覧料の減免、来館時の解説	1983年開館以来
犬山市文化史料館 からくり展示館	犬山祭保存会	・犬山祭に関わる内容等について。（犬山祭の歴史、山車等の説明解説、あるいはからくり人形の操作について） ・犬山祭保存会の会員の方に来館していただいて実施する。（時には、学校へ出向いていただいて）	あらかじめ学校等からの要望をおきしておいて、その時間に来館していただけて要望に応えています。
大口町歴史民俗資料館	町内小中学校	学校の授業の一環として、見学に来た児童、生徒に対し説明をする。又、学校へ呼ばれることがある。	開館以来
岡崎信用金庫資料館	資料館を管理している岡崎信用金庫企画調査部では、冊子「あいちの地場産業」を刊行しておりますが、県内の小・中学校にその冊子を無料配布し、特に希望があれば、追加の配布にも応えている。社会科の副読本として利用していただいている。		
蟹江町歴史民俗資料館	町内各小学校（要望があれば、他の学校も）	・小学校の郷土学習の一環で、見学に来る際に要望があれば、展示解説等をする。→小学3年生の社会科の副読本に資料館が紹介されている。 ・学校の授業で活用する目的のために資料の貸出をする。 ・要望があれば学校に出向いて解説を行ったり、民具の使用の仕方の実演を行う。等	昭和53年
刈谷市美術館	市内の小・中学校	鑑賞の授業としての来館とその受け入れ。セルフガイド等に対する助言をいただく。現職教育としてのギャラリートーク。学校への出前授業。	
醸造「伝承館」	武豊町歴史民族資料館、武豊小学校	資料館や小学校の説明より、なお詳しく知りたい人等	かなり以前より
杉本美術館	日本福祉大学等	文化フォーラムの参加	昭和62年～
瀬戸市歴史民俗資料館	市内小学校	社会見学対象施設	
高浜市やきものの里 かわら美術館	市内及び近隣の小・中学校	年1回の絵本展の際に無料券を生徒数分配布している。展示の解説・案内は極力行うようにしている。	
武豊町歴史民俗資料館	小中学校		
知多市歴史民俗博物館	知多市立の小学校	小学校3年生の社会科学習の一環として、当館の見学を実施。	昭和63年
豊田市郷土資料館	学校、公民館	・研究授業の資料貸出し ・公民館講座の実施、講師派遣	

1. 名称	14.1.1.	14.1.2.	14.1.3.
豊田市民芸館	市内小学校、市図書館、市内公民館	各施設への講師派遣	平成9年より
豊橋市自然史博物館	豊橋市内小中学校	出前授業、標本類の貸出、体験学習等の受入、博物館見学時の解説など	開館時（1988年）より
豊橋市美術博物館	市内小中学校	学校での自由選択授業の講師として。（不定期）	6～7年前
豊橋市二川宿本陣資料館	市内小中学校	計画学習における、展示解説及び調査の助言。学芸員等による選択授業での講演	平成3年（開館時より）
名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ	小学校、中学校、生涯学習センター（特定のところはあります）	小・中学校の校外学習（総合学習）等で博物館についての質問や依頼がありました時、説明・レクチャーをしています。	当初より
名古屋市科学館	幼稚園、小・中学校、学会	プラネタリウム学習投影、教育課程学年別の展示品見学の手引冊子を学校へ送付、科学創作コンクール、理科自由研究展、リフレッシュ理科教室（応用物理学会との協力）、トワイライトスクール	昭和35年頃から
名古屋市東山動植物園	不特定団体（PTAなど）自然環境学習コース設置にあたり、小中学校の教員に協力依頼（予定）	動物のお話	昭和35年頃から
名古屋市美術館	学校の美術館見学への支援・協力を実行している。実績については別添（2）を参照 平成6年度 2件 愛知県教育大学付属名古屋中学校2年生ほか、平成9年度 4件 名古屋市立如意小学校5年生ほか、平成10年度 4件 名古屋市立港西小学校5年生ほか、平成11年度 6件 名古屋市造形研究会ほか、平成12年度 12件 岡崎市立竜海中学校1年生ほか	美術館見学前の事前授業で使用する教材の貸出し。見学時に、当館ボランティアによる作品ガイド。	別添（2）を参照して下さい。
名古屋市見晴台考古資料館	名古屋市立御器所小学校、植田小学校、高蔵保育園	学校内での常設展示 市内遺跡出土品の貸出	平成5（1993）年4月
新美南吉記念館	半田市立岩滑小学校	岩滑小の単元学習「南吉記念館の案内人になろう」への情報や会場の提供	平成6年
日本独楽博物館	図書館等	展示物の貸出し	
半田市立博物館	学校	見学	昭和59年度
東浦町郷土資料館	町内小学校	生涯学習出前講座による講座（歴史講座「塩」・東浦町の歴史と文化財）。学校に出向いて講座を行う。内容・進め方等は学校との相談により決定。	1999年11月1日
古川美術館	名古屋市千種区内小学校（東山、高見、田代、見付）	当館主催のこども講座の募集等を協力していただきます	1997年
碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館	学校、図書館		
鳳来町立鳳来寺山自然科学博物館	町内各小学校、中学校	講演会、観察会の実施	以前から
美和町歴史民俗資料館	美和小学校		
メナード美術館	小牧市造形研究会	・春・夏休み期間に開催する展覧会の小学生（低・中・高） ・中学生用ワークシート作成協力 ・参加者への入館料半額免除	1995年度
野外民族博物館 リトルワールド	小、中、高等学校 多数、大学、専門学校も有（協力・支援は） 希望があれば対応という形	質問事項への回答、見学後、見学前に実施 学外授業への対応 など	開館以来

15. 貴館園では、子ども向けの諸事業を実施する際、貴館園が立地する地域の事情を考慮したり、学校教育を援助し得るように留意していますか？

「a. している」と回答した35館の具体的な内容

1. 名称	15.1. 「考慮」「留意」の具体的な内容
愛知県陶磁資料館	・特に「こども美術家」での関連イベントでは、学校のプログラムでは省略されがちな部分に注意し、行っている。 ・「こども美術館」開催にあたって近郊市町村の図工担当教諭の会合に出席し、特に参加をお願いしている。

1.名称	15.1. 「考慮」「留意」の具体的な内容
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	隣接教育委員会との連携
渥美町郷土資料館	・教室などへの参加希望者が一地区にかたまらないように考慮する。 出来る限り学校休業日等に事業を行うなどしている。
一宮市博物館	学校教育の中では成し得ないテーマや内容であることを留意し、現在は平成14年度以降の状況を鑑み、学校の教員との関係を密にするべきであることを社会科担当者などとの話し合いの中では話題にしてきている。『くらしの道具』展では、授業の中で楽しく学ぶことができる解説書を目指し、毎年作成している。
犬山市文化史料館 からくり展示館	地域に伝わる文化を次代を担う子どもたちに少しでも分かりやすく、しかも興味を持つもらうことを考慮し、できうる限り実際に自分で見たり手で触れることができるよう工夫しています。(地域の学校から寄せられる要望の仲立的存在になっています)
衣の民俗館	学校教育に対して…子供の社会探訪に対して時間をかけて当館の解説・理解をさせている。保護者つき・地域内の調査が多い。クラブ活動で自主的に見学を希望する生徒にも快く対応している。
蟹江町歴史民俗資料館	・対象は町内の小学生児童に限っている ・内容については郷土の歴史、民俗、伝統工芸等を取り上げている
かみや美術館	小・中・高の見学は積極的に受け入れている。小・中学生の職場体験も受け入れた。
刈谷市美術館	訪問時期を考慮、近隣4市の小・中学校への案内チラシを配布、教員からの要請にはできるだけ対応するようにしています。
吉良町歴史民俗資料館	学校からの依頼は、地域の史跡、文化財、塩田に関する解説を求めるものが主である。館として学校への積極的な働きかけは行っていないが、解説、体験学習の依頼にはできる限り協力するようにしている。
産業技術記念館	①当館が主催するイベントは地域の子ども達を対象に行っているものが多い。 ②東海3県を中心に学校へ当館活動内容の情報を発信している。 ③当館を校外学習の場として活用(学校教育の援助)いたたくために、先生方よりご意見・ご指導をいただきながら展示面、運営面の改善を推進している。
醸造「伝承館」	子供に対して分かりやすく、パンフレット等は子供向けを用意する。又質問を多く受けるよう、写真等を自由に撮ってもらっている。
杉本美術館	地元の学校の要望等により対応
晴嵐館	各地域の学校・教育委員会との連絡
高浜市やきものの里かわら美術館	今年度より6才未満の子どもにはチャイルドシート着用が義務づけられた。園用のバスを持たない当市では園児は市役所のバスに乗って美術館を訪れることが不可能になった。電車を利用する場合、1クラスの園児を保育士2~3名で誘導してくるのは大変であり、美術館職員(臨時職員)が最寄りの駅まで出向き手伝った。但し、これも双方の負担が大きく、今後の懸案事項となっている。
武豊町歴史民俗資料館	社会教育関係部局よりPRを若干している。
知多市歴史民俗博物館	地域に関係のあるものごとに関する事業を実施する。
東海銀行貨幣資料館	展示表示記述をやさしくしている。
東海市立平洲記念館・ 東海市立郷土資料館	校長会に図る
常滑市立陶芸研究所	技術指導の派遣
豊田市郷土資料館	館までの交通がない学校に対して、バスの確保を検討中
豊田市民芸館	隣接小・中学校との連絡調整を密に取り、講座実施、イベント実施の際、参加日などを決定する
トヨタ博物館	・当館が所在する長久手の主要団体(役所、企業、教育施設等)が定期的に会議を実施。 情報交換や、相互協力を実施。 ・地域交流(子供向け交通安全指導時の走行コースの貸出し等)
豊橋市自然史博物館	第2、第4土曜日の市内小中学生利用の無料制度、第2、第4土曜日を中心とした映写会、展示解説会などを開催
豊橋市二川宿本陣資料館	入館料の免除
名古屋海洋博物館・ 南極観測船ふじ	小学校3、4年生の社会(名古屋港についての歴史・貿易等)・理科(船が浮く原理等)で学習したことを実際に体感できるポートウォッチングを開催、船に乗り海から港を見るという企画です。子供だけではなく、その家族、生涯学習としても広く一般の人を対象としています。
名古屋港水族館	ウミガメ卵掘り出し観察会(館内)、ウミガメ這い出し観察会(館内)、ウミガメ放流会(赤羽根町)
名古屋市博物館	子ども向のやきものの展示をする時、名古屋で焼かれたものを取り上げる。歴史の時間に教科書で習ったものの、実物を見たり、触れたりできるようにしている。(縄文土器、弥生土器など)
名古屋市東山動植物園	動物園内の「世界のメダカ館」にて、メダカの一年のパネル展示など学校教育の教材と正合せるなど
博物館「酢の里」	市内の小学校3年生の社会科教育「働く人びと」を知っていただくために、博物館と工場を見学し、昔の酢造りと今の酢造りを見学して頂いている。
半田市立博物館	郷土に関する資料の展示
東浦町郷土資料館	地元の歴史と関わりのある内容で行い、子どもたちに郷土に親しみ、関心を少しでも持つもらえるよう考慮している。
古橋懷古館	見学者の年令、学年、教科書との関連などにつき考慮して説明する
碧南海浜水族館・ 碧南市青少年海の科学館	市内小学校の校外学習では、市のバスを計画的に利用し、時間的な配慮をしている。
鳳来町立長篠城址史跡保存館	・町内、小、中学生の入館は無料取扱い ・授業、学習研究の求めに応じる
三好町立歴史民俗資料館	当館で行っている郷土芸能伝承活動発表会における出演者が小学生～中学生であるため、開催日を第2土曜日とし、参加を容易たらしめ、各学校への協力を要請している。

17. 貴館園で、子ども向け事業を継続実施あるいは新規実施する際の条件として、何が必要とお感じですか？

1. 名称	17
愛知県陶磁資料館	・図工担当教諭研究会など教員個々の顔のみえるレベルでの連携とその継続 ・子ども一人でも来れる公共交通機関の充実
あいち健康の森健康科学総合センター 健康科学館	学校との綿密な連携 学校週5日制の完全実施に向けて当館が受け皿となり得るよう、魅力ある展示物づくりの整備、事業の見直しと共に、学校教育の中でとりわけ総合学習などで当館の活用を拡大していただけるような幅広いPR等を推進していくこと
渥美町郷土資料館	人員と予算
安城市歴史博物館	子どものために何かをやろうとする意欲、学校等関係施設との連携
一宮市博物館	学校の教員との協力関係、特に若い世代の教員→参加する子どもの確保、宣伝など
一宮町歴史民俗資料館	施設・組の織拡充
一色学びの館	スペース、人員
稻沢市荻須記念美術館	子ども向け事業を行うための予算獲得のための理論づけ（子ども向けに限らず“新規”には裏付けが必要となる） 子どもが参加したくなる内容の企画（子どもは“忙しい”。テレビやゲームを上回る“楽しさ”や“魅力”を美術館が与えられるかどうか）
犬山市文化史料館からくり展示館	・子どもが対象となると、小学生（場合によっては幼児）から中学生までの幅広い年令層を考えねばならないと思います。すると、ある程度段階をふまえた内容を工夫しなければならないかと思う。 ・その他、事業としての必要諸経費の予算化および事業に関わる人材（ある程度専門的な経験を有する）の確保の必要性を感じる。
衣の民俗館	学校教育との関連を密接にすること①学校教員は、博物館および学芸員の実態をよく把握する。特に大切な文化財保存を前提とする資料の扱いについて勉強し、留意すること。②博物館・学芸員は、学校教育のカリキュラムを充分に勉強し理解した上で活動を展開する。実施にあたり、学校教育の良き協力者であり援助者であることを認識する。資料のあるにまかせて演出の独走には充分留意して欲しい。子供の娛樂としての目標であればまた別途考慮して欲しい。
大口町歴史民俗資料館	人、場所、安全、準備のための十分な時間の確保
大須文庫（真福寺文庫）	設備の充実と人的問題
岡崎市美術博物館	・常設展示 ・ボランティア、アルバイト等の人員 ・多目的に利用できる屋内外の場所 ・館員の子どもに対する事業の協力、意識、熱意 ・交通の便（子どもだけでも来館できるように） ・市内での子ども向け事業の各施設における整合性、位置づけ、協力（連携）
岡崎信用金庫資料館	小・中学校の先生方に、県内の博物館の展示内容を知ってもらう必要があると思います。社会見学等で子供の来館がこれから増えてくるようであれば、予算申請などをして、子供にとって見やすい理解しやすいスペース作りにしていきたいと考えております。
ガスエネルギー館	学校、子供会など、小中学生対象のグループへの見学PR
蟹江町歴史民俗資料館	スタッフの充実、子ども（子どもの親）に興味をひかせる内容の企画
蒲郡市博物館	来館する子どもの大半が市内在住である為、学校教育との連携が重要
窯のある広場資料館・世界のタイル博物館	新しい視聴覚教材、動態展示、解説文の子ども向け化（大文字、ふりがななど）
刈谷市美術館	・予算と人員の確保 ・成果を必ずまとめ、公開していくことが必要 ・市役所内部への普及活動が必要 ・運営を踏まえた評価を行い、今後に生かしていく姿勢、判断が必要
吉良町歴史民俗資料館	一般向けの施設、展示も不充分なのが現状であり、子供のみを対象とする事業を行うのは難しい。
國盛 酒の文化館	成人を対象にした施設の為子供向け事業は考慮せず。
国宝犬山城	本来、犬山城は国宝建物であるため、博物館方式の資料展示等が不可能となっている
桜ヶ丘ミュージアム	子供向け事業を実施するにあたり、そのニーズ・広報などあらゆる場面で、学校教育との連携が必要だと思います。
産業技術記念館	学校と博物館の連携強化と情報交換の活発化。・常に学校サイドの要望、ニーズ（校外学習の狙い、目的）が把握できる体制づくりが必要。
設楽町奥三河郷土館	・展示場所とその説明 ・会場 ・子どもたちのニーズ
七宝町郷土資料館	学校との相互協力
醸造「伝承館」	来館者の調べようとする熱意と態度とマナー
史料館八丁味噌の郷	当館では、特に子どもだけを特別に扱っておりません。八丁味噌という食品は、大人も子どももふくめた日常生活の中にとけ込んでいるため、大人と子どもを区別することは意味がありません。子どもに味噌の歴史、とくに味噌の社会的役割を理解させることは大切ですが、それは同時に大人に対しても言えることであります。
晴嵐館	親の関心、教師・指導者の助言
瀬戸市歴史民俗資料館	予算とノウハウ

1. 名 称	17
高浜市やきものの里 かわら美術館	学校との連携。今、学校現場でも“体験を軸にした授業づくり”をどのように進めるか模索段階のようなので、できるだけ早くこちらの方から希望と計画を聞きだし、協力できることを提案したい。子ども1人でも来たい気持にさせる内容の研究。学校からの団体は逆にもうあまり考えられないかも。
武豊町歴史民俗資料館	当館開設以来、子ども向け事業は、郷土のことを知ることの手段として、古老、中年層の人々を交えて、世代の超えた交流の中で、「むかし」がそうであったように、伝えられ、知り、伝えていく手法で行っている。それぞれのテーマは、継続されるものもあれば、単発事業であったりもする。その判断は、行事を進めていく中での子どもの様子をつぶさに観察していくことで理解されると考える。
知多市歴史民俗博物館	学校との連携 子どものニーズや動向の把握とそれに沿った事業の企画 保護者に対する博物館事業の有用性についての啓発 安全な交通手段や経路の確保
知立市歴史民俗資料館	職員間の意志の疎通および協力体制
津島児童科学館	専門員、予算
でんきの科学館	触れて参加、体験できる館 本物、実物の展示
東栄町立博物館・民芸館・花祭会館	子ども対象の施設へと変えなければ無理がある。隣接している民俗民芸館や花祭会館への子ども達の社会見学のような学習はあるがそこまでに留まっている。
東海銀行貨幣資料館	展示全体の再構築が必要（順々に改良しているが…）
東海市立平洲記念館・ 東海市立郷土資料館	スタッフ
徳川美術館	子どもが興味を持つ内容とタイトル、事業の継続。
常滑市民俗資料館	スタッフとスペース、そして予算。
豊田市郷土資料館	担当者のやる気（現在の通常業務の体制にはくみこまれていないため、担当者次第で事業を実施しなくてもすんでもしまうため）
豊田市民芸館	継続的に実施していくこと。他施設（小・中学校、公民館）が実施する子ども向け事業に対してサポートしていく。又は、本館が実施するイベントに対しても他施設、外部講師、ボランティアの協力を呼びかける。
トヨタ博物館	・学校や地域内教育施設の協力や情報交換が必要と考える。 ・交通機関の整備。
豊橋市美術博物館	主たる担当者あるいは担当係、当該事業向けの講座室
長久手町郷土資料室	学校教育との連携、子どもの輸送・移動手段
名古屋海洋博物館・ 南極観測船ふじ	予算の問題とスタッフの確保
名古屋港水族館	人材育成（専属職員）、施設の整備
名古屋市科学館	広報（テーマのつけ方や広報手段）
名古屋市博物館	子ども向け事業に関心のあるスタッフがいること。
名古屋市東山動植物園	サマースクールなど受講希望者が過多となり抽選で実施している状況である。体験型の事業が実施できるような施設及びスタッフの充実。学校等の教育関連組織との連携強化
名古屋市美術館	〈継続実施のための条件〉・指導者の育成（ガイドボランティア→ミュージアムティーチャーへ）（地元若手アーチスト・意欲ある教師→ワークショップ講師）・学校の美術館利用受け入れのシステム化（学芸員の個人的な取り組み→美術館全体の活動へ、見学メニューの作成、教材づくり等、教師の協力を得て作成）・家庭・地域・学校等多方面の博物館施設の利用を促す（家庭→親向けの講座の開設・地域→学童保育・トワイライトスクール。他の子ども向け施設との連携、学校→教師とのネットワーク） 〈新規実施する際の条件〉・子どもを来館者層の1つとして、いかに位置づけるかを明確にする。・現在の子どもを取りまく教育的な環境の中で、博物館施設として何をすべきか、何ができるかを自問し、明確にする必要がある。・以上2つのモチベーションを持ちながら、それぞれの博物館施設の特色を踏まえれば、具体的に実施すべき事業が浮かび上がると思われる。
名古屋ポストン美術館	子ども向けカタログのコーディネーター又は実際の指導ができるスタッフが必要
新美南吉記念館	担当者の配置、まずは人の確保
日本独楽博物館	文化的価値を強調しすぎない 実際に遊ばせる（体験重視）
日本モンキーセンター	博物館としての基本理念の確立、人員の確保、地元との強力な結びつき
博物館「酢の里」	1学校とのつながり、2子ども向けの展示品、3子ども向けのパンフレット
博物館明治村	当館が現在置かれた状況ではかなり難しいが、豊富な人材
春日町中央公民館郷土資料室	長期継続を見据えた計画と協力体制
東浦町郷土資料館	開館してまだ日も浅く、まだ十分に資料館の存在が知られていないため、まずは資料館での活動の内容や利用方法を各学校をはじめ町内に対してPRし、認知してもらう必要があると思われる。
尾西市三岸節子記念美術館	経験、職員増員、各学校など関係との連携
古川美術館	他館でどのような企画がなされているかの情報交換をしつつ、当館で何ができるかを考えていく。こどもたちに美術館として何を問い合わせ続けていけるかを常に忘れず企画立案。地域の小学校との連携は重要。
古橋懐古館	目で視、耳で聴き、手で触り、又体験できるような展示方法。資料を子どもに興味をもたせるように、感動を與える解説。低廉な入館料。
碧南海浜水族館・ 碧南市青少年海の科学館	担当職員数の確保
三好町立歴史民俗資料館	職員の意識改革

18. その他、設問項目以外で特記すべき事項、及びご意見がございましたらご記入下さい。

1. 名称	18
愛知芸術文化センター 愛知県美術館	企画展ごとに小・中・高校の先生のための説明・鑑賞会を行ない、子どもへの周知や指導をはかっています。・1992年の開館時は、所蔵作品観覧料金を小学校未就学者のみ免除でしたが、翌1993年度より小中学生も免除とし、その広報にも努めています。
一宮市博物館	市町村の大きさによって、協力関係を学校と結びやすい、結びにくいがあると思うが、当市は毎年行う展示（くらしと道具展）に小学校3年生は学校単位で見にくることができるよう、カリキュラムとして組まれ、バスの予算も毎年ついている。その意味でも、今後の事業展開には明るい見通しをもっている。
衣の民俗館	生きた博物館であることが大切であることは述べるまでもないが、余り多彩な行事が実施されると、館の特色が薄れると思う。勿論、見学者・観覧者の興味、心の安らぎも必要であるが、子どもの場合、如何に静かに行儀良く観察するかというマナーの教育が先決である。悪く言えば、遊園地化？にも注意したい。
大須文庫（真福寺文庫）	収蔵品が古文書ということもあります。子供向けの公開は難しいものがあると考えています。
ガスエネルギー館	科学館であるので回答しづらい面がありますが、資料と展示物におきかえて回答してあります。
かみや美術館	「美術作品に触れる年令がはやければはやいほど成人してからも美術館に通う機会が増える」というデータが示すようにはやい時期に美術品に触れる機会をなるべく増やしていく必要はあると思う。
国宝犬山城	犬山城は博物館ではないため、諸アンケートの対象とはならない。
桜ヶ丘ミュージアム	・子供向けの企画展は実施したことがあります。・学校・子供会などに出前講座は実施している。 ・学校等へ資料の貸出しあげている。・来館した学校の団体に子ども向けの説明はしている。
産業技術記念館	各館とも教育制度改革（総合的学習）に対応すべく環境整備を推進しているので、学校サイドも積極的に県内の博物館や地域産業を見学、利用していただきたいと考えます。
杉本美術館	毎年小中学生を対象に絵のコンクールを実施
高浜市やきものの里 かわら美術館	「総合的な学習の時間」を目指してか、当館では市外の小学校からの陶芸体験の申込や見学可能な瓦工場の紹介を求める問合せが増えた。すべてに対応するためには、こちらにも相当な準備と柔軟な姿勢が必要となるだろう。逆に、市内の子ども達ができるだけ優先的に受け入れる体勢づくりも考えなくてはならないと思う。
武豊町歴史民俗資料館	楽しみの中で発見する喜びも大切であるが、つらい中での喜びも必要と考えている。歴民系資料館では、地域教育をなうこともあり、地域住民とともに子どもと接しながら、豊かな人格形成をつくりあげるなかでその一端をなっている。
豊丘郷土資料館・ 美浜ナチュラル村	ご参考になりませんぬ状況ですが、今後の課題の所です。
トヨタ博物館	2000年に愛博協が実施している「子どもミュージアムキャラバン」は文部省の費用等の援助はもとより、各所属の館を越えた学芸員・職員の活動に情報交換や連帯感増加等の効果が見られる。
名古屋市東山動植物園	動物園としては回答しにくい設問でした
名古屋城	名古屋城では博物館相当施設である天守閣内では特に子ども向けの資料収集や展示・案内などを実施していないが、子どもを含め観覧者にわかりやすい展示を心がけている。また、毎年この日に実施する子どもの鎧試着会は、子どもたちに城の歴史や美術工芸品に興味をもってもらう機会となっている。この他名古屋城の催しとしては春・秋に写生会があり、優秀作品は天守閣地階に展示する。
日本モンキーセンター	動物園という性格上、子供にかなり焦点があたっているはずなのに実際には大人向けの感じが強いのはなぜだろうか。以前はモンキー友の会の例会会員が子供対象だったので自然觀察例会等をやっていましたが、2年前から人手が不足して休会となりました。
尾西市三岸節子記念美術館	子どもを含めた若い世代を対象とし、実験的な意味合いも含め、活動分野を広められればと思います。しかしながら、現状においては、知識・経験不足と職員数の少ないこともあります。但し、希望としては大いにあるので、今後の参考のためにも情報収集など地道に将来のためにとは思います。
美術の森	当館は子ども向けの美術館ではありませんが、子どもたちにもっと美術品に親しんでもらうために年に1回クリスマスイベントを開き、地元の子どもたちを美術館に招待しています。また、入館した子どもたちには、学習に役立つよう、中国歴史替え歌の楽譜を渡し、館内では年齢にあつた説明をするよう心がけています。
古橋懐古館	当館の収蔵品、展示品は、維新人、国学者、先覚者等の遠景を主体とし、戦後の歴史教育の変化により、現代の子ども達には馴染みが少なく、子どもの入館者は極めて少なく、中高年向け、或いは趣味人の生涯学習の施設として活用されている。ただ、子供達にとつても明治維新时期の人々の高い志と活動を味わってもらいたいし、又、民具学を通して地域の先人達の苦心、生活の知恵などを感得してもらえればと考えている。当館で子供達に一番人気のあるのは、池の大鰐である。
碧南海浜水族館・ 碧南市青少年海の科学館	「総合的学習の時間」の開設にともない、班や個人での訪問や体験依頼の数が2000年になって激増している。今後も単発的、少人数の講義解説依頼が増加すると思われるが、日常業務にも大きく影響してきている。そのため、対応する（できる）職員の数の確保と増加を考えいかなくてはならない。
御園高原自然学習村	展示中心でなく、望遠を専用使用する体験学習ですから、他に仲間がない

# 子ども向け事業実態調査 2

「あいち子ども体験ミュージアム事業子ども向け事業実態調査アンケート」結果分析について  
高浜市やきものの里かわら美術館●橋本久美

このアンケートでは、b.「していない」とした館園が今後計画・希望する内容も記入欄を設けて回答を促した。本報告書には掲載されないが、ここではその回答もふまえての分析としている。

## 1 子どもの利用を前提とした資料の収集・保管・活用の現状

### (1) 収集・保管 [設問NO.3参照]

「していない」館園が79%と圧倒的に多い。同種複数の収蔵が比較的可能な資料を持つ博物館や動物園に比べ、絵画作品を中心とした美術館には例がみられず、b-cとした館園の中には大人と子どもを区別する必要性を感じないという意見もあった。確かに「鑑賞」という視点から考えれば区別は不要であろうと考えられる。回答b-bの美術館・博物館は展示の解説補助に適した、実演・体験可能な資料の補充を望んではいるが、現時点では収蔵資料の中に適したものがあれば、それを用いる姿勢を見せている。

### (2) 展示 [設問NO.4, 8参照]

NO.4で「子ども向けに博物館資料を展示している」と答えた館園が34%となり、全体の1/3強の実施率であった。館園の特色を活かせる常設展を使用する形が多い。夏休みを利用しての開催や一宮市博物館のように小学生の授業内容の進行に会期をあわせた展示で実物を紹介する機会を設けている館もみられる。しかし、結果的には展示を行っていないし計画もないというところが大変多い。

また、NO.8では「子ども向けに資料や展示についての技術的研究は特にしていない」という館が92%を占めている。NO.4の結果と照らし合わせると、展示を行うことと、その研究や成果の発表とはなかなか結びつかないのが現実であろう。

### (3) 館外での活用 [設問NO.5参照]

実施しているのは4館のみ。県内最大規模の美術館愛知県美術館の『移動美術館』他。b-bとした館園でも『出張展示』『出張教室』などが計画・希望としてあがってはいるが、b-c「計画・希望ともになし」が全体の中で78%を占めている。人員・資料ともに十分用意のできる館園以外には実現が難しい事業でもあり、実施率が今回のアンケート全体の中で最も低かった設問であった。

### (4) 利用に関する助言等 [設問NO.6, 16参照]

NO.6の結果から、常設展示、ビデオコーナー、触れる展示物設置の他、第2・4土曜日は子どもに無料開放、夏休み子ども向け企画など、実施している館園が39%であった。ここで子どもの団体観覧時の解説案内が実施例としてあげられたが、これについてはb.「していない」と回答した館園の中にも実施例がみられ、要望があればどの館園も当然応じていると考えられる。しかし、NO.16で子どもの利用に関する専門窓口はb.「ない」という回答が83%となった。現状では、はっきりとした担当を決めず、意識のある職員が自発的に行う、あるいは展覧会の担当者が行うという形が一般的であろう。明確な窓口化がなされないことで出来ることが限られてくる。NO.6の問い合わせに対し

60%の館が利用の助言・説明等を「していない」と回答したのはそこから波及する事象の一つと推測される。

以上(1)～(4)から、大半の館園で「子どもの利用」を前提とした資料の収集・保管・活用については、意識はしているが実際に区別しているところは少ないという状況が読み取れる。

## 2 子どものための設備とその活用の現状 [設問NO.7, 11, 12参照]

NO.7の結果から、すべてが一般と共有であるが22%の館園が学習室、図書室、工作室などを持つことがわかった。NO.11で「子ども向けに講習会や映写会を行なっている」と回答した34件の活動内容をみても、やはり専用設備や部屋をもっていればそれを使っての継続的な活動が可能である。また、NO.12では「子ども向け事業で制作した作品を博物館資料として収集・保管や公開を行なっている」館園が8件あるが、教材としてつくったもの、映像、ゲーム用として作ったものといった、使いまわしが考えられる資料の保管と、入賞作品等成果物としての保管の2種類に分けられる。b-cとしたところは全体の87%と高く、収蔵スペースの問題他、保存・管理にかかる諸問題によるといえよう。結局はどこもスペース・設備を必要としているということであろう。

## 3 子どもに向けての情報提供の現状 [設問NO.9, 10参照]

NO.9では子ども向けのチラシ・リーフレット・ワークシート・かんさつノートなどの作成があげられた。現時点で子ども向けのものを配布している館園は28%であったが、bの中でもすでにあるものに子どもに分かりやすく作り直したものを見たところは全体の64%を占めている。結局はどこもスペース・設備を必要としているといえよう。

またNO.10で問われたホームページの開設は全設問中最も実施率が高く49%であったが、これはa-c「子ども向けのコンテンツを設ける計画はない」という回答がその中の64%を占め、子ども向けの事業の実施率とは言い切れない面を持つ。またbと回答した現時点で開設していない館園の内72%が今後もホームページ自体開設する計画はないという結果となった。

1や2の結果から、子どもが利用する資料や設備が用意されていない館園にとっては、あえて子どもを対象とした情報提供をするのもなかなか難しいものがあるだろう。また、ホームページ開設には新しい知識や予算が必要となり、効果は期待できても二の足を踏んでしまう館園も多いのではないだろうか。さらに、ネット上の情報に満足して実際館園には足を運ばないといった現象も危惧されている。

また、この子どもへの情報提供の実態は、次の4に見る他組織との協力体制の現状にも繋がっている。

## 4 子ども向け事業のための他組織との協力体制の現状 [設問NO.13, 14, 15参照]

NO.13の他の博物館等との協力についての設問は、どこまでを相互協力とするのか目安をはっきりさせていなかったためか、

相互としつつも一方通行的な回答となっている場合がある。ただ、bとした館園からもこのような地域を越えた協力を望む声は多く、今後の課題の一つであろう。

NO.14の学校や図書館などとの協力や支援関係について、実施しているのは公立館を中心に36館。各市町村の地域に密着した活動展開が伺われる。対象はエリア内の小中学校がほとんどで、これは教育委員会に属する場合が多いことから必然的と思われる。内容は『来館時の案内と解説』『講師として職員を派遣』が中心。NO.5やNO.6での回答に共通している。また、特定の学校と継続的な協力関係にある場合は『出前講座』『資料の貸し出し』など、より密接な協力態勢となっている。この他ワークシートの作成援助を依頼するなど研究会団体との交流もみられる。いうなれば1の(4)「利用に関する助言等」という設問で回答された内容が、より充実した形でおかつ定期的・継続的に行われているという例が多いようだ。

NO.15の「子ども向け諸事業開催時に留意していること」については無料観覧、地域の歴史や文化を掘り下げる、交通の便を考えるなど。[完全学校週5日制][総合的な学習の時間]の施行を控えて学校等への働きかけを意識している点では公・私立、館の性質を問わず共通しているが、それに対しての具体的な動きはやはり各館園様々である。

他組織との協力はシステムの違いなどから体制づくりは易しいことではないが、今後の展開にむけて重要な項目であるという認識は強いようだ。

## 5 子ども向け事業の継続・新規実施に必要と考えること [設問NO.17参照]

学校との協力・使用できるスペース・人員と人材（職員の意識改革を含む）・機材・子どもの確保（参加PR、子どものニーズをとらえる）・予算・ノウハウ・自治体内の他施設との協力体制・交通・情報交換（博物館相互の）・館の特色を活かした企画を心がけるなどの回答があったが、これについては後の浅野氏による「課題と展望」に委ねることとした。

## 6まとめ

総合してみると以下のことが明らかになってくる。

まず窓口がないことから、子ども向け事業の必要性は語られても、計画や行動一切が今一歩踏み出せない状況に置かれてしまう。当然その状態では人(人数、知識を持つ人材)・予算が整備されないことから、行動を起こそうという意思を持った担当者の負担が大きくなり、展示を大きく作り変える、あるいは新規に企画するというよりは、すでにあるものに多少手を加えることで解決するという傾向が見え、解説書の作成などで子どもたちに自己学習を促す形をとるようになるのであろう(念のため書き添えるが、決してそれが不十分な対応ということではない)。いつも時間がないことを嘆きつつ止まることなく動いていく博物館・美術館の仕事の性質上、あるいは、現状のまま子ども向けの諸事業が内部的に「余剰業務」として捉えられている限り

は、子どもに対して有益な展示のあり方を研究し、その成果として子ども向けの展覧会を作り、それを報告書にまとめるなどということ自体がなかなか困難なのである。私自身も、今回のアンケートを記入しながら、改めて子ども向けの事業についての自館の実際を考えさせられた一人だった。

今回は博物館・美術館・資料館・動物園・科学館・・・という性質も事情も異なる館園に協力を求めたため、中にはアンケートの意図が理解しづらいという回答もみられたし、数字では表せないのでないかという部分もあった。結果からみて、「子どもの利用に向けての活動や受け入れ態勢についての必要性は感じるけれどもなかなか納得いく形での実現に到らない」というのが愛知県内における大抵の館園の現状であろう。ただ、中には担当窓口を持ち常に子どもを念頭に置いた活動を展開している館園も存在するし、逆に、あえて子ども向けの活動という名目のもとにはなくとも、当然のつとめとして地道に継続的に行っていくことで後に結実する可能性を感じさせる実例もある。温度差はあるが、ゆっくりと大人と子どもの共存の方法が模索され始めた変動期にあると言えるのではないだろうか。

# これからの子どもと博物館 - その課題と展望

名古屋市博物館●浅野弘子

アンケート結果と、あいち子どもミュージアムキャラバンの実施を通して得られた成果については、ここで改めて繰り返すまでもないかもしれない。それでも、偏った所見ではあるが、若干の課題と展望を述べてみたい。

## ●課題—今後必要だと思われること

### 1 人材の確保（スタッフ）

#### (1) 「専属学芸員」

アンケートの回答では、具体的に子ども向け事業に対する知識と経験を持つ専門の学芸員、あるいは専属学芸員を確保することの必要性が訴えられていた。確かに子ども向け事業の開催には膨大な知識と労力が伴うことを思えば、切実な問題である。特に、既に子ども向け事業が組織化されている館園と、そうでない館園では、その専門・専属窓口としての要員が確保できるか否かで、各段の差が出てくるであろう。

しかし、これらの事業或いは活動の必要性を学芸員を感じている時点で、誰もがこの第一の人材になりうるを考える。逆にいえば、現状で子ども向け事業が「余剰」と位置付けられている館園については、館内外に必要性の認識を広げていくことが、自らの人材育成にもなり、結果的に事業の組織化につながってゆくのではないか。

#### (2) ボランティア・臨時職員など補助要員

これらの補助要員は、人材により強力なバックアップや推進力になりうる。そのためには人選と交流が不可欠であり、重要なポイントとなってこよう。各館園同士の情報交換によってよりよい人材を得るきっかけが生まれれば良いと思う。また、館園が積極的に事業を通じて子どもの利用をアピールすることが、外部からの理解者・協力者としての補助要員（助っ人）を生むことにつながるとも考えられる。

#### (3) アドバイザー

専門的な見地、或いは子どもを取り巻く環境について助言・指導を与えられる「外部助言者」の存在が、私達学芸員が現在もっとも欲しているものではないか。そしてそれは専門家＝研究者に限定されるものではなく、学校教師・保護者・または子ども自身も、博物館の活動についての外部からの発言・助言者になりうるものと考える。こうした助言・指導なしに独立して子ども向け事業を行っていくことは、事業をイベント化させてしまう危険を持つ。つねに外部からの評価のフィードバックによって活動を行うことの必要性は、子ども向け事業にとどまらずすべてについて言えることだが、ここでは前述のような「外部助言者」の存在が、より必要であると思われる。

### 2 理論と技術

#### (1) 独自の構想（コンセプト）

理論と大げさに書くが、各自の館園をとりまく子どもの目に立った時に、何をなすべきか。この問題意識からすべてが始ま

るのでないだろうか。直接子どもを対象としていない施設でも、将来の来館者・又は各館園の良き理解者をはぐくむという狙いもあって然るべきだと思う。そして、各館園の個性を活かした構想を心がけるべきであろう。この意味で、子ども向け事業開催にあたっての構想に伴う理論は、各館園の数だけあるとも言えよう。

重要なのは、各館園同士でそれらを相互評価したり、アドバイスを交換したりする機会を持つことだと考える。ミュージアムキャラバンではひとつのテーマに複数施設・他分野の学芸員がかかわることで、この構想が格段に深められた。

#### (2) 方法論（構想をいかに伝えていくか）

同じ展示資料・同じ解説を目にもしても、子どもと大人とでは意識する次元が異なる。勿論、大人同士であっても感覚や意識はずいぶん異なるが、前提となる知識の量や目線、来館環境など、考慮すればより理解が深まるものであれば、工夫していくべきであろう。個々の学芸員の工夫が第一であることは確かだが、さまざまな子どものニーズに応じた企画を行なうには、具体的な指導者とまでいかなくても、その方法を議論する場、情報提供する場や人間が必要であろう。

アンケートの回答の中でも、事業の「子どもの成長度によって、ある程度段階をふまえた内容を工夫する」ことの難しさと重要性が指摘されていた。このような具体的な方法については試行錯誤が不可欠だが、気軽に相談ができる館園同士の関係があれば事業の推進力は大きくなると考えている。

### 3 ハード面

#### (1) 予算の確保

予算に関しては、「余剰事業」としてでない明確な事業の位置付けを行なっていくための、館園自体の意識改革が必要となろう。前述したが、子ども向け事業は「余剰」では到底おさまらない膨大な労力を要するものであり、現在各館園に押し寄せておりであろう「効率化」「対費用効果」の波には逆行すると映るかもしれない。しかし各館園がこの時代で率いていかねばならない「波」は必ずあるはずであり、それを見出すための活動を行なっていくことこそが必要なのである。

#### (2) スペース・資料・教材

新たに絶対必要なものではないが、事業の積極的位置付けのためには確保できるに越したことはない。しかし可能な範囲で実行している館園は多数ある。ワークシート・解説書・常設展でできる講座や教室の企画・ホームページの活用など。特にホームページは、今後大いに活用できる方法であり、試行錯誤を重ねて理想的な利用形態を模索すべきであろう。その場合に、自発的な「調べ学習」や「来館」へつながるような、ネット上で終わらない利用へ導くことが課題となろう。また資料についても、さまざまな意味で既存のものを「子ども向け資料」化する難しさなどが伴うが、まずは「一般資料+α」といった柔軟な位置付けから始めていくのも一つの方法と感じる。

## ●展望—今後の活動に向けて

### 1 イベント化への危惧について

このことについては、「子ども向け事業」の必要性をどれだけ感じているかが、分岐点になるのではないだろうか。アンケート等では、各館園がそれぞれ抱える地域や施設の事情などから、それに伴う「子ども向け事業」の必要度を垣間見ることもできたように思う。事業に対するお互いの情報交換は必要だが、自館に必要なものを見極めたうえでの企画なら、先ずは実行に動き、その結果を還元してさらに内容を改善していくことが大切であろう。その館園だからこそできる体験・経験・感動を、一番知っているのは各個の学芸員のはずである。「これを伝えたい!」「どうやったら目の前の子どもが何かを『発見』してくれるだろうか」という素朴だが地道な熱意が、成功に繋がると思うのであって、他館の事例に「誘発される」域の出ない事業では、目的意識の薄さから「イベント化」へ流れる危険があると考える。逆にこの目的意識さえ明確であれば、小さな事業でも継続でき、継続していくことによって事業の組織化・固定化につなげてゆけるのではないか。

### 2 他施設・他組織などとの協力体制

学校をはじめ、関連諸施設との協力の必要性については、すでにアンケートの結果から多くの館園の問題意識にあることがわかる。実際に現在でも各館園毎で協力体制の試みがなされているが、あと一步踏み出した積極的連携が求められている。学校側との意識の差や具体的な交通手段・館園組織の問題など、課題は多い。しかし大切なのは、学校や他施設からの要求や依頼に応じる姿勢のみでなく、そのニーズ（「総合的な学習の時間」「生涯学習」など）を感じとって、逆に博物館園の方から利用法をアピールできる体制をつくることであろう。

隣接地域や専門分野で共通の環境を持つ自治体同士など、複数館が連携した合同事業を企画し、単独館ではなしえない活動を行なっていく機会を持つことは、以前ではかなり難しいことであった。確かに今回のキャラバンも、報告にあるとおり連携体制には大きな課題を残している。しかし、こうした試みは今後も方法を模索しながら繰り返していくべきだと考える。

## ●まとめ

アンケート結果を分析する過程で、実態として子ども向け事業を必要と感じている館とそうでない館があり、各館園の子ども向け事業に対するとらえ方も様々だと感じた。一概にそれを括り込むのは誤りだし、すべての館園が子ども向け事業に同等の仕事量を傾けられることは勿論ない。ただ、アンケートの中で「事業や活動を希望しているが実現しえない」と回答している館園が、どうすれば一步踏み出せるか。一步が踏み出せる環境をつくりだせるかどうかが重要なのではないかと感じている。

ところで、ここまで述べてきたように、子ども向け事業に必要なのは人材と予算（ハード）の、2大ハードルのクリアであることは繰り返すまでもない。しかし、今回のキャラバンに参加した各員の参加記などから伺えるのは、子どもそのものを見つめる視線の「熟さ」というか、温かさであったように思う。子どものニーズを冷静に観察しながら、熱意を忘れない。そして子どもから学ぶものも沢山あるのだと、参加記は強烈に伝えてくれている。それら子どもから学ぶこと、「ヒト」同士のコミュニケーションといったものは、近い将来博物館園にとって「余剰」ではなく、「必要」なものになっていくのではないだろうか。

現在、博物館園をとりまく環境は刻一刻と変化している。その中で、学校や子どもが博物館園に向けるまなざしも変わっていくだろう。館の分野や公立・市立などの枠を越えて、今後より多くの館園が協力体制で結ばれることを希望したい。そのため、人間関係としての学芸員相互のつながりを、さらに広げていけるよう、研究会として活動していくべきと考えている。

# 参 加 記

## 名古屋市博物館●浅野 弘子

私が5つのキャラバンのうち、「どろんこやきもの探検隊」の企画に参加したのは、自分が勤務している館でも、夏休みに子どもを対象とした野焼きを行っていたからだった。ただ、そこでは博物館という性質上、野焼きは土器の再現に近い意味をもち、原始の生活の一端を再現するという、歴史学習的ねらいが大きかったと思う。

しかし今回の「探検隊」は、粘土を使って自由にオリジナルの作品を作る、そしてその制作を通じてやきものの特性・特徴・文化を感じてもらうことが目的である。頭ではわかっていたのだが、実際同じ野焼きでもあまりの感覚の違いが、とても新鮮だった。それと同時に、一つの事業が、コンセプト次第でいくらでも参加者への印象を変えられるのだとも思った。オリジナルの事業を企画するのも大切だが、やはり重要なのは内容なのだと今更ながらに感じた。

キャラバン参加で感じたのは、参加者の参加形態についてである。今回保護者同伴と子どものみとの2通りの経験ができたが、それぞれの良さと改善点をつかむことができた。子どものみの場合は、全員に目を行き届かせるのに苦労したが、子どもたち同士の交流が生まれたのは良いことだったと思う。個人的には、博物館での事業が子どもにとって「資料とその背景に生きる人々」との交流だけでなく、「博物館に集う人々」との交流の場になることも目指したいし、子どもだけでなく一般の利用者にとってもそういう場でありたいと思う。

また、学校教育との関係について。今回のキャラバンは主に「学校でできないこと」を行ったというイメージがある。「探検隊」担当の一人である佐藤氏によれば「探検隊」の準備過程でも、「やきものに親しむ」ことを目指している学校の事業が、逆に子どもたちに強制というマイナスの記憶を植えつけていたりする状況が見えるという。子どもたちにとっては未だ「特別な場」である博物館にとって、「日常の場」であるはずの学校での事業がこんな結果になってしまるのは、とても残念であり、勿体ない思いがする。まだまだ博物館は「子どものために」やれることがたくさんあるはずだし、これからは博物館に「親しむ」度合いが一番少ないと思われる中学生・高校生も視野に入れた事業を考えていくことも必要なのではなかと考えている。

所属館名●名古屋市博物館

専門分野●考古学

過去に行った子ども向け企画●

1998年 名古屋市博物館歴史教室小学生クラス「布織りにチャレンジ！」ほか

## 岡崎市美術博物館●天野 幸枝

私の所属館は平成8年開館で、子ども向け企画などのノウハウもなく、しかし、何かしたいという気持ちがあり研究会に参加した。今回の企画で、愛知県博物館協会加盟館の子ども向け企画等を実施している先進館からいろいろと学ぶことができ、また参加者の生の反応など感じることができたのは大きな収穫であった。

### <焼く・煮る・炊くは食の基本>

4日間にわたる企画で、内容も他のキャラバン同様、盛りだくさんであったこのキャラバンでは、植物という自然科学の分野と共に実施できたのがとても意義深いと思う。また、ドングリを探集した場所が当館裏の健康の森であったため、改めて、身近な場所に数種類のドングリの木があることも知ることができた。そして、野焼きも目にすることは初めてで、経験をしなければ語れない、机上だけでは得ることのできない体験を参加者と共に学ばせてもらったキャラバンである。

### <編む・織る！縄文・弥生の布！>

織りに関しては、岡崎は三河木綿の地であり、取り組んでいかなくてはならない課題であるため参加を希望した。このキャラバンも、年末年始を挟んだ長期企画であり、参加者は大変であったと思う。しかも、藤橋村にて各自で採集したカラムシから糸を作製するという宿題付きであった（しかし、参加者は皆率先してこの宿題をやってきていた）。また、カラムシの採集に藤橋村まで行ったことで、口頭では伝えられない自然環境の持つ力を改めて感じた。

### <これからの子どもと博物館について>

核家族社会であり地域のつながりが希薄な現代では、文化や技術の伝承が途絶えてきており、また、世間にあふれる情報量の増大とともに文化の画一化が進んでいる。だからこそ地域の見直しが呼ばれている。そこで博物館が地域の館として、地元の伝統・文化を伝え、世代間の橋渡しをしていく役割を期待されているのではないかと思う。

● ●

所属館名●岡崎市美術博物館  
専門分野●民俗学  
過去に行った子ども向け企画●  
平成12年度  
岡崎市郷土館企画展「いろいろ夏の風物」関連事業

## 豊橋市美術博物館●岩瀬 彰利

近年、博物館の入場者数が減少しているとよく聞く。これは全体的な傾向であるが、人気作品や内容の濃い企画展では、まだまだ盛況である。だが入場者に占める子どもの割合は低く、子どもにターゲットを絞った企画も少ない。格式が高く子どもを拒む傾向のある博物館も存在するが、実際は子どもたちに博物館が敬遠されているのが現状ではないだろうか。

筆者は、子どもを対象としたあいち子どもミュージアムキャラバンがあると聞き、興味があったので、豊橋で行われた「漁師は海のおさかな博士」と新潟へ行った「総集編」に参加する機会を得た。「漁師は…」は、バスでの魚骨の話と若干のお手伝いをしたに過ぎないが、いろいろと感じるものがあった。まず、みんな熱心に参加していることに驚いた。今の子は魚などは汚がって手でつかめないと想いこんでいたが、みんな平気でつかみ、石器で魚を解体する時などは、気味悪がらず楽しそうに調理している光景が印象的であった。キャラバンは、探ってきた魚を観察して種類を調べ、石器を使って調理し、食べた魚の骨を遺跡出土の魚骨と比較して観察するという子どもに飽きさせないハンズ・オン手法を用いた企画であったため、子どもたちも楽しんで参加できたものと思われる。一方「総集編」の方は、筆者はバスの中で“余興”として子どもに縄文原体を製作してもらったり、新潟県に広く分布する火炎土器の話をした。だが、説明不足になった感は否めず、興味を持たせ、理解させるような工夫をしなかった点を反省している。

博物館が生き残るために、子どもへのアプローチが重要であることは大多数の学芸員が認識しているものと思われる。しかし、いざ実践となると企画・手法などで戸惑うことも多いことであろう。その点キャラバンに参加したおかげで、子どもたちがどんな時にどんな反応を示すか勉強することができた。この体験をもとに自分でも子ども向けの企画をつくり、親しめる博物館づくりの一助となればと考えている。

所属館名● 豊橋市美術博物館  
専門分野●考古学（縄文土器・貝塚）  
過去に行った子ども向け企画●  
夏休み考古展示会

## 安城市歴史博物館●岡安 雅彦

今回のキャラバンを担当させてもらったのは、毎年博物館でも土器づくりを行っていて感じるのであるが、基本的な粘土の扱い方が体で覚わっていない段階からいきなり土器の形を作っていくこと自体に無理があるので、どこまで教える側が手を入れていいのか、あるいは放置した方がいいのかということである。創作活動であれば自由に感じたままの形を作り上げてもらえばよいのであろうが、歴史博物館で過去の歴史をふまえた上で取り組んでもらうにはやはり製作方法・形を意識してほしいと感じてしまい、今でも結論が見つからないまま、迷いながらも手を入れ続けている。ただ日常では体験できないことを体験してもらうことで満足すればいいのかもしれないが、ものづくりが当時の社会の中でどのような位置にあったのかまで想いを巡らしてくれるようになればとも思ってしまうのである。しかしながら、実際にはどうすればよいのか自分自身ではわからないため結局できずじまいと終わってしまう。本当に理解してもらえるようにやろうと思うと週1回ずつの半年間くらいの講座でないとなかなか難しいのかもしれない。

### 子どもと博物館について

子どもたちにとって博物館は地域の歴史・文化に対する理解を深めてもらうための施設の一つであり、むしろある程度スタンスが固定化してしまっている大人たちよりも可能性を秘めた存在であると思われる。現在安城市内の小中学生は必ず授業の一環で見学するようにカリキュラムに組み入れられているが、子どもたちにしてみればこうした機会は受動的なものであり、こうした中からどうすればもっと地域の歴史に关心を持ってもらえるようになるのか、学校側と連携の方法について議論する場を設けて行く必要を感じている。

所属館名●安城市歴史博物館  
専門分野●歴史学・考古学  
過去に行った子ども向け企画●特になし

## 徳川美術館●加藤 啓子

徳川美術館の夏休み子ども向け歴史体験教室「みて、ふれて、つくって大名文化！」も「親しむ博物館事業」の委嘱を受け、同時進行だったため、このキャラバンの一部しか参加できなかったのが残念だ。しかし、「おさかな博士」では地曳網から、魚の生態観察、石器による調理、「焼く・煮る・炊く」ではドングリ拾いから、土器を作つて料理、「縄文・弥生の布」ではカラムシの採取から糸にして編むと、内容が複合的で、大変充実していて、感心するばかりだ。各企画とも史実に忠実で、各学芸員の手抜きのない企画に、徳川美術館の今後の企画にも参考になることが多く、収穫が多かった。

私はこの事業の中の「子ども向け事業実態調査アンケート」を担当した。公立・私立などの設置者別、館種別、規模の大きさ、職員数などの立地条件から、子ども向け事業は難しいとの回答が多くあった。実状はそうでも、まずは小さな企画から、各館園の特徴を生かしたワークショップが始まってほしい。このキャラバンや報告書がその糸口となってくれれば幸いだ。

また、今回のスタッフのほとんどが公立館の学芸員であったのが残念だ。各館園の立地条件がさまざまで、この事業の母体である「愛知県博物館協会子どもと博物館研究会」への参加が難しい館もあるだろうが、多くの館園からの参加者が増えることを望む。

今後、各館園の理解の上で、研究会を軸に、子ども向け事業に関する情報の交換や子ども向けガイドブックの作成、さまざまな分野別キャラバンの企画など、一層の展開を期待する。

所属館名●徳川美術館

専門分野●普及

過去に行った子ども向け企画●

1991年より夏休み子ども企画を実施。

1991年から

子ども向けワークシート作成、ギャラリー・クイズ。

1992年から

ボランティアによる子ども向け展示解説を追加。

1999年

文部省の「親しむ博物館づくり事業」の委嘱をうけ、上記の企画に参加体験型教室を開始。

1999年

「作って遊ぼう貝あわせ」、「親子甲冑手作り教室」。

2000年

「親しむ博物館づくり事業」の委嘱を再度うけ、「作って遊ぼう貝あわせ」「親子兜手作り教室」、さらに「刀・火縄銃バラバラ事件！！」を開催。

## 一宮市博物館●久保 稲子

4つのキャラバンに参加し、準備を除いて合計10日間をこのキャラバンに費やした。理念や理想を通り越して、ただただ疲れたというのが本音である。

「1館ではできないさまざまな側面からのアプローチができる」という利点があるものの、たくさんの館を巻き込むことによって生じる事務的な障壁や、依頼文の作成など、当初はずいぶん戸惑った。特に、「漁師は海のおさかな博士」は財政的な裏付けや、人的体制が整わぬまま準備が始まり、どうなることかとても不安であった。

そして、キャラバンを終えるたび、「内容的に甘かった」と反省することしきりで、「もっとできたかもしれない」という恐怖感にさいなまれた。時間的な余裕のなさとともに、メンバーが別々の館に所属し、行き来するのに時間を要するというのも弊害の一つだった。Eメールを使って文書や写真などは交換できるが、「ちょっと手伝って！」と体を送信できないのは至極残念なことであった。現実として準備不足を招き、参加者にどたばた劇を見せてしまったことは、申し訳ないことであった。

ただ、このような何館もの学芸員が携わるワークショップはこれまであまりなかったと思われ、現実として自分自身とても「楽しかった」のも確かである。一つのテーマでありながら、いろいろな角度から見ることができ、語ることができ、それぞれの専門分野を越えたところで一つにまとまる。また、同じ分野であっても、得意、不得意はあるもので（土器をつくるのは得意だが石器は苦手など）、お互いの情報や技術交換ができたこと、若い世代へ引き継ぐことができたことが非常に良かったと思う。

最近、博物館へのニーズに「何か体験できる」がある。「調査研究が仕事です！」とだけ言ってはいられない事情もある。しかし、例えば土器も焼けて、石器づくりも得意で、編布と弥生機を難なくこなし、カゴづくりもどんどん来い！、ドングリやトチノミもあく抜きして食べて、骨角器をつくらせたら右に出るものはいないなんていう考古学専攻の学芸員、縄文・弥生時代を研究対象にしていたとしても、そんな学芸員はまずいない。いたら会ってみたい。業者に丸投げすることができる博物館や、講師謝礼で処理できる博物館ばかりではない。とすると、これから博物館の普及活動には、私たちが目指そうとする協力関係が重要になってくるのではと思うのである。

所属館名●一宮市博物館

専門分野●民俗学（担当）、民具学・考古学

過去に行った子ども向け企画●

1992年から

毎年小学校3年生向け『くらしの道具-今と昔-』展開催  
編布・弥生機などの講座を逐次開催

## 尾西市歴史民俗資料館●小林 弘昌

今回の事業では、会計担当という名のもとに、自身としてはキャラバン総集編のみしか参加することができず、また、会計関係の仕事は現時点ではまだ完了していないため不安を感じつつも、担当の立場からいくつか記す。

博物館協会内の組織という単位でこの事業への参加を決めた時に半ば予想されたとおり、互いに離れた館に所属する職員が意志の疎通を図ることは困難が伴うことだったろう。簡易な内容のことは電話や電子メールなどを活用するにしても、実際に集まって打ち合わせをする場合の日程や場所をあらかじめ決めたり、それに伴う旅費の調達など、おそらく単独の単位で事業に参加することに比べてはるかに多くの手間を必要とした。

より綿密な内容を実現するためには、参加した学芸員の再三にわたる打ち合わせが必要であり、残念ながらそのすべてに対して充分な費用を支払えず、各人がそれぞれ抱えている本来の仕事とは別個のこの事業に対する熱意に加えて、経済的にも余分な負担を与えてしまったことは財布を預かる身としては大変申し訳ない気持ちだ。

事務手続きのことといえば、それぞれのキャラバンの担当者が私のもとへ経費に関わる領収書を送付したり、内容の説明のために電話をしたり、訪れたりといったことも大きな負担となっただろし、ささいなことといえば領収書の宛先が今回の事業の受け皿となった「愛知県博物館協会 子どもと……」といった長たらしい名称であったことによって、ついつい面倒で領収書を取りはぐれることもあったようだ。

私としては各館で行われた事業をほとんど金額の上だけでしか見ていないが、本来学芸員らの情熱だけでは補えない部分を金銭的に後押しするために設けられたであろうこの「親しむ博物館づくり事業」を実施した結果、かえってこの会においては参加した各学芸員の情熱と結束を新たに引き出すこととなったように思える。

次年度以降はこのわずかな後押しすらなくなるわけだが、たとえ少しずつでも今回の試みを発展させることをこの研究会の目的としていければと願っている。

所属館名●尾西市歴史民俗資料館  
専門分野●民俗学（担当）、文化人類学  
過去に行った子ども向け企画●  
平成6年度 夏休み親子歴史教室  
平成6年度 夏休み親子文化財めぐり

## 愛知県陶磁資料館●佐藤 一信

私は、企画開発委員としておこなった「どろんこやきもの探検隊 野焼き 大窯で焼く」の他に「漁師は海のおさかな博士」（当日のみ）、「わたしのパリはコレ！」（全日程）、「焼く・煮る・炊くは食の基本」（3日間）に参加させていただいた。実行委員として役割をいたいたるものもあり、また、ほとんど一般参加者同様に参加したものもあった。そこで私が得た自分のためのヒントは、たとえば次のようなものである。複数の館・学芸員によって企画と実現がなされることによって、（1）舞台裏の開放、（2）人脈・個々の持つ技術および器材・道具の共有化がおこなわれる。（1）について、私はこれまでにも他館の子どもも向けワークショップにあるときは一般参加者として、あるときは事前に主催者の了承をとって参加してきたが、今回得られたヒントとノウハウの量は格段である。それだけでも大収穫であったが、事例報告等からはもれてしまうような担当者の細かなこだわりの数々に、企画にかける熱意がひしひしと感じられ共感を覚えた。（2）であるがこれは私以上に考古・民俗専門の方は痛切に感じたのではないか。限りある予算と人材である。もし愛知県博物館協会を枠に互いの「得意技」をタダで貸し借りできたならば、今後の子どもと博物館活動の未来はかなり明るいと考える。さらに、私自身にとって今後の課題として、急務のものとしては、館の特色を充分に生かし、且つ展示・作品へ近づくための有効なプログラムづくり、長期的な課題として、特別な展覧会・イベントから通常の活動へどう位置づけてゆけるかということが挙げられる。当館の活動は、現時点でこの二つの課題への答えが見出せているとはいえないが、この課題を常に念頭におきつつ進めていきたい。

所属館名●愛知県陶磁資料館

専門分野●近・現代陶芸

過去に行った子ども向け企画●

1999年 こども美術館「やきものはっけんでん」

2000年 こども美術館「やきものはっけんでん2」

（本展覧会では、子ども用の作品ガイド「はっけんメモ帳」を作成、また展示室にて作品ガイドをおこなった）

# 参 加 記

豊田市郷土資料館●杉浦 裕幸

主催館のイベントではあるが、企画の時点から参画できるともっとよかったですのではないかと思う。また、県陶磁資料館の場合、バスを利用して館外へ出かけることが初めてで慣れていないことから運営上不手際が多く、経験のある館の運営をもっと参考にしてバス利用・館外見学を有効に使ってほしかった。

陶磁資料館でのイベントは今回のキャラバンの中でもっとも期間が長く、また、参加人員も多かったため、全体に関わるのではなく、いつも部分での参加・協力となつた。打ち合わせをすることも少なく、主催館の単なるお手伝いになる傾向にあり、今後同じような企画は少ないかもしれません、課題となろう。

今後の課題となる運営上の問題点は多々あろうが、前向きにひたすら慣れない事を陶磁資料館のスタッフはそれなりに努力していたことは伺える。また、それに答えられるよう我々も参加していたと思う。期間・日たちが長く、イベントが多様にあり、多くの子どもたち・家族と交流し、子どもたちやその家族が博物館の活動に望んでいることが全体を通しておぼろげながら見えたのではないかと思っている。それを自分の勤務する館でどのようにいかしていくかは多くの課題があるが、いろいろと参考になった。また、行政区にとらわれずに、今後も複数の館で何らかの形でこのキャラバンの一部のようなものが継続・発展していくことができれば、相互の館にとっても来館者にとってもメリットのあることと思う。

## 所属館名●

豊田市郷土資料館（豊田市教育委員会文化財保護課）

専門分野●考古学（集落研究など）、民具

過去に行った子ども向けの企画●

「親子で土器を作る」小中学生とその保護者を対象に行つた（平成11年度）

縄文土器と弥生土器の作り方・焼成の違いなどを講義／土器つくり、見えるところで乾燥、野焼き（約6時間）  
史跡めぐり／市内・市外の遺跡・博物館を見学（平成12年度ほか）

豊橋市美術博物館●高橋 洋充

「パリ・コレ」には、午前3組9人、午後5組18人の参加者であったが、これは定員よりも少ないものであった。しかし、会場の広さやスタッフの配置を考えると、逆にこれくらいの人数でよかったのではないかと思う。予定通りに10組の参加があった場合、1人当たりのスペースも減り、スタッフも1組に1人付けなかった。

さて、当日の午前と午後を比べた場合、人數的なものもあるかも知れないが、午後の方がより和気あいあいと賑やかに楽しめたという気がする。また、驚かされたこととしては、思った以上に子どもたちが積極的なことであった。スタッフにもどんどん話しかけてきたし、早くできた子は、見えない部分や台紙に地面を作り出したりもした。それにつられて知らず知らずのうちに親たちも集中していったのではないだろうか。

2時間という限られた時間の中で、平面の構図・色彩から立体を想像して作る、荻須の色を考える、そして作家の制作意図へ近づこうというねらいはある程度達成できたのではないかと思う。参加者はこれを機にまた一味違った絵画鑑賞ができると思う。

ただ、12月の報告会で荻須記念美術館の山田さんが話されたように、最低でもあと1時間プラスの3時間、夏休み期間なら1日コースで開催すれば、もっと作家の世界に入って行けるのではないだろうか。

この「親しむ博物館づくり事業」としては今回限りのものであるが、愛博協加盟館が協力して、単独館ではなかなかできない事業を開催していくということも積極的に行うべきで、今後も何らかの形で継続できればと思う。その際には、予算の問題もあるが、今回の事業全般にやや弱かった広報を積極的に行いたいと思う。また、この「パリ・コレ」を参考とし、自分の館でもこうしたワークショップができればと思っている。

## 所属館名●豊橋市美術博物館

専門分野●歴史学

過去に行った子ども向けの企画●

「吉田城再発見」（親子歴史教室・吉田城の石垣に記された刻印を、親子で探索…平成12年度）

## 高浜市やきものの里かわら美術館●橋本 久美

小学生の団体（特に低学年）が来館すると、舌ナメズリして出ていく私（そうでないときも多いけど）。彼らと展示を見ながら話していると、大変刺激的なのだ。もちろん、暴れて壊しはしないか、うるさくして一般客からクレームがこないかという緊張感はあるが、なにより、思ってもみない言葉が聞けるときがあるからやめられない。「作品を見るときは触っちゃダメで、ハアハア息をしてもだめなんだよね。」と殊勝に言った子が最近一番のヒットと思っているが、その他にも渋い黒色のやきものの前で腕組みをしてしばし黙考、「ウンコ焼。」と誰にともなくつぶやいた少年も。おもしろがってどうする！ちゃんと指導しろ！としかられても、私にとって彼らは興味深いお客様である。

市内のある小学校のある学年は、毎年必ずやってくる。そのため彼らは「作品を見る」姿勢がとても自然だ。低い位置から見た方が面白い作品は勝手に寝転んでながめている。友達同士おしゃべりしているように見えて、実は作品について話していたりする。だが、これも彼らが高学年になったからなのかもしれない。

保育園や幼稚園からも団体でやってきたことがある。このときあることに気付いた。子どもと先生だけの団体のときは「絵を見に来た」子どもたちなのだが、同じ園からでも親を含む団体になると「遠足に来た」子どもたちになり、館内はにわかに遊園地の活況を呈する。お静かにと言う声もかき消されてしまう。

でも、これは誰が悪いわけでもない。だって、子どもとというより人と博物館・美術館は、本当に長い付き合いを要するものと思うから。高浜市にかわら美術館ができて5年、毎年顔を合わせている小学生の彼らが、いつか大人になったとき、子どもとどんな風に当館を使ってくれるのかが私の今後の楽しみなのである。

所属館名●高浜市やきものの里かわら美術館

専門分野●美術

過去に行った子ども向け企画●

1996年 子どものためのワークショップ

「鳥を見つける」

1996年 親子陶芸体験講座

「とり皿をつくる」

1998年 かわら美術館夏休みコース

「かわら博士になろう」

1999年 夏休み小学生歴史教室

## 豊橋市自然史博物館●長谷川道明

個人的な要望もあるのだが、専門分野を越えた学芸員相互の連帯に関心をもっている。ずいぶん前になるが、大変興味深く拝見し、鮮明に記憶に残っている企画展を見たことがそのきっかけになっていると自分では思っている。それは、栃木県立博物館で行われた「鹿」をテーマにした企画展である。「鹿」という一つの動物を対象に、分類、行動、生態はもちろん、民俗、歴史、考古、美術などあらゆる分野からアプローチしたもので、当時、某県立博物館で自然・人文共同企画の可能性を民俗を担当する同僚と模索していた私には非常に鮮烈だった。専門の異なる分野が共同で行う企画はそれ自体新鮮であり、何よりも参加者に実際に多方面から情報と体験をサービスすることができる。私にとって子どもキャラバンは、まさにこの企画のワークショップ版だった。

私が参加したのは、「漁師は海のおさかな博士」と「焼く・煮る・炊くは食の基本」である。前者は海産魚類を、後者はドングリを取り上げたもので、共に主に考古学分野との共同企画であった。今更ながら、考古と自然は相性がいい。

異分野との共同企画は、現在の職場に移ってからも諦めたわけではないが、大きな総合博物館とは異なり、運営母体の異なる他館に相方を捜すとなると、行政的な問題もあってなかなか実現が難しいのが現状である。そこでリーダーシップを発揮してもらいたいのが、博物館協会だ。博物館協会という組織が主体になれば、分野の異なる複数館参加の共同企画も比較的容易であることは今回の一連のキャラバンが示してくれた。こうした企画は、いい意味で博物館協会の独自性と指導力を発揮する良い機会となるし、加盟館相互の質の向上、さらにはより高度で魅力ある普及活動への発展へと繋がる可能性を秘めている。下手な研修より実践的で勉強になったと感じた。相変わらず、博物館の世界では、学芸員たちが愚痴を熱弁しながらがんばっている。しかしその反面、最近の博物館協会は元気がない。愛知県博物館協会よ、もっと燃えて私たちを導いてほしい。

所属館名● 豊橋市自然史博物館

専門分野● 昆虫分類学

過去に行った子ども向け企画●

自然観察会「クワガタ・カブトムシと夏の雑木林」「冬の昆虫」など多数

# 参 加 記

豊橋市自然史博物館●藤原 直子

あいち子どもミュージアムキャラバン（焼く・煮る・炊くは食の基本！）は楽しかった。まず単純に、いろいろなドングリを集めることができて楽しかったし、土器づくりの体験も楽しかった。実はちょうど、勤務する博物館の近くにある小学校からの依頼で、ドングリをテーマにした校外学習に協力する機会があった直後だった。縄文の人々がドングリを食べていたことは知識として知っていたが、あんなに渋いドングリを、実際にどうやって食べていたのかは想像もつかず、私には興味津々のタイムリーな内容であった。来年からはきっと、もっと説得力のある話ができると思う。「ドングリは食べられるのだ！」と。自然史博物館にいる私が、考古や民俗が専門の学芸員から直に学べる機会など、そうあるとは思えない。とても貴重な4日間だった。他の博物館、他分野がご専門の学芸員の方々と知り合うことができ、いろいろ刺激を受けることができて、それが何より楽しかった。今後の子どものための博物館の活動に、今回の経験はきっと活かしていくと思う。

私は今年度採用されてまだ博物館に勤め始めたばかりということもあって、今回は事前事後の準備や事務処理など裏方の大変な部分をお手伝いしていない。このためワークショップ当日も参加者のみなさんと接することに集中でき、これは経験値のない新人には大変ありがたい条件だったと思う。私は専門とする植物の関連で、ドングリの採集を行った初日にお手伝いをさせていただいたが、あの日の日程は、ほぼ完全に参加者を1名増やしていただけだった。

お世話になった学芸員の皆様、本当にありがとうございました。

所属館名●豊橋市自然史博物館

専門分野●植物

過去に行った子ども向け企画●

・長野県南信濃村平成11年度生涯学習事業

自然ふれあいサークル

南信濃村のどうぶつ

自然探検隊 秋の青崩峠自然散策会

・長野県自然観察インストラクター派遣事業

美ヶ原観察会、三城牧場観察会 ほか

名古屋市見晴台考古資料館●水野 裕之

私は、仕事で埋蔵文化財（遺跡）の発掘調査を担当していて、土器、石器や遺跡についての考古資料を扱っている。発掘調査の資料は、整理作業や分析、関連調査などの後、報告書が作成されることになっている。そして、その後に考古資料として活用されたり、展示されたりするものがある。しかし、これらの資料は、一般の人の目に触れる機会は、多いとは言えない。今回、『あいち子どもミュージアムキャラバン』の分野を超えた総合的な教育プログラムのうち、「漁師は海のおさかな博士」の中で、考古資料の一つである石器を当時と同じ材料で復元したものを使い、魚をさばくという作業に参加できたことに良い経験ができたと感じている。

貝塚と呼ばれる沿岸部の近くにあった遺跡の中には、当時捨てられた貝殻などとともに、魚骨がみつかることがあり、食べた魚の種類をはじめ、昔の環境や漁撈の方法、どのように調理して食べたのかなど、次々と思いを巡らすことができる。これは、ごく自然な発想である。しかし、それぞれの疑問や問題について正確な知識を得ようとするときには、複数の研究分野にわたっていることに気付く。個々の分野には、奥が深く、もし、子どもに聞かれたとき、大人や学校の先生も手に負えないものがある。

小学校の3、4年生ぐらいになると、自分の興味や感心のあることがはっきりしてくる人もいるし、まだ漠然としている人もいるであろう。この、吸収力や感受性の強い年代には、今回の事業のような「本物」の体験によって、五感を通じてさまざまな刺激を受けたように思う。子どもたちにとっては、学校の社会ではない、学校の科目ごとの授業とは違った、過去や現代の社会の一員となったような自然な体験ができたのではないかと思う。

各博物館施設では、専門分野での講座やワークショップは、これまで、それぞれの実績もあり、これも望ましい在り方の一つであるが、今回の事業は、子どもと博物館との関わりとして、子どもと大人や親と一緒に参加でき、世代や分野を超えて、過去や現代の人々がそれぞれの環境の中で、自然の資源に対してどのように接して生きてきたのかを肌で感じながら追体験したり、知識を得ることによって楽しみながら、より理解を深めたり、ものを考えることができるプログラムであったと思う。事務局および参加者、関係者の協力によって、総合的な博物館の楽しみ方をつくりあげた事例として評価されるこ

所属館名●名古屋市見晴台考古資料館

専門分野●考古学

過去に行った子ども向け企画●

1998年度一宮市博物館講座「石器づくり今昔」講師ほか

## トヨタ博物館●宗沢 清美

「このビルの影の色は灰色だからぁー、赤と青と黄色とー、白もちょっと混ぜなきゃ！」キャラバンに参加した小学4年生の男の子が意気揚々とカラー粘土の混色と格闘していた。輝いた瞳が印象的であり、このキャラバンが求めていることは、この輝きだ！と感じた。

芸術の秋、11月11日に稻沢市荻須記念美術館で行われたキャラバン「わたしのパリはコレ！」には、芸術をもっと身近に感じて楽しもうと県内在住の親子9組が参加された。スタッフや親などの大人に囲まれた子どもたちは美術館という空間もあり、荻須画伯のパリのアトリエ復元や常設展示室を見学している頃は、つつましく余所行き顔だった。しかし、いざ親も子もそれぞれにお気に入りの絵を選ぶ段階になると絵を見る顔がぱッと晴れやかに変わっていくのが明らかにわかった。次に廃材の空き箱を絵の中の建物に合わせて工作し、マシュマロのような感触のカラー粘土を混色し付着させていく。最後にはパリの地図の上に展示し感想を述べるのだが、おとなしかった子どもたちも大人顔負けの感想を述べたり、工作中に没頭していた親御さんなど、微笑しいひとときだった。

展示物（ここでは絵画）を鑑賞することが、その後に待っている平面から立体への製作を自分の手で行うことになるため、観察力や思考力が深まり、作品に対する理解力を増すことが実感でき、今後の教育普及に対する意義を感じた。今回の事業では5つのキャラバンが実施されたが、(1) 専門分野の先生や学芸員など普段接する機会のないスタッフとの交流が子どもの知的興味を湧かせた、(2) 他館のスタッフとの交流が人員的協力以上に情報交換や連帯感を生んだ、と確信する。「博物館は知識の押し売りではない」と先輩学芸員に言われた言葉が「教育普及とは何？」と考えさせられてしまうのだが、自主的・能動的に行う参加型学習によって生まれた子どもの瞳の輝きを忘れないことが大切なのではないか。

事業の実施展開では企画開発委員の方々の豊富な経験と力量によって成功に導かれたのだと思う。そして、教育普及に対する熱意に大変感動し共感を覚えた。

今後ともよろしくお願いします。

- 所属館名 ● トヨタ博物館
- 専門分野 ● 担当／教育普及
- 専攻／米英語学・史学 [近世日本史]
- 過去に行った子ども向け企画 ●
- 2000秋 特別展「夢のクルマ大集合」
- 参加型展示『かいてみよう つくってみよう ゆめのクルマ』

## 稻沢市荻須記念美術館●山田 美佐子

稻沢市荻須記念美術館が顕彰している荻須高徳は、1901年に生まれ1986年に没した。この洋画家のパリでの活躍を知るファンは、年々高齢化し、若年層や、子どもたちへの知名度を上げることが今後の美術館の存続にもかかわる問題である。それでなくとも個人美術館というものは常にその作家の意義を現代のなかで位置付けていかなければ、顧みられなくなる危険性をはらんでいる。このような危機を解消するために、「子ども」という将来の利用者に向けての呼びかけは、年々重要となっている。

当館では1999年から、美術館への来館を促すために特別展の子ども用ガイドを市内小中学生全員に配布している。以前から学校に対して美術館への来館を促し続けてきたが、結果としては美術館が在る校区の小中学生の団体鑑賞が中心になっている。美術館から遠い学校は、移動が困難なようで、それならば個々に周知し、家族単位で来館してほしいと期待している。また、今回初めて開催した「わたしのパリはコレ！」は、鑑賞に有効であるとわかったので、対象者を変え、再度開催することを考えていきたい。

しかし、子どもへの教育普及活動を充実させるためには、内容や目的を把握した人材、人数が必要である。意欲やプランはあっても、なかなか実現には踏み切れない。今回の場合は委託事業という名目や、実行委員の協力があつてこそ成立したものであった。

博物館における教育普及活動は、博物館の本質的な活動である所蔵品の収集と保管、研究、展示を踏まえてこそ意義がある。学校教育で削られた時間の肩代わりではなく、「本物」を目の前にして、「本物」の持つ力を使つた教育普及こそが、博物館だから出来ることなのである。これからの中学生たちに必要な自由な発想と想像力を培う場所として、博物館は有効な施設である。これからも、当館の特徴を生かした子どもとの関わりを模索していくたいと思う。また、博物館の基本的な活動が保証されたうえでさらに子どもへのアプローチができるように、今回のような人的、予算的配慮が恒常に続けられることを国に対しても望むものである。

- 所属館名 ● 稲沢市荻須記念美術館
- 専門分野 ● 日本近世・近代・現代美術
- 過去におこなった子ども向け企画 ●
- 講座「親子で絵本を作る」
- 展覧会子ども用ガイドの作成「美術館へ行こう」(INAZAWA・現在・未来展4)、「おぎすたかのりものがたり」(常設展示の荻須高徳について)

# 参 加 記

愛知県陶磁資料館●神崎 かず子

「どろんこやきもの探検隊」のみの参加だったので、印象に残ったエピソードを一例紹介したいと思う。このプログラムでは陶芸家を講師として依頼したが、そのプロの目が見出したのは、土への鋭い感覚をもった一人の子どもであった。講師のことばを引用すると、制作でのちょっとした助言に対する反応が驚くほど敏感である、このまま素直にのばしてやりたい、ということであった。後で母親にこのことを伝えたところ、学校では不器用といわれて一度も誉められたことがないとのことだったし、実際、私たちにも彼の作品は未熟で荒削りなものに見えた。彼にとって初めてのよき理解者が陶芸家とは、なんともドラマティックで思わず興奮したという一件である。

こうした例はごくまれなことであろうが、2人の講師と子どもたちとのふれあいを見て実感したことは、子どもたちの意欲をかきたて、可能性を見出すのは、やはり「人」なのだとということだった。企画の内容にかかわらず、「生の資料と人」をフルに生かした出会いが博物館独自のプログラムであ

ると、改めて印象付けられた今回であった。

また全体としては、他館からの応援スタッフの助言や協力が大変ありがたかった。そしてこの経験を発展させて、今後は複数館の協力を得たより充実した普及活動ができるのではないかという希望が持てた。そのためにも、愛知県博物館協会を効率的に利用し、学芸員間の交流から各博物館をつなぐ協力体制が作られることを期待したい。残された課題や反省点は多いが、今回の成果を効率的に生かせる策として、この点のみを強調して記しておく。

所属館名●愛知県陶磁資料館

専門分野●近世陶磁史

過去に行った子ども向け企画●

2000年 こども美術館「やきものはっけんでん2」

(本展覧会では、子ども用の作品ガイド「はっけんメモ帳」を作成、また展示室にて作品ガイドをおこなった)

名古屋市博物館●犬塚 康博

「今後子供に博物館は大事なものである。博物館は親しいものである。博物館は面白いものであると云ふ思想を植付けることが必要であらうと思ふのであります」。

「子供が科学館にまみりまして、我々に対して先生と云ふやうなことをいはないで、をぢさんといつてをります。(略) 皆をぢさんをぢさんといつて非常に親んでゐるのであります」。

「親しむ」と「子ども」をキイワードにして想い起こすのは、ソウルにあった恩賜記念科学館である。同館は、大正天皇成婚25年記念の下賜金で昭和2年に開館した。冒頭の引用は、昭和6年の第3回全国博物館大会における、同館主事岩佐彦二の発言の一部である。多彩な活動をおこなった同館だが、特に「子供の日」は、昭和3年以降、夏・冬の休業期間を除く毎週土曜日、国歌合唱・映画・実験・講話というプログラムで実施されていた。このうち国歌合唱は、「朝鮮は独特の一つの習俗を持つてをりまして。集つて来る子供は、内地人の子供も、朝鮮人の子供もゐるのでありますから、特に国歌の合唱が必要であると云ふことを感じました」として、途中から加えられた。

博物館事業促進会(日本博物館協会の前身)の「記者」(おそらくは棚橋源太郎)をして「一般博物館の児童教育施設として殆んど模範的のもの」と言わしめた「子供の日」である。そこには、博物館があり子どもがいた。そして植民地支配があり、民族差別があり、天皇制があった。その時代の特質が集中して現れている。では、いまの時代の特質は、いまの博物館の子ども向け事業に現れているのだろうか。

遡れば、博物館における「子ども」というテーマは、長く博物館の教育機能にかかわってあり続けた。そして近年では、教育機能とは無縁ともみなせる子ども向け事業がおこなわれるようになっている。「子ども」という市場の開拓、つ

まりマーケティングやマネジメントのテーマとしてのそれである。そこでは、事業の過程よりも結果が重視される。あるいは「仕掛け(device)」という語を多用して過程が語られ、あくまで結果を生み出す「工夫(device)」が問題とされる。狩猟に例えれば、罠や囮である。狩猟民は狩猟技術を高度化させ、獲物を豊かにし、飢餓から自由になった。いま博物館は、狩猟民のごとく工夫を凝らしているに違いない。このシーンに、展示会社のスタッフが多様に関わっているのも象徴的である。これが、いまの子ども向け事業に現れる、この時代の特質、その博物館的部分である。

私たちの風景にも、恩賜記念科学館同様、博物館があり子どもがいる。そして、とりあえず植民地支配、民族差別、天皇制は見えない。では、何があるのかー。

50年後の人たちが50年前のいまを見るとき、どういう特質をそこに認めるのだろうか。50年後の人たちとは、いまの子どもたちである。彼・彼女たちのこれから50年間に発せられるであろう「いかに生きるべきか」の問いに、博物館は対応可能な存在としてあるだろうか。博物館が生きていくための罠や囮は、彼・彼女たちが生きていくための武器に転化するだろうか。そうした可能性をも、博物館は展望しているだろうかー。

「あいち子ども体験ミュージアム」の途上、そのようなことを想っていた。

所属館名●名古屋市博物館

専門分野●考古学・博物館学

過去に行った子ども向け企画●

1991年『原始・古代を遊ぶ』展開催

私の勤務する東海市立平洲記念館は、当市出身の江戸時代の儒学者・細井平洲の業績を顕彰するために、昭和49年3月に開館しました。当時は、知多半島に博物館的施設がほとんどなく、先駆的ではあったようです。

その後、時代はめまぐるしく変化しましたが、館の展示は、掛軸の陳列が中心の旧態依然としたありさまで、時代に取り残されるようになりました。追い討ちをかけるように、行革の名のもとに運営組織も見直しされ、経費節減にだけ重点が置かれたために、学芸員は施設を離れ、施設管理協会に委託されるようになりました。

ほとんど、見向きもされなくなった老朽施設でしたが、にわかに注目されるようになりました。

平成12年度は、細井平洲没後200年です。全国的に「おらがまち」の自慢というか特色を強調しようとする風潮が高まっていますが、当市もご多分に漏れず、「鉄とラン」と「細井平洲」をまち興しの素材にすることにしたのです。そこで、超不景気の緊縮財政にもかかわらず、平洲記念館の増築リニューアルをするはこびとなったわけです。

細井平洲を全国区にするというメインテーマのもとで、平洲サミットというイベントや、平洲賞というエッセイ公募、小説・研究書の刊行などを行いました。そして、最後に、平洲記念館の増築となったわけです。

江戸時代の儒学者で、親近感に欠け、歴史の第一線にいない影の功労者的人物をメジャーにするという使命を課せられました。しかも、一度来たらもうこないというのではなく、リターンの期待できることと、次代を担う子どもたちに親しみをいだかせる工夫を考え、低予算で10月のオープンまでに間に合わせよというのです。

学芸員資格はあるものの、ほとんど行政職として仕事をしており、学芸員としてのノウハウも持ち合わせず、また、扱う素材が素材だけに、子どもとどう結び付けようかと、半ば途方にくれていました。そんなとき、博物館と子どものかかわり方を模索する「子どもと博物館研究会」が発足するというお話をあり、渡りに船といいますか、一縷の光明を見出したのです。

研究会自体が手探り状態であったためでしょうか、はじめのうちは観念的な話等が中心で、ピンとこない集まりと感じていましたが、今年度になると、様相は一変しました。キャラバンと称して、いくつものワークショップを実施したのです。思わぬ事態や失敗談もあったようですが、実際にやったという手ごたえや、子どもたちの生の反応が、かけがえのない財産となり、また、次の企画へとステップする土台ができたのではないかでしょうか（平洲も、机上の空論を避け、林家の朱子学から野にはなれ、実学を重んじた折衷学派の儒者であります。単なる偶然ですが、昔、私が学生のころはやった、Let's begin!ということばを思い起こします。）。

私は、荻須記念美術館での「わたしのパリはコレ！」の一員でしたが、当日は仕事の都合で参加できず、ご迷惑をおかけし、また、大変残念でした。ただ、事前の打ち合わせに参加させていただき、荻須画伯の作品（建築物の絵画）を粘土で復元する予行練習を経験きました。参加する子どもたちにアドバイスできるようにと、色の混ぜ合わせや、土台となる箱との粘着の感触などを試したわけですが、やりながら、

平洲の山水画でも粘土でできないだろうかなどと、思い巡らしていました。

平洲という素材から離ることは難しいのですが、たとえば、江戸の子どもの遊び（竹馬・双六・こま・羽子板?）とかを体験させるワークショップはできそうです。

今回のリニューアルでは、「へいしゅうくん」というキャラクターも作成しました。少しでも親近感を持たせるのがねらいです。早速、この「へいしゅうくん」を携帯のストラップとして配布し、平洲記念館のホームページにも貼り付けました。作者の成田弥さんは、東海市在住で、愛知国体のマスコット「シャッチーくん」の製作作者です。

平洲を全国区にと企てたとき、二宮尊徳との比較検討をしたことがあります。絶対的な尺度というわけではありませんが、二宮尊徳と細井平洲は、恐らく歴史上、同等程度に取り扱われてもいい人物だったと思われます。戦前は、平洲も修身の教科書に登場したため、80歳以上の世代では全国区でした。ところが、戦後は、二宮尊徳も平洲も小学校の教科書からは抹殺されてしまいましたが、二宮金次郎の像は、いまだに小学校の校庭にあるところが多いのです。今時、率先して二宮金次郎を授業で取り上げることはないでしょうが、子どもたちが、これ何？と疑問に思うだけでも、相当な親近感というか、効果はあるのです。

また、少し前になりますが、バブル時代には、漫画家の姪川明さんにお願いして、平洲紙芝居を作成しました。それを使って、平洲の伝記を漫画風にビデオ作品として手作りで制作しました。子どもたちにも平洲という人物を理解してもらうための試みです。

この他にも、パソコンを利用して、平洲神経衰弱・平洲クイズ・平洲ツアーRPGなどを製作し、遊び感覚で平洲を学習してもらう仕組みを考えました。

とはいっても、受身的な素材よりも、体験的なものの方が効果が高いことは、ワークショップの例からも明らかですので、歴史博物館の使命からは逸脱するかもしれません、パソコンのソフト作りや、ビデオ製作等を子どもといっしょにできたらいいとも思っています。

研究会に参加して、他館のアイデア（双六を作ったとか）や最新情報（大阪キッズミュージアム・琵琶湖博物館にも自費で行ってきました）を得ることができ、有意義でした。自分のところが小さな館であることに甘んじて、他の批判はしても能動的には動いていないというのが、率直な反省ですが、次年度は、増築オープンも一段落しましたので、足手纏いにならない程度に、積極的に研究会に参加させていただければと思います。

私事ですが、小学2年と幼稚園の子どもがあり、特に雨の日曜日の過ごし方に苦慮しています。そんな親子に期待されるような博物館が、たくさんできたらいいですね。学校週休二日制も間近に控えておりますので。

所属館名●東海市立平洲記念館

専門分野●歴史

## あいち子どもミュージアム事業メンバー一覧

分類	事務局	会計	ca1	ca2	ca3	ca4	ca5	ca6	アンケート	報告書	氏名	所属
企画委員					○		○				岡安雅彦	安城市歴史博物館
企画委員			○								神崎かず子	愛知県陶磁資料館
企画委員				○	○						長谷川道明	豊橋市自然史博物館
企画委員				○	○	○	○	○	○	○	久保禎子	一宮市博物館
企画委員	○			○					○		犬塚康博	名古屋市博物館
企画委員			○	○	○	○		○	○	○	佐藤一信	愛知県陶磁資料館
企画委員			○								山田美佐子	稻沢市荻須記念美術館
企画委員	○							○	○	○	小林弘昌	尾西市歴史民俗資料館
実行委員						○					小島美智子	大府市歴史民俗資料館
実行委員			○				○				杉浦裕幸	豊田市郷土資料館
実行委員					○						藤原直子	豊橋市自然史博物館
実行委員				○							宗沢清美	トヨタ博物館
実行委員				○	○	○	○	○	○	○	加藤啓子	徳川美術館
実行委員				○			○				岩瀬彰利	豊橋市美術博物館
実行委員				○				○	○	○	橋本久美	高浜市やきものの里かわら美術館
実行委員				○							近藤直樹	東海市教育委員会
実行委員				○		○					高橋洋充	豊橋市美術博物館
実行委員					○						水野裕之	名古屋市見晴台考古資料館
実行委員	○		○					○	○	○	浅野弘子	名古屋市博物館
実行委員				○	○	○	○				天野幸枝	岡崎市美術博物館
実行委員											平岩里張	安城市歴史博物館
講師				○							瀬能 宏	神奈川県立生命の星・地球博物館
講師				○							樋泉岳二	早稲田大学
講師					○						脇田雅彦	藤橋村歴史民俗資料館
講師						○					脇田節子	藤橋村歴史民俗資料館
講師						○					森 泰通	豊田市役所
講師			○								加藤清之	陶芸家
講師			○								鯉江良二	愛知県立芸術大学

## 研究会メンバー一覧

氏名	所属	氏名	所属
高柳哲也	あいち健康プラザ健康科学館	水野礼子	日本モンキーセンター
稻垣満春	おかざき世界子ども美術博物館	—	熱田神宮宝物館
山田耕二	トヨタ博物館	小林弘昌	尾西市歴史民俗資料館
佐藤一信	愛知県陶磁資料館	後藤清司	豊橋市美術博物館
近藤義行	安城市歴史博物館	伊藤由美子	豊橋市美術博物館
岡安雅彦	安城市歴史博物館	岩瀬彰利	豊橋市美術博物館
近藤マリ子	衣の民俗館	岡田亘世	豊橋市美術博物館
久保禎子	一宮市博物館	高橋洋充	豊橋市美術博物館
山田美佐子	稻沢市荻須記念美術館	伊藤智子	豊田市郷土資料館
日野幸治	稻沢市荻須記念美術館	細井三保	豊田市郷土資料館
天野幸枝	岡崎市美術博物館	加藤貞亨	鳳来寺山自然科学博物館
伊藤和孝	蟹江町歴史民俗資料館	柿内賢治	名古屋港水族館
大野麻子	蟹江町歴史民俗資料館	木村有作	名古屋市見晴台考古資料館
水野知枝	荒木集成館	横山進	名古屋市東山植物園
橋本久美	高浜市やきものの里かわら美術館	大塚康博	名古屋市博物館
遠山光嗣	新美南吉記念館	浅野弘子	名古屋市博物館
岡田美穂子	知立市歴史民俗資料館	加藤和俊	名古屋市博物館
大野真規	知立市歴史民俗資料館	川合剛	名古屋市博物館
—	田原町博物館	伊藤優子	名古屋市美術館
工藤洋久	東海銀行貨幣資料館	富樫朗	和紙展示館
近藤直樹	東海市教育委員会	山下晋	—
加藤啓子	徳川美術館	高橋民子	—
小寺重孝	日本モンキーセンター	高橋英次	—

研究会を発足して2年が経とうとしている。行政体や館園の枠を越えて活動をしていくことは、苦難が本当に多かったが、楽しいことも、おもしろいこともたくさんあった。

通常、専門分野が同じである学芸員とは学会や研究会などで話をすることがよくあるが、分野が異なる、特に歴史系にとつての自然系、美術系など、もちろんその逆もだが、ゆっくり話をする機会はあまりない。

1日山を歩きながら、ドングリ1つをめぐって、子どもたちを間にはさみ、領域を越えて語り合う楽しさは病みつきになりそうである。講師として招くのではなく、お互いを補いながら、大切なことを子どもたちに伝えていく。そこで、お互いが気づかなかつた視点を見出し、展覧会や講座のテーマを次々に思い浮かべてしまう。絵に描いた餅が、この苦労を乗り越えて、もしかしたら食べられる本物に変わる可能性を感じ始めた2年目である。

もちろん、この活動を続けることができたのは、愛知県博物館協会という、とても大きな傘が守ってくれたお蔭である。また、アンケートをはじめ、さまざまな側面でバックアップをしてくれた加盟館の皆さん、ご協力いただいた講師やさまざまな組織の方々に感謝の意を表したい。

今、来年度から我々の真価が問われるのだと思っている。予算のない状態に戻ったとき、我々が愛知県で、いやもっと広域で、子どもたちと博物館の関係をどう問い合わせ続けることができるのか、これからじっくり考えていきたいと思っている。

## 謝辞

あいち子ども体験ミュージアム事業を実施するに際しては、文部科学省生涯学習政策局社会教育課地域学習活動推進室博物館振興係浅草澄雄氏をはじめとする文部科学省社会教育課の皆様をはじめ、多くの方々、機関にご協力を賜りました。末尾ながら、ここに深謝の意を表する次第です。(敬称略)

### 記

石原正敏 加藤清之 加藤伸也 鯉江良二 小林俊雄 鈴木章夫 瀬能宏 竹内俊道 桶泉岳二  
中野裕久 西田泰民 松岡敬二 森泰通 村田忠行 山川一年 脇田雅彦 脇田節子 渡邊裕之  
愛知県陶磁器工業協同組合 窯のある広場資料館瀬戸市歴史民俗資料館 十日町市博物館  
常滑市歴史民俗資料館 豊橋市外海漁業協同組合 長久手町古戦場跡資料館 藤橋村自然舍  
新潟県立歴史博物館 三谷漁業協同組合 愛知県博物館協会加盟館園 123館

## 愛知県博物館協会の概要

愛知県博物館協会は昭和37年6月に開かれた神奈川県博物館協会との交流会を発端に、昭和38年12月、愛地区博物館連絡協議会が結成され、昭和39年1月の結成総会において加盟館11館で始まった。これまで、多くの研修会やシンポジウムを開催し、40年あまりが経過した。現在加盟館123館、毎年「博物館等職員研修会」、「部門別(歴史・美術・自然)研修会」など積極的な活動を継続している。

あいち子ども体験ミュージアム事業報告書

2001年3月31日発行

編集●愛知県博物館協会子どもと博物館研究会

発行●愛知県博物館協会

〒467-0806 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1 名古屋市博物館内 TEL052-853-2655

印刷●株式会社 ミュゼ

〒108-0074 東京都港区高輪2-1-11-230 TEL03-5488-7781



発行●愛知県博物館協会 子どもと博物館研究会  
〒467-0806 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1名古屋市博物館内  
TEL052-853-2655 FAX052-853-3636